
Blue

pinkmint

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue

【Nコード】

N3619L

【作者名】

pinkmint

【あらすじ】

☆映画「MW」の設定を下敷きに、映画中には出てこない主人公二人の学生時代（16〜20才）を中心に物語にしてみました。

とある小さな島で親友として育った少年二人、結城と賀来。12歳の時、島に貯蔵されていた特殊なガスの漏えい事故が起き、島民はほぼ全滅、わずかな生き残りも日本当局の手によって惨殺された。二人は惨劇の中を生き残り、とある神父に助けられ、島を脱出して神父の住む東京の教会で育てられる。毒ガスはアメリカが湾岸戦争

用に開発したもので、島民の命をいけにえにした事件の隠ぺい工作には日本政府がかかわっていた。

結城は毒ガスの後遺症により人格が破たんし始め、倫理観のない凶暴な人格へと変化してゆく。事件の記憶と復讐心が増幅し、やがて人類全体への憎悪へ。その結城に命を助けられた賀来は、変化し続け暴走し続ける結城を救う道を模索する。

結城の美しさと才能に魅入られ、その悪の部分を解放しようとする格闘家の男、また結城を使って映画を撮影しようと試みる南米出身の少年。マフィアがらみのその父親。賀来を慕う孤児の少女。

さまざまな人間を巻き込みながら、結城は野望を達成させようとするが、彼に引きずられて良心を引き裂かれる賀来の姿に、結城自身もまた苦悩を深めてゆく……

Blue 1 (前書き)

この小説はオリジナルではなく、映画「MW」の設定を下敷きにした二次創作物です。映画は、巨匠手塚治虫の原作漫画「MW」をもとに岩佐仁志監督、玉木宏・山田孝之主演で二〇〇九年七月に公開されました。

映画と漫画に共通する設定は、ある離島にアメリカが湾岸戦争用に開発・貯蔵した毒ガスが漏れて島民が全員死亡するという大惨事が話の発端ということ、そしてガスを吸い込んだものの奇跡的に助かった(元)少年二人が主人公だということです。日本政府は事実関係隠蔽のため生き残りの島民を虐殺、或いはカネで沈黙を守らせます。生き延びた結城美智雄は復讐の鬼となり、賀来祐太郎は聖職について祈りの日々を送ります。復讐をこえて世界滅亡をたくらむようになった結城と、彼を愛するが故に引きずられながらも止められない賀来との悲劇的な戦いが、この映画のテーマでした。

原作ではたまたま島を訪れた賀来が幼い結城の無垢な美しさにひかれ、無理やり性的関係を結んでしまいます。その行為はのちのち賀来の十字架となり、結城は自分が良心を失った原点が、毒ガスによる後遺症とともにその行為にあると賀来をせめることになります。けれど映画では設定そのものが変えられ、二人は島育ちの幼馴染。賀来はただ命を助けられたから結城から離れないという説明になっています。同性愛要素が抜いてあったのには、どうやら映画化に当たって、手塚原作は歓迎するが同性愛描写は禁止というスポンサーの条件があったらしいのですが、賀来の十字架を取り去ってどこがMWなのか。世間の批判はその設定に集中しました。けれど映画を鑑賞してみて、その制約が結果的にプラスの方に働いた部分もあると、私には思えたのです。

漫画と違い、言葉少なに結城に従う賀来から透けて見える無償の愛

の残骸、結城との関係性の切なさ。この不親切な映画の、かゆい所に手が届かないのに確実にそこにおいしいものがある。という絶妙の隠し技に身もだえし、ならば自分で補完して自分なりのMWを完成させたい、そんな思いで書き始めたのがこの小説です。

映画の中に私が幻視した、結城の魂にこもる悲しみの気配と賀来への愛。それを、映画でも漫画でも描かれていない二人の学生時代から掘り起こし、丹念に追ってみたいと思い、この話を書き始めました。

作中の人物は、主役の結城・賀来・育ての親の村越神父以外はすべてオリジナルです。二人の出会いからの設定はすべて、漫画ではなく映画を基準にしています。

さて、狙ったものが小説でうまく表現できているか。そのところは読者の皆様の判断にゆだねたいと思います。

Blue 1

>i7255—1094<

けたたましい犬の吠え声で村越神父は眼を覚ました。

時計を見ると午前一時、声は教会の中庭の鶏小屋のあたりから聞こえてくる。

続いて羽のばたつく音と鶏の鳴き声、鋭い吠え声、ガタガタという小屋をゆするような音。

（鶏が野犬に襲われている）

神父は傍らのガウンをはおってバットを手にすると、宿舎の勝手口に向かって走った。鶏の甲高い悲鳴がとどろく。昨日の雪が夜半に凍り、サンダルをはいた足元でざりつと固い音をたてる。頭上には凍てついた星座が震えるように瞬く。植え込みの向こうに小屋を見た瞬間、犬の甲高い悲鳴が二度聞こえ、そしてあたりは静かになった。

小屋の前に、背の高い細身の人影を認め、神父は足を止めた。

「……結城くん？」

薄手のコートを羽織った少年が、足元の犬を見下ろしている。

教会で預かりの身になっている、十六歳の高校生。

雪灯りの下、顔に乱れかかる髪の間に見えるほほの白さが目立ち、睫毛の長い伏し目がちの目は、光源のわからない光を乱反射するよういきらめいていた。

今日は学校が引けてから姿を見ず、ほうぼう手を尽くして神父が探していたのだ。

「心配したよ！どこへいったのかと。……その話はあとだ。野犬を、君が退治してくれたのか。可哀相だが、仕方がないな」

結城は血走った眼をこちらに向けた。

「野犬のくせに」

低い声で呟くように言う。

「腹が減っているのに、鶏小屋を噛み破ることもできないで」

「……え？」

「だから戸をあけて食べやすいようにしてやったのに、吠えるだけで。自分で獲物も獲れない、缶詰しか食えない、そんな飼いだ崩れは死んだほうがいい」

言うだけ言うと足元の犬を蹴飛ばし、返り血を浴びた手を振るって、宿舎のほうに悠然と歩いて行った。神父は声もなく、雪の庭に散らばる鶏と犬の遺体を見つめた。

四年前、神父は二人の子供を同時に引き取るようになった。どちらも十二歳。

抱き合うように身を寄せていた、痩せこけた二人の印象を今も忘れない。

二人は伊豆諸島のある島の出身だった。今は無人島の、沖之真船島。人口六百人のこの島は、山火事によって住民のほとんどが焼死するという大惨事に見舞われ、以来国から立ち入りを禁止されていた。教区ということもありたびたびこの島を訪れていた村越神父は、住民のために祈りをささげようとこっそりと上陸したのだ。

そこで、奇跡的に生き残っていた、二人の少年がいた。背の高いほうの少年の胸には、ロザリオがかかっていた。

それが、幼児洗礼を受けていた、結城美智雄。

自衛隊が引き揚げてから二週間たった。体の小さなもう一人の少年を抱きしめ、最初は敵でも見るように神父を睨んで近づいてこなかったが、危害がないとわかると、安堵のあまり倒れるほどの緊張状態だった。

やがて、彼らの語る島民の最後がメディア発表と大きく異なることに、神父は気づく。

白い服を着た宇宙人たちが、島民を撃ち殺していた。かすかに妙な匂いの空気が漂い、死ぬほど気分が悪くなった。死体の山を焼いて

いた。最初は山火事なんかじゃなかった……

あまりのことの大きさに、隠ぺい工作の巨大な裏の力を感じた神父は二人にすべてを胸に閉じ込めるようきつく言い渡し、島の話はタブーになった。そして二人は、一生人に言えない秘密を抱えて生きるという十字架を背負わされた。

たった十二歳で。

二人は村越神父の教会の施設に住み、奨学金を得てカトリック系の学校、聖ペテロ学園に通うこととなる。学園は、住宅街を見下ろす高台に建つ、少人数制の男子校だ。古く品のあるチャペルとレンガ造りの図書館がまるで外国の映画に出てくる学校を思わせるが、通う生徒は家庭の方針で入れられたもの、雰囲気にはかれたものと様々だ。だが学園としては、将来神職につく決意のあるまじめで優秀な生徒をとくに優遇していた。

そのひとり、賀来祐太郎。それが島で生き残ったもう一人の少年だ。

彼のお気に入りの場所は、ひと気のない図書室の一角だった。

窓辺の山茶花や椿にふっさりと雪が積もり、可憐な朱色が見え隠れしながら揺れているのが見える。放課後のひと時、遠くに生徒達の声聞きながら、額にかかる前髪をかきあげ、時に宙に目を泳がせては古びた詩集の一つのページを見つめ続ける。祐太郎の好きな時間だ。

睫毛の長い漆黒の瞳は十六という年齢に似合わぬ影を宿し、その奥に、澄んだ初冬の空気が凝っていた。

不意に窓のすぐ外で歓声上がる。雪合戦が始まったようだ。小さく眉をしかめ、細く開いていた窓を閉めようと立ち上がった、そのとき。

「大槻、大丈夫かっ？」

「血が出てるぞ！ おい、聞こえるか？ 動けるか？」

ただならぬ叫び声に、さっきの声が歓声ではなく悲鳴だったことを察した。

しゃがみこんで倒れている少年に話しかけていた生徒の一人が、大
きめの石ころを手に立ち上がった。

「雪の中にこれが入ってた」傍らに立つ生徒に詰め寄る。

(……結城。学校に来てたのか)

賀来は窓のこちら側で、胸の妙な高まりを覚えた。

「お前が投げたんだよな、結城。雪合戦に石入れるとか、何考えて
るんだよ」

「俺は雪合戦はしていない」結城は抑揚のない声で答えた。

「人の通り道でうるさいからどかしたんだ」

「どかすって……」少年が声を呑みこむ。

「勝敗をつければゲームが終わりなら、雪より石のほうが早いんじ
ゃないか」

口元にうっすらと笑いが浮かんでいる。倒れていた少年、大槻琢也
がよろよろと身を起こして言った。

「先生呼んで来いよ、こいつ話しても駄目だ。逃げんなよ、そこに
いろよ、結城」

口元を押さえながら鼻声で叫ぶ。抑えた手の間から血が流れ落ちて
いる。

「センセイヲヨンデコイヨ」

結城は少し横を向いて、声色をつけて繰り返した。大槻の頬にさっ
と朱が走る。

「あいつはどこだよ、腰巾着のガライは？ 職務怠慢だろ、職務怠
慢」

大声でどなり散らすと、図書館の観音開きの窓がかたりとあいた。

「僕はここだよ」

まっすぐ窓辺に立ち、結城を見つめる。

まさか急に当人が登場するとは思わなかった周囲の少年たちは戸惑
った。

結城は茶色い髪を風になびかせながら、透き通った瞳で賀来を見つ
める。いつも妙に赤い唇が、今日は雪の中で一層鮮やかに映る。風

に乗って、鈴蘭の香りに似た結城の体臭がかすかに届く。名指しがたい思いが賀来の胸いっぱいに広がり、胸の痛みをこらえるように、ただ結城の瞳を見つめ返していた。

天上の高い校長室で、今時珍しい薪ストーブが音を立てる。向かい合わせのソファで、坂崎校長と向かい合い、うつむきがちに三人の少年が座っていた。

「大槻君は前歯を折った。とりあえず学校保険のほうから治療費は出るが、後でご家庭に謝りに行かなければならないな」
誰にともなく、校長は穏やかな声で言った。

「伊勢君、きみはもういい、友達の容体も気になるだろう。まあ戻ってもあまり大げさに触れまわらないように」

少年は、校長にそう促されるとどこか不満そうに立ち上がり、一礼してからあからさまに結城を睨み、部屋を出て行った。

「さて、と」

校長は両手を握って二人に向き直る。

「どうしたね、最近。君がおかしいと、あちこちで聞いてはきたがこれでは村越さんも心配なさはずだ」

結城に視線を向けながらはつきりした言葉で切り出す。静かながら、逃げは打たせないという強い調子があった。

「いちいち言わなくても分かっていると思うが、君たちの身柄は村越神父の後ろ盾があったから私が引き受けた。いわば彼の人望に君たちは負うているところが多い。それに当初の成績は君たちは抜群だった、特に、結城くん」

結城は目をあげて校長を見た。

「君はこの学園にいろのがばかばかしくなるんじゃないかというほどの成績だ。だが、行きつく先は神職。その約束があるから、学園も金を出している。」

村越さんも、教会の施設を君たちの宿舎として提供してくれてる」「いずれ返します」

唐突に結城は口を開いた。

「やはり神職は望まないか」

「それを今言う気はありません」

賀来は口をはさむタイミングを計りかねてはらはらしていた。今度こそ、この学園にいらなくなる爆弾発言を彼がしでかすのではないかと。

「君は健康面にも問題があるね。それも君を不安定にしている一つの原因だろうか」

結城は不愉快そうに眉を寄せた。

「最近また村越さん宅で発作を起こしたそうだが。だね、賀来君。最近ではいつだった」

ここで振るのか。一番嫌なタイミングで、また報告係か……

「はい、あの、ゆうべも……」

「昨夜？ よく学校に来てるな」

「だから、まだ気分が悪かったんじゃないでしょうか」

「機嫌が悪いのと同調するのかね」

（……違う。発作が起きるたび、彼は命を削り、そしてひとときだけやさしくなる。昔の彼に戻る。そのあと、加速度的に冷たくなる……）

爆発寸前のような青い光がいらした結城の全身から出ているのがわかる。

「彼は普通じゃなかったと思います、本当なら学校に来るべきではなかったんです。気分が悪くて早く家に帰りたくていらしたんだと思います。大槻君の家に謝りに行く時は、ぼくもいっしょに行きます。必ず行きますから」

一気にまくしたてる賀来に気おされて、校長はぺこりと下げたままの賀来の頭をただ見下ろした。

「無届の欠席、遅刻。深夜までの徘徊、暴力沙汰。教師に対する不遜な態度。

日に次いで君には問題が増えている。普通の学校では許されること

でも、神の子であることを第一義にするこの学園では大目に見られないこともある。賀来君の頑張りでかばえる範囲にも限度がある。結城君、よく心得ておきなさい。

恩人と親友を苦しめてはいけないよ」

「必ず行きますから？　ひとりで行けよ」
外に出ると、結城は顎を上げてつぶやいた。

「……気に障ったなら謝るよ」

反射的に言いながら、賀来は胸の中で呟く。

いつもいつもひとりで問題起こして、その後始末を僕がしてるからここにいられるのに……

「結城が学校に来てるとは思わなかった。朝は寝てたから。もういいの」

「その靴どうした」

結城は思い詰めた表情の賀来を置いていきなり足元に目線を落とし
た。

「ああこれ。バザーの売れ残りから古いの片方もらったから」

「全身古いでそろえてるのはお互い様だよ。なんで左右ばらばらなんだ」

「昨日帰ろうと思ったらなくて」

「またか……」

結城はため息をついた。靴隠しはいじめのスタンダードだ。

「一つは自力で見つけたんだ、体育館のひさしにあった」

「いつもいつも、誰にやられてんのか見当ついてるのか」

「つけたってしょうがないし、相手だってひとりじゃないし」

身寄りもなく、特待生として授業料を免除され、校長にひいきされ、成績優秀な賀来はいろいろな意味でいじめの対象の条件をそろえていた。結城にある殺気がないぶん、余計に。

「じゃあ俺が教えてやろうか」結城はいたずらっぽく笑った。

「わかってるんだ？」

「お前ほど鈍くない」

結城は横を向いて薄く笑った。賀来ははっとして結城を見た。結城は踊るように足を速めてさっさと帰ってゆく。教会と反対方向に。

「結城！」

「どうせなら俺の分も謝りに行ってくれ。それと、今日も遅くなるから」

「どこに、だってまだ体が……」

結城のほっそりした背中はまだ曲がり角を曲がって見えなくなっていた。

村越神父とともに深々と頭を下げ終わると、りっぱな鉄製の門を開け、賀来と神父は大槻家の邸宅を出て底冷えのする路地に出た。裕福な家の余裕か、家族は思いのほか穏やかに二人を送り出した。琢也は最後まで出て来なかった。頭上に冬の星座が輝いている。

「結城君は来なかったな。来ないどころか、また行方不明か」村越神父がつぶやいた。

「君も大変だな」

「いえ。……別に」

ひと気のない公園に差し掛かると、神父は自動販売機で温かいコーヒーを求め、賀来に差し出した。歩きながらプルトップを引き抜くと、甘い香りの湯気が立ち上る。

「発作のことだが、彼はもつとちゃんと大きな病院で診てもらったほうがいいんだ。が、何より本人が拒否するもので……」

「恐れてるんだと思います。何か分かってはいけなことが周囲に漏れたらと」

「それは、……私にも何も言えないところだ」

二人はしばらく押し黙った。

「きのうは大変だったろうね、君だけで。私は教区の集まりがあった家にいられなかったし……」

（結城、救急車呼ぼうか、やっぱり）

（呼んじゃだめだ、絶対）

荒い息の中で繰り返していた結城の苦しそうな表情を思い出す。

（……結城、何をしてほしい？ 僕には何もできない）賀来は泣きそうになっていた。

あの島でガスを吸ってから、結城をたびたび襲う悪夢のような発作。口を押さえ、胸をかきむしり、目を充血させて身もだえする。幾度見ても胸が張り裂けそうな苦しみようだった。

（歌、うたってあげようか。僕がいやな夢を見るとよく歌って慰めてくれた……）

（いくつだよ、俺今）汗まみれで、結城がちよっと笑う。

（ほかになにもできないんだよ）震える声で、冷たい結城の指を握る。

（賀来、島の歌は歌っちゃだめだ。うっかりどこで口に出るかもしれないから、忘れたほうがいい）

小さな声で言い終えると、ああ、と苦しそうな息を声ごと漏らして結城は横を向いた。

……歌うと、殺される。幼い安らぎだった島の子守唄。

「君たちが、二人でよかった。一人だったら、記憶の重さに耐えられなかっただろう。これも神の思召しか」

神父はたどり着いた教会の門を開けた。

「神父様」ふいに賀来は足を止めた。

「結城を助けられないでしょうか。いや、助けなきゃならないんです、ぼくは」

神父は思い詰めた賀来の目に見入る。

「あの日、風向きの運で、僕らのところにはあの空気が来てなかった。魚とりに夢中で、夕方気付いた時は村から煙が上がって……」神父は思わずあたりを見渡した。

「賀来君、そのことはここでは」賀来の肩を抱いて教会の中へといざなう。

「でも勘のいい彼は僕の服を脱がせて、口と鼻をふさいでくくって

くれた。恐ろしさで足がぐくぐくと、泣いてる僕をおぶってくれた。泣くな、しゃべるな、僕がいるからって」

賀来の声が震え始める。神父は聖堂の入り口を閉めた。

「あの荒い息を覚えてる。彼は僕の分もあの空気を吸ったんだ。僕は自分の服を脱ぐべきだった、そして彼に差し出すべきだった。でも寒かった、怖かった、彼の背中で僕は自分のことしか考えてなくて。あのとき……」

握った掌に爪が食い込む。痛みのみでいいだけではなく、涙がにじんでくる。

「僕が服を脱いでいたら」

責めたらいい。なにかもぼくのせいだとののしってくれたらいい。でも結城は一言も言わない。そして変わってゆく、僕の知らない結城に。

肩に静かに手がかかる。

「……服を巻いたくらいで防げるものでもないはずだ。それは運命だ、主の御心なんだよ」

（そんなもの！）

喉まで叫び声が出そうになる。この世に神がいるなら、僕らが見た光景はなんなんだ？

「だが。結城君が変わっていつているのは確かだ、あのままではない」

「……そう、思います」

賀来には四年前がはるかな昔に思われた。東京に出てから一年くらいまでは、花と動物の好きな、好奇心と責任感旺盛なただの大人っぽい少年だった。悪夢を見て眠れない夜は、僕の耳元で昔話を次々にしてくれたのに……

神父が決心したように口を開いた。

「先週、鶏小屋の鶏が野犬に殺されただろう。現場を私が見つけて犬を退治した」

「そうでしたね」

「……あれは、鶏も犬も結城君がやったんだ」

「え？」

賀来は思わず声を上げた。

「どうして、本当に？」

「飼い犬崩れは殺されろと。それだけだ」

沈黙の中、神父はポツリとつぶやいた。

「彼の中で、そうしたことには、理由は要らなくなってる。君も、接し方を変えたほうがいいかもしれない」

賀来は頭上の十字架を見つめた。

Blue 2

ブルーグリーンの鉄製の扉には、訪れるものをそれだけで拒否しているかのようなよそよそしさがある。雑居ビルのそのドアには小さくただ一枚「闘骨流拳法」の文字。結城は濃紺のダッフルコートポケットに右手を入れたまま、左手でカメラ付きのインターホンを鳴らした。

「はい」

数秒おいて低い男の声が答える。結城は黙ってカメラを見つめる。ガチャリと重いドアが開き、筋肉質のいかつい、背の低い中年男がドアを開けた。亀の腹のように複雑に割れた腹筋に、薄いタンクトップがへばりついている。

「今日は誰も？」

「君だけだ、BLUE。言っただろう」

男は今しがたまで持ち上げていたダンベルを脇へ蹴った。

おそらく二世帯分ぶち抜いたかに見えるそのがらんとした部屋は、半分がだだっ広いフローリングでトレーニング用の空間のようになっており、本棚で仕切られた別空間は絨毯敷きで、ゲーム機器や漫画やビデオDVD、冷蔵庫が並んでいて、整然とした引き篋り用のプレイルームのようだった。

「今日はトレーニングはなしだ。体調を崩したそうだね」

「もう大丈夫です。それで、例のものは……」

「まあ、座れ」

男はホームバーカウンターへ行き、コーヒーメーカーから素焼きのカップにコーヒーを落とした。

結城はマフラーをとき、ダッフルコートを脱ぐとハンガーをくぐらせ、慣れた風に壁のコート掛けにかけた。トレーニング室の一角にある粗末なソファに腰を下ろす。

「君は今まで俺が教えた中で一番上達が早い」

「そうですか」

気のない様子でコーヒーを受け取ると、結城は一口すすった。

「そうだな、タイミングをずらさなければ、ひどく大男でない限り素人相手なら二、三人までは倒せるだろう。あとは体力だ」

コーヒーの表面を見つめたまま、結城はつぶやいた。

「二、三人……」

「誰を考えているのか知らないが、君と同年代のがきんちよなら本気を出せば五、六人はいけるかもな。というより」

自分のコーヒーを一口すすると、どこか楽しそうに続ける。

「憎しみからの戦いなら、手加減を覚えたほうがいい。君の持つ才能と殺気からすると、一人二人殺しかねないからな」

不意にインターホンが鳴った。室内からカメラを覗き、男はめんどくさそうに言った。

「だから今日は駄目だといったろう、あさってだ、あさって。ふくれるな。特別とか、そんなんじゃないから。あさってならいいから」
こちらに向き直ると、鼻で笑いながら言った。

「恨まれてるぞ」

「僕が？」

「恋人気取りの勘違い坊やも何人かいたからな。最近俺が冷たいってんで不満を募らせてるのもいる」

「そういえば、家出中だっていつてた二人は」

「ああ、ふた月も置いてやったから十分だろう。今週はじめに二人とも追いだした」

「技を教える暇はありませんでしたね」

男は五分刈りの頭をざりつとなでた。

「拳法を教えるなんてのは口実で、あちらにとってもただのきっかけだからいいんだよ。行き場のない家出坊主と、家に居場所のない甘えん坊と、チカラのほしいはみ出しものと。もともと俺と同じでそっち好きの少年もまあ、いるにはいるが」

傍らのメンソールのタバコをくわえて火をつける。

「そつちじゃなくても、ここに通えば技と小遣いと仲間が手に入るなら、声さえかければたいいのちよつと不幸な子は自分の身くらい投げだすもんだ」

結城は自分の指先を見つめている。

「こんな、故郷に捨てられた、腐った変態オヤジでもだ」

結城に近づく、不意に太い指で細い顎を持ち上げた。

「だが君は違う。違う人種だ。君だけは、手をつけさせてもらえなかったが、俺も待った。珍しく」

「……あれは、まだ手に入らないんですか」

男は手を放し万歳するように顔の両脇で広げた。

「わかったわかったよ、そのためにきたんだろ。俺もその方面には知り合いも多いから連絡はしたが、つては一つだ。たぶん一週間以内には手に入る、それじゃ遅いか」

「ならいいです」

男は煙草の灰を落とすと大袈裟に上を向いた。

「君が自分からひと払いをしてまであいたいと言ってくれたんだ、今日こそはいい返事だと思ったんだがなあ。まあ俺は、君相手に限っては紳士的だし」

煙をひと吐きすると、

「一週間。こちらもそのくらい待つよ、ご褒美は」

ややあって、結城は何か決意したように語り始めた。

「僕はいま、心をなくすことの訓練をしているような気がする。自分の意思でなく、何かほかの意思で」

「ほかの意思？」

短い沈黙があった。

「僕の目的や理想と一致するなら、それがだれの意味であろうと歓迎するし、利用もする。でもバランスが問題なんだ。半月前、鶏と犬を殺した。いつもみたいにあだ殺したかったから。その時、勃起してたし、イきそうになった。というより、いつもそう」

男は驚いたように結城の、少女のように繊細な白い横顔を見つめた。

「犬でも鶏でもいい変態がいるっていうけど、僕もそうなのかもしれない。両方ぶち殺したところを神父に見られた。危うくあいつも勢いで殴り殺すところだった」

「それは、……まずいな」

内心の動揺を隠すように、男はつぶやく。

「そう、まずいんだ。今ことを起こすわけにはいかない。それは僕が力をつけてから、ずっと先のことだから。今はおとなしくしてなぐちやならないのに、僕の中の何かが暴れ出す。ときどき自分でもそれを抑えられなくなる。見境なく何もかもを壊しそうになる」

しばしの沈黙の後、男は言った。

「はるかな先に何をする気か知らないが、そのためにいろんな欲望や殺気をため込むことは難しいだろう。自分を解放する場も必要だ。見たところもう爆発寸前だな、いろんなことが」

結城は長いこと、手の中のコーヒーを眺めていた。カップをおくとぽつりといった。

「解放してくれますか、あなたのやり方で」

男は意味を測りかねて結城の顔を見ていたが、言葉を探しながら口を開いた。

「それは、俺の都合のいいように解釈していいのか」

「自分で自分を制御できないんだ。僕を止めてほしい。というより、誰かに、めっちゃくちゃにされたい。粉々に。なにもかも、僕の何かもが残らないくらい、傷つけてほしい。罪人を罰するように。だからここに来たんです」

男はしばらく結城を見つめ、赤い下品な灰皿に火を押し付けると

「おいで」

奥の寝室にいざなった。

ブルーのカーテンに染められた青い部屋で、男は結城のシャツをゆっくりと脱がしていった。

「……君が、何よりほしかった。きれいだ、本当に」

長い睫毛をあげて恐れることなく自分を見つめる美しい少年のほほに、顔を傾けてそっとキスをする。思いがけない場所へのくちづけに、結城は眼をしばたいた。

「君は殉教者じゃない。楽しむんだよ、いいか、楽しむんだ。それで君は救われる」

いきなり背中到手が回り、強い力で抱きすくめられ、息が止まると思う間もなく男の唇が押し付けられた。両頬を男の手が包み、口の中に他人の舌が入ってくる異様さに身がすくむ。永遠とも思える時間、彼の舌は結城の口の中を翻弄した。息の仕方がわからない。彼の顔が離れると、息苦しさに涙ぐみながら思わず声混じりのため息をついた。

「いい声だ」

男はそのまま結城を、クイーンサイズのベッドの上に倒していった。

「え、あの……」

結城が少年らしく戸惑う。

「体……僕は洗ってきたけど」

「俺のほうか？ お前は罪人なんだろう、贅沢を言うな」

首筋に男の唇を感じながら、いつも発作の後に目に浮かぶある光景を脳裏に描いていた。

逃げ惑う人々、飛び散る血しぶき、銃弾、火炎放射器の炎、きれいな地球のあちこちに咲く、何かの爆発の火花。あれは核の閃光か。やがて光は地上を覆い、地球は視界すべてを覆う美しい光の玉になる。

（何もかも消えてしまえ、何もかも）

ふと、懸命に結城の手を握る賀来の泣き顔を思い出した。

（……賀来。聞けば驚くだろう。夢の中で、何度もお前を犯した。

俺はきつと狂ってるんだ。だから傷つけないために。お前に何も求めないために。俺の中の獣に襲わせないために）

忘れようとした歌の一節が頭に浮かび、結城は必死でそれを振り払った。もう体には、何もまわっていないかった。

「愛は暴力じゃない。だが君がそれを望むなら、君の中の獣欲に罰を与えてやろう」

不意に両手が頭上でまとめられ、革の感触の手錠で拘束される。驚いて目を開けると、再び男の顔が迫る。噛みつくようなキスは、さつきよりさらに激しい。やがて、体の中心が他人の手に乱暴にとらえられ蹂躪される初めての感覚に、結城はきつく眼を閉じた。

外で車のドアがしまった気がする。ややあって、階段を上ってくる足音に賀来がドアの外を見ると、薄闇の中、通学カバンをそっと床に置いて、廊下の簡易洗面所に寄り掛かるように立つ結城の姿が目に入った。

壁の時計を見ると、午前二時。賀来は遠慮がちに声をかける。

「お帰り。心配したんだ、もう今夜は帰らないかもって。神父様も、一時までは起きてた」

「ああ」

それだけ言うのとふるえる手でコップに水を満たし、うがい薬を垂らすと、口をゆすいだ。味が嫌いだからと、インフルエンザの流行期にもけして使わなかったうがい薬だ。

「珍しいね」

賀来がつぶやくのも聞こえない様子で、また口を含む。吐き出す。含む、吐き出す。溶液がなくなればまた注いで、口をゆすぎ始める。賀来はしばらく呆れて見ていたが、うがい薬が容器の半分くらいになったところで、結城の横に立った。

「もういいだろ、どうしたんだ。薬がなくなっちゃうよ」

結城は唇を手の甲で拭きながら、とり付かれたようにまたコップに水を満たし薬を注ぎ始めた。

「ね、もういいって」

賀来が伸ばした手を結城が振り払い、コップは宙に浮いた。そして次の瞬間、床に溶液をぶちまけてからからと転がっていた。

「あーあ……」

片付けようと、賀来は廊下のメインの照明スイッチに手を伸ばした。
「点けるな！」鋭い声で結城が叫び、賀来の手は反射的に引いた。
薄灯りの下の結城は、充血した眼をして、疲れきっているように見える。

それよりも、賀来を目を引いたのは、首からはだけた胸にかけて見える赤い痣。

「結城……」

「もう寝る。俺は眠いんだ」

結城はふらふらと賀来と共有の部屋に入り、無造作にコートとシャツを脱ぎ、傍らの床に放り投げる。その細い手首には、何かで縛られたような痛々しい赤い跡があった。ハンガーを探すように手を伸ばすが、その手は壁に当たり、ドアに当たり、肩が不自然に大きく上下している。

「結城！」

賀来が彼の片腕をとらえると同時に、口を押さえたまま結城はその場にひざから崩れ落ちた。

「結城、ちゃんと病院に行こう。ちゃんと見てもらおう、一度」

「ちがう、発作、じゃない」

それつがまわっていない。しゃがんだ賀来の胸にもたれかかる結城の頬は、ひどく青白かった。

「でも……」

言いかけた賀来をさえぎるように、あらぬ方向を見ながら結城は話しかけた。

「賀来」

「なに？」

「ぼくを、忘れないで」

いきなりの幼い口調に、賀来は言葉に詰まった。

「忘れる……？ 一緒にいるのに、何を？」

「なんだろう」

自分の言葉に戸惑うように、結城は宙に潤んだ視線を投げた。いつ

もの結城じゃない。

「今の、このときだけでいい。そうだ、今を忘れないでくれれば」
「結城……」

彼の瞳の光が和らいで、以前の結城に戻っているのを感じた。発作の後、何時も賀来を切なくさせる、あの柔らかい彼に。

「いつか、おまえと海に行きたいな。ふたりで、……ふたりきりで、誰もいないきれいな海に」

「何いつてるんだ。……金がないと」

熱くこみ上げるものをごまかそうと、賀来はふるえ声で間の抜けたことを言った。

「それで、きれいな色の魚をとるんだ……」結城がふっと笑う。

ああ、ほんとに今この時が永遠に続いてくれたら。ここにいるのは、僕の知っている、あの日の前の結城だ。

神様、時を止めてください。結城の分だけでもいいです。僕たちが何をしたんですか。

賀来の胸に顔をつけていた結城は、薄く眼を開けたまま独り言のように言った。

「僕はいずれ、君の知らない僕になる」

「そんなこと……」

「僕は僕でいたかった。でも、もう戻れない。おまえは変わらないでほしい。そして、今日の僕を忘れないで」

「どこへ行くっていうんだ。明日も、結城は結城だよ」

賀来は声を詰まらせ、結城の手を握った。

「……祐太郎」

下の名で呼ばれて、一瞬言葉を失う。

「なに」

「……愛してる」

溜息のように静かな言葉。宙空を見ていた結城の目が、ふっと閉じた。

胸の高まりに、悲しみと喜びと何かに対する怒りが爆発したように

混ざり合う。

二人で閉じ込めてきた暗黒の記憶。二度と思い出してはならない故郷。この世で分かち合うことができるのは結城だけだ、そして僕の涙や苦しみを分かってくれるのも結城だけ。幼馴染だからじゃない、恩人だからじゃない、美しいからじゃない、いつも彼を見ると胸が痛かった。

片手に結城の首を抱いたまま、賀来は自分の激しい鼓動を聞いている。

この感情は罪だろうか、いやこれがどれだけの罪だろうか？　僕たちが、僕たちだけが抱えてきた残酷な記憶に比べたら。

熱い涙が眼の中に充満する。

僕は君のために祈る、結城、君はただ一人の君だ。このひとときが永遠なら、神も祝福もいらない。

賀来は結城の上にかがみこみ、細い髪をいとおしむようになると、白い頬に接吻した。

Blue 3

結城は三日学校を休み、その間村越神父の尋問を受け続け、学校では特別室で自習を申し渡されていた。表向きは体調が普通でないから集団での授業は無理、ということだが、何一つしゃべらない代わりの罰のようなものだ。

あの翌日、昼過ぎまで目を覚まさない結城を心配して、村越神父はかかりつけの医者呼んだ。よくはわからないが薬をやっているようだという話に、神父の顔色が変わった。加えて体の傷。目を覚ました結城にいくらかいても、覚えていないの一点張り。神父は医者に口外しないように頼んでいた。薬の種類によっては放校、いや警察ざたになるかもしれない。以後神父はまったく口を割ろうとしない結城との間に、長い戦いを始めることとなった。

あの日から、また結城が変わった気がする。研ぎ澄まされたようなオーラはいつも通りなのに。そばによるとドキッとするような艶やかさがあるのだ。

いつも通りに口をきくことが難しくなり、賀来は思わず知らず結城を避けた。

近寄れば、あの夜のことを思い出し、あからさまに勝手に顔が上気する。結城はいつもとかわらないのに。

あの夜のことを覚えている？　いつもいつも、どこへ行って何をしている？

姿を見れば胸は高鳴り、聞きたいことは山積みなのに、手も足も出ない自分がいた。

昼時、賀来がクラス友達三、四人のグループで食事をとろうと弁当箱を開けると、中に紙切れが入っていた。

「貧乏人のホモ乙」

思わずふたを閉じ、周りを見回す。

「どうした？」

クラスメイトが問いかける。

「ん、なんでも。虫が入ってたから捨ててくる」

さつと紙をとり席を立つと、動悸を押さえながら流しに立つ。ふるえる手で紙をくしゃくしゃにしてごみ箱に捨てた。背後で誰かが笑っている気がする。恐怖で身がすくんだ。

誰が？

友達を疑いたくない。

でもそうか、僕の態度はあまりにあからさまなんだ。クラスの違う結城は、僕のせいで迷惑していないだろうか。こんなに気持ちを押し隠していても、これからずっと、こんなことを言われ続けるのだろうか。その日の昼食の味は全くわからなかった。

放課後、一階の廊下は、今しがた張り出された抜き打ちテストの順位表を眺める生徒の群れでごった返していた。

結城が休んでいた間に行われたその一位は、賀来祐太郎だった。

「二位は大槻か」

「あいつ結城にだけは負けてたけど、賀来に負けたことはなかったのに」

「結城がテスト受けてない今がチャンスだったのにさ、またのがして悔しがってるぞ」

張り紙に程近い昇降口で、結城が一人靴箱を開けていた。一枚の封筒が靴の上に乗っている。

『結城美智雄様』

丁寧な文字で書かれたそれをあけて中を見ると、一枚の五千円札と紙切れがはいっていた。

『気の毒なあなたのしもべ、毎日あなたを見ては顔を赤らめている貧乏人の恋人に靴を買ってあげてください』

距離を置いて眺めている集団からくすくす笑いが起こる。結城は黙って金と手紙を封筒に戻し、近くの靴箱を適当にあけると無造作に

突っ込んだ。そしてくるりと振り向くと、口に手を当てて笑いをこらえていた一人につかつかと歩み寄り、いきなり顔面に渾身のパンチを食らわせた。

生徒はのけぞって壁に頭を激突させる。

驚いて広がる輪の中からもう一人引き出して胸倉をつかみ、横面を二、三発殴り飛ばす。眼鏡が吹っ飛び、生徒は鼻血を吹いて床にもんどりうった。

返り血を浴びた白い顔でゆっくりと周囲を眺めまわし、誰にともなく低い声で言い放つ。

「今度くだらない真似をしたら殺す」

やじ馬は声もなく後ずさった。

持って帰ろうと体育着袋を持ち上げた賀来は、その重さに戸惑った。何か固いものが入っている。

「なんだろう」

袋の口を広げ中をのぞくと、ばらばらの靴の片方が一足ずつ三足。

一瞬、とられた自分の靴かとも思ったが、違う。

つまらないいたずらだ。捨てるのもなんだし、職員室にでももっていくか。あの空間と空気が嫌いな賀来は、うんざりした様子で顔をしかめた。その時、

「結城がまたやったぞ！」

生徒の一団が半ば楽しそうに叫びながら廊下を走っていった。

廊下には血痕と割れたメガネが散乱していて、結城の姿はすでになく、興奮した生徒達が口々に状況の伝達ゲームをしていた。状況を見れば何があったかはわかる。だが、周囲が自分の顔を見たとき話をやめたのは、何か不自然に思われた。

「あの、結城は……」賀来が近くの顔見知りを探ねると、

「さっき職員室に連れてかれた」と短く答えて、身を離れた。

救急車の音が近づく中、職員室に向かう。

どうやら生徒の一人が壁に頭をぶつけたまま意識が戻らないらしく、

隣接する保健室からは「脳しんとう……」「意識は……」という単語に交じってせわしなく生徒の声を呼ぶ養護教諭の声が聞こえていた。

開け放たれた職員室を覗くと、結城が数人の教師に囲まれているのが見える。職員室の入り口わきに荷物を置いたまま、何かひとことと思い職員室に足を踏み入れると

「先生、帰ろうとしたのに靴がなくて」

「おれもなんですけど」

どやどやと入ってきた二人の生徒に追い越された。服から上級生とわかる。

「あとあと！ 今それどころじゃない」「だって帰れません」「ちゃんと探したのか？」

聞き流していたその会話にハッと我に返り、振り向くと、新たにやってきた一人の生徒が賀来の袋に躓いていた。

「なんだよこれこんなところに」

あ、というよりも早く、生徒は袋からこぼれ出た靴に目をとめた。

「おい、ここにあるぞ！」

「誰のだこれ」

高鳴る胸を押さえながら急いで自分から声をかける。

「その袋は僕のだけど、あの。違うんです」

「賀来君？ ちようどよかった、きみもこっちに来てくれ」

結城を持て余した担任が手招きするが、苛立った生徒の一言にさえぎられた。

「先生、その前に僕らの靴を返してほしいんですけど」

続く二時間余りは屈辱の極みだった。

けが人はやじ馬に囲まれながら救急車で病院に。賀来は結城をかばうどころか別件で一緒に尋問され、呼び出しを受けた村越神父はただ頭を下げ続ける。賀来はくやしさに顔を真っ赤にしていた。

言うことは言った、自分はやってない、自分がされた時は誰に相談

しても相手にしてもらえなかった、そして教師は黙って聞くだけだった。村越神父の言葉だけが救いだった。

「この子を日ごろから見ているらばわかるでしょう。どういう行いがいいか悪いか、どういう風に生きたいか、彼ほどしっかりと芯をもっている子はいない。先生方ならわかりのはずです。私も微塵も疑いません」

日ごろの賀来への嫌がらせの件もあり、それで一応疑いは晴れたようだった。ただ、今までが今までだけに、結城はまずかった。

「結城君にはしばらく自宅謹慎してもらいます。成績がいいだけでは免罪符にならない。相手のしたことも悪いが、関係ないものに対する君の仕返しは常軌を逸している。自分で自分を律することができるまで、善悪の判断ができるまで、自分と向き合って神の言葉を学びなおして過ごしなさい。あと、専門家に精神分析してもらったほうがいいかもしれないね、村越さん」

声もなくうなだれる村越神父。
鷹揚に上から言い渡す校長の穏やかな言葉に、賀来は煮えるような思いをこらえていた。

とつぷりと日の暮れた教会に、遅くまで灯りがついていた。長い祈りをささげ終わると、村越神父は胸に十字を切って、頭上のキリスト像を見上げる。

帰宅してからの長い問いかけに、結城はほんの少ししか答えなかった。

「どうしてあんなことを？」

「馬鹿に笑われるのは我慢ならない」

「同じことがあったらどうする」

「やることはやったから同じことは起きない」

賀来が口をはさんだ。

「殴っても陰口はなくせないよ」

結城は一呼吸おいて答えた。

「そうだな、なにもしなくても、なにかしても、俺たちはこれから陰で言われ続ける」

「何と言われるんだね」

神父の問いかけに結城は表情を変えずに答えた。

「屑。貧乏人。ホモ。学園から出て行け」

ホモ、の言葉に賀来がびくつと反応したように見えた。

「人の情けにすがって生きている限り、俺たちは世間から何を言われても黙って受け入れるしかない」

「一人で立てる時のために今は耐えて、人生の基盤を作るときじゃないのかな」

神父の言葉に結城は冷ややかな視線を向けた。

「そう思うやつはそうすればいい。俺には多分、あまり時間がないんです」

吐き捨てるように言うと、立って部屋に戻っていった。

神父はロザリオを手に問いかける。

主よ、私にできることは何でしょう。彼は私の手の届く先にいて、もう自分の人生を決めている。誰の助言も求めていない。

彼は迷える子羊なのか、あるいは育ちつつあるモンスターなのか……

結城はその夜珍しくおとなしく部屋にいて、賀来のエリアと低い家具で仕切られた向こうのベッドで薄く眠っていた。賀来はそっと彼の寝息をうかがい、そばに座り込んだ。

これが今日の昼と同じ結城だろうか。

時に氷のように冷たく、時にたけり狂う結城が、長い睫毛を伏せて眠っている時だけは聖者のように神々しい顔をしている。賀来は眠る結城を見るのが好きだった。

結城、僕だよ。今どこにいる？

いつか海を見に行こうよ。君の言葉の続きを僕は一生待っている。変わらないといった君が、君の中から笑いかけてくれる時を信じて

る。

ほんの少しでいい、笑ってくれないかな、あの夜みたいにな。
いつか何の苦しみもない世界に、僕らは行くことを許されるだろう
か。

ふいに目の前の瞳が開いた。

賀来はあわてて立ち上がり、突き出ていたZライトに頭をぶつけた。

「……っ」声もなく頭を抱える。

「なにやってるんだ」結城がかすかに笑った。

頭を抱えながら、その一瞬を賀来は見逃さない。思わず涙目のまま
浮かれた声で言っていた。

「もう一回！」

「何が」

「結城が笑ったところが好きだ。ああ、久しぶりに見れた」
あまりに無防備な笑顔に、結城は思わずつぶやく。

「泣いたり笑ったり、お前、おもしろいな」

ふと宙に目を投げて、独り言のように言った。

「また、あれを見た。目の裏に広がる青い世界と、水中をキラキラ
落ちてゆく何か……。取ろうとして手を伸ばすんだけど……」

「夢？」

「夢っていうか、イメージかな」

「どんな気分のイメージ？」

結城はしばらく考えていた。

「ひとことでいえば、悲しい……」

何のことはない会話を、結城と自然に交わすのは久しぶりだった。
ついでに聞くなら今だ。

賀来は呼吸を整えた。

「あ……のさ、きいちゃだめかな」握った拳に力を入れる。

「心配なんだ。いつも遅くまでどこへいつてるのか。誰に会って、
あの、何を……」

「その話はやめろ」

有無を言わさぬ声音に、賀来は肩を落とした。

「じゃあ、ちがうことで、もうひとつだけ」

傷つきついでだ、ありったけの勇気を出す。

「休むきっかけになった、あの日の夜、のこと…… 僕との会話とか、いろいろ、どれだけ覚えていいるのかなって」

「思い出したくない」

即座に結城は答えた。やっぱりか。

「わかった、もういいよ。ごめん」

話さなければよかった。苦い思いで後悔する。

「賀来」

「うん？」

「もう一度言うけど、俺がどこで何をしてるか、いっさい詮索はやめろ。誰が何をいってもほっとけ」

「うん……」

「俺は自分のことは自分で何とかするから。おまえは自分の身を守ることだけ考えてろ」

いつもそうだ、彼のために何かしたくても、彼の一言ですべては封じ込められ、僕は無力になる。泣きたい気分だった。

今の結城は誰なんだろう、どっちにいるんだろう。

結城は思い出しだように付け加えた。

「大槻琢也に気をつけろ。あいつたぶんまた仕掛けてくるぞ」

> i 7 2 7 0 — 1 0 9 4 <

校舎裏の、一日に三十分だけ日のあたる非常階段わきのたまり場に、五人の生徒が集まって防火用水のふちに腰かけていた。

「マジおっかなかった。睨まれた時、俺やられると思ったもん」

「今田は不運だったよな。俺たちから話聞いてただけなのに」

「でも実際、結城はわかってると思うぜ、俺達のこと」

「ああ、もう余計な手出さないほうがいいと思うよ、あいつはまじでやばい。」

な、大槻」

大柄で精悍な風貌の大槻琢也は、腕組みしたまま下を向いていららと答える。

「だからなんだよ、このままじゃすまさねえ。あいつ、家に謝りにも来やがらなかったし」

つま先で地面を蹴りながら吐き捨てるように言った。

「俺の靴入れにジャストミートかよ、ばかにしやがって」

「だからお前がやったとわかってるぞって意味だと思う」

傍らで気弱そうな少年がおどおどと言った。

「もういいよ、僕のことなら。眼鏡と鼻血で済んだし」

「おまえはどうでもいいんだよ今田。あいつらとにかくむかつくだ、特に賀来。あちこち小猾く取り入りやがって、結城の腰巾着の点取り虫のこせこせ貧乏人が」大槻が悔しさをにじませて言う

「一位ガライユウタロウ」

「やめろぶつ殺すぞ伊勢」

仲間にかかわれて、さらに激昂した。

「でも結城がな、あいつはやばいって」

「普通じゃないよな」

みんなそこで押し黙った。

「結城は今学校に来れない、賀来は一人だ。何か弱みでも握って、結城に報告できない形で賀来をつぶせないかな」

大槻はまだ悔しそうに言う。

「お前それ失敗したら結城に殺されるぞ。もういいじゃん」

「うるせえな臆病もの。もういい、俺一人でやるよ」

大槻は一人群れを離れて歩きだした。

「あいつ……。ちょっと執着しすぎだよな」

置いて行かれた少年の一人が言う。

「どっちに？ 賀来に、結城に？」

適当な駅で降り、知らない道をぐるぐると歩く。繁華街ならどこで

もよかった。何とかあいつらに思い知らせてやる方法は。……あいつら。賀来と結城、結局俺はどっちに思い知らせてやりたいんだろう？

いつの間にか風俗店ばかり並ぶ路地に入っていた。きよろきよろと歩みを緩める大槻の目に、違和感のある二人連れが映った。

少し間をあけて歩く、黒いパーカーを着た背の高い少年と、がっちりした中年男。

（あの体形、まさか……）

近くの雑居ビルに入るとき、パーカーのフードを外した少年の横顔が一瞬見えた。

（……結城！）

なんてタイミングだ、神がいらっしゃるなら俺は愛されてるぞ。大槻はそつとそのビルに近づく。一階で落ち着きなく上を見上げていると、近くのスナックから出てきたくたびれた眉毛のない女が声をかけた。

「あんた、もう帰んなさい。あのオヤジに捕まったら最後なんだよ。家はあるんでしょ？」

「あ、はい……」

大槻はとっさにあいまいな返事をした。

「あまり見ない顔だけど、抜けられるうちなら抜けたほうがいいよ。捕まっちゃったら運び屋やら薬の売人やらでこき使われて、ヤクザ行きで終わりだからね。わかってると思うけど」

「そう、なんですか」

ドキドキしながら話を合わせる。

「葉やられてないなら今のうちだよ。あの子なんか、もう駄目だね」女は顎をしゃくった。大槻は口元の笑みを懸命に抑えていた。

Blue 4

もう幾度読みなおしたかわからない、高村光太郎の詩集。

黄ばんだ表紙には「智恵子抄」の文字。

あの事件のあった雪の日、賀来が目を離せなくなった一遍の詩がそこにある。

もう何度目か。しんとした自室で、賀来はかみしめるように文字をたどっていた。

「山麓の二人」

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は

険しく八月の頭上の空に目をみはり

裾野とほく靡いて波うち

芒ぼうぼうと人をうづめる

半ば狂へる妻は草を藉いて坐し

わたくしの手に重くもたれて

泣きやまぬ童女のやうに慟哭する

――わたしもうぢき駄目になる

意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて

のがれる途無き魂との別離

その不可抗の予感

――わたしもうぢき駄目になる

涙にぬれた手に山風が冷たく触れる

わたくしは黙つて妻の姿に見入る

意識の境から最後に振り返って

わたくしに縋る

この妻をとりもどすべが今は世に無い

わたくしの心はこの時二つに裂けて脱落し

闖として二人をつつむこの天地と一つになった

不意に部屋の戸がこんこんと鳴った。

「賀来さん、お電話です」

隣接する養護施設の十四歳の少女、三津木日南^{ひな}が顔をのぞかせた。いつも教会の雑用を手伝ってくれている子だ。

「ありがとう、誰から？」

「よくわからないんです、すみません」

わからない？ 結城だろうか？ 相変わらず停学も何のそので行方不明になっている。下に降りて受話器を取る。

「もしもし、賀来です」

ひと呼吸おいて、聞き辛い声が答えた。

『今からいう住所を覚えろ』

「誰ですか？」

聞き覚えのない、変声器を使ったような声だ。

『二度は言わないから今から言う住所を覚えろ。Y市S町一の二十の三、橘ビル三階、そこに結城がいる。もう行かせるな、でないと破滅する』

ぷつりと電話は切れた。咄嗟に賀来は聞いたばかりの住所を複唱し、そばのメモパッドにかきなぐった。

……これをどうする？

しばらく住所を見ながら考える。ガセかもしれない、罠かもしれない。僕を陥れたい連中はいくらでもいる。だが千分の一の可能性でも、これが事実だったら？

……村越神父に相談を。

だめだ、あの慇懃無礼な校長と結託している彼を、結城はもう信用していない。どこるか毛嫌いしている。結城にとってありがたくない情報を、蔭で村越さんに流すのは、結城に対する裏切り行為かもしれない。

賀来は額にうつすらと汗をにじませながら、手元の住所を睨み続

けていた。

日曜日。

そのビルの一階のコンビニの外は、近所の住民層そのままに、茶髪金髪ジャージにくわえタバコの一族が群れていた。その群れから離れた一隅に、二人の少年が下を向いて話している。

「木崎さん最近閉じこもりっきりって話だぜ」

「ああ、最近あいつに夢中なんだろう」

「ブルーか。俺のレディとか姫とか、正気とは思えねえよ」

「でもずっと手を出してなかったんだろ」

「先々週の金曜まではな。あの日ドアの外までかすかに聞こえたぜ。まずいんじゃないの」

「お前聞いてたんだ」

「聞こえるんだよ。色っぽいというより、悲鳴だったぜ。最初っから随分だったようで、延々何時間も」

「って、何時間も聞いてたの」

「時間おいてきたらまだやってたんだよ。最後のほうはきれいに色っぽい声になってたけどね」

「薬やられたなたぶん。あれやられると普通のはもうできないぜ」

「ご執心だなあ。無理もないか、えらくきれいだもんなあいつ、俺らとは違うわ」

「きいたとこだとさ、聖なんとか学園ってカトリック系の学生らしい」

「それなんてエロゲ？」

甲高い笑い声上がる。

「あいつ目障りだよな」

「ああ、すっごく目障りだ」

二人の声を背に、離れたベンチから立ち上がり、ビルの中へ消えていく、ひとりの少年の姿があった。

しつこいインターホンに、木崎はうんざりしながらグラスのウィスキーを飲み干してカメラを覗いた。見覚えのない少年だ。

「誰だ」

「結城美智雄はそこにいますか」

いきなり喧嘩を売るような声音。

「ここでは本名を名乗る者はほとんどいないんでね、名前じゃわからん」

少年はしばらく考えていた。

「十六歳、百八十センチ、色白で細身、たしか、ブルーと……」
しばしの沈黙。

「そこにいるんですか」

「今はいないよ」

「じゃあ来るまで待ちます、来なければ警察に電話します」

ややあつて、鉄の扉がガチャリと開く。

「入れよ、身の程知らずの坊や」

賀来は目の前の、不快そうないかつい五分刈りの中年男を睨みつけた。

賀来は人気のない道場を見回すと、仕切り家具の裏のプレイコーナーを覗いた。そしてミニキッチンへとはいってゆく。

「失礼な坊やだなあ」

木崎は立ったまま煙草をふかした。

「あれか、親友ってやつか」

賀来は真正面から向き直って答えた。

「そうです」

笑いながら木崎は傍らの枯れた鉢に灰を落とした。

「親友も恋人も勘違いの産物だぜ」

「レディとか姫は？」

賀来は挑戦的に言い放った。酒でよんでいた木崎の目が真剣になった。

「このことを誰に聞いてきた」

「結城はあなたの何なんですか。子ども相手に薬を打って弄んでるんですか？ そんなことしたら、いずれ」

「いずれ？」

「あなたは彼に殺されるかもしれない」

木崎は上を向いて声をあげて笑った。

「君はなかなか、彼の理解者だ。そうだ、君の探してない部屋が奥にあるぞ」

賀来はいぶかしげに木崎を見た。

「隠し場所としては一番いい部屋だ。行ってみないのか、王子様」
混乱する頭で、賀来は精いっぱい知恵を巡らせる。

「あなたが先に立って、ドアを開けてくれるなら」

「いいとも」

木崎は奥の部屋のドアをガチャリと開けた。薄暗い部屋はブルーのカーテンが閉まったままでよく見えない。八畳くらいの広さの、ベッドばかりが大きな部屋だ。

ふっと漂う鈴蘭の香りと、さっきコンビニ前できいた会話が重なって、賀来は顔に熱がこもるのを感じた。

「ここで、俺は君の親友を愛した」

びくりと震える賀来の背に、そっと男は腕をまわした。酒臭い息が首にかかる。

「何でもしていいっていうから、多少乱暴だが何でもしてやったよ。素晴らしかったよ、ああ見えて反応が女性のようなんだ。喘ぎ声もエクスタシーの表情もほんとに美しい。悲鳴も。君にも見せたかったね」

「そんな話はいいい」 ひきつった声で賀来はいった。

「彼が望んだんだ、自分を壊して罰してほしい、暴走を止めてほしいって。だが俺はただのサディストじゃない。破壊と再生。痛めつけたら、時間をかけてやさしく愛する、そして喜びを与える。で」

木崎は肩をそびやかして、硬直している賀来を見た。

「彼は自分からここに戻ってくる。君は関係ない」

「薬を使ったからでしょう」

賀来は男を睨みながら言った。

「ああ、若いし初めてだし、ちょっとかわいそうだから景気づけにね」

「結城はもう、来ない。僕が来させません」

賀来は決然と言い放った。

「彼は来るよ。彼がほしいのは性的な満足だけじゃない。力と金だ。それと」

木崎はポケットウイスキーのふたを外す。

「彼には目的がある。それを成就させるだけの知恵も頭もある。それがなんであれ、俺は協力を惜しまないつもりだ」

上を向いてぐいと一口飲んだ。

「結城は最初、どうしてここに来たんですか」

賀来は声の乱れを抑えながら聞いた。

「ふた月前、おれが街中で見かけて声をかけた。薄汚い阿呆どもに交じって噴水前にぼんやりと座っていた彼は、天使のようだったね。名前を聞いたらBLUEと名乗った。好きな色だそうだ、知ってたか」

賀来は黙って首を振った。

「落ちてるガキを拾ってくる。おれはこの趣味がこうじて故郷を追われたのさ。まあでも都会のほうが向いてたかな。暴力団の事務所に若いやつを集めて売り飛ばすのはうまかったし、おかげでいろいろなつてもできたし」

また一口酒を含む。

「おれはこの世にあまり未練はない、実は資産もかなりある。俺の功績じゃない銭で残念だが」

だるそうに壁に寄り掛かると、木崎は続けた。

「遺書を書いてな、俺はあいつにそれを全部譲ってもいいと思ってるんだ」

「え……」

「信じられないか」

木崎はにやりと笑った。

「あいつの資質は素晴らしい。俺はあいつが望むものは何でも教えてやったよ。格闘技にバイクや車の運転、ぬるい人間の落とし方、銃の撃ち方。あいつはいずれ、汚らわしい人間界とのつながりを断ち切って、完全な魔になれるやつだ。今は別れの時だから、たまに揺れているんだろうが、いずれ一遍の情もなくなる。彼の成し遂げたいことが何なのか知らないが、それを見届けることができないまでも、俺は俺の持つすべてをあいつに譲るつもりだ」

酔いのせいかとめどなくぺらぺらとしゃべる木崎の眼は、アルコールで縛りつけられたかのように、天井の一角を見つめて動かない。
(狂ってる……)

賀来は、自分の魂が底冷えしてゆくのを感じていた。

(この男は、僕がつなぎとめようとしている結城の温かい部分を破壊して、僕が遠ざけたいと思っている闇の部分育てるためにだけ、結城のそばにいるんだ)

賀来の脳裏に、あの夜の結城がよみがえる。熱っぽい目で僕を見上げていた結城の、幼い声。

―僕は僕でいたかった。でも、もう戻れない。おまえは変わらないでほしい。そして、今日の僕を忘れないで……

負けるものか、こんな男に。

「葉なんて卑怯な手段を使っておいて、何が姫だ。そんなものでごまかさなければつなぎとめられないくせに。二度とここに彼を呼んだら、警察に通報する。こんなところ、一発で終わりだ」

木崎は黙ったまま、寝室の一角にある小さな本棚からファイルノートを取り出し、賀来の前に広げた。

「気に入ったのがあったら持って帰っていいぞ」

賀来は息をのんだ。

そこに写っているのは、猿轡をかまされ、あるいは手錠をかけられて、ただ責めさいなまれているとしか言えない結城の白い裸体ばかりだった。あの夜、狂ったようにうがいを繰り返していたのがなぜか、いやがおうにも分らされる写真もあった。しつこい連写、アップにロング、愛情なんてどこにも感じられない。ただの異様なコレクションだ。

賀来は眼をそむけてつき返した。

「あなたはただの変態だ」

「おれは結城を愛しているよ、そしてお前さんよりよほど彼の理解者だ。俺たちをほっておいてくれるならよし、もしもお前さんがこのことを外にバラすなら、この写真も同時に外に流れ出ると思っておいてくれ。ネットを通じて、あるいは、まずはじめは学園の外の電柱あたりにね」

「な……に」

賀来は絶句した。赤い目で賀来を睨みつけると決然と男は言い放った。

「君に結城は扱えない。その前に、ふさわしくない」

十二月の庭から、クリスマスローズの香りが漂ってくる。

十一時を回っても施設の食堂にはまだ灯りがとまり、日南が一人、番をするように電話の前に座っていた。

不意に廊下に乱暴な足音が聞こえ、薄手のコートをなびかせた背の高い少年が乱暴に引き戸を開ける。

「賀来は」

「結城さん」

日南は驚きの声を上げた。

「村越神父が結城さんのこと、とても心配なさって、さっき外へ」

「俺のことじゃなくて、賀来は」

異様な勢いに、少女は声を失う。

ちょうど教会へと続く内戸をあけて、暗い顔で食堂に入ってきた賀来が、身をすくませて立ちすくんだ。

「結城……」

結城はつかつかと賀来に近寄ると、いきなり左ほほを力一杯張り飛ばした。椅子を巻き込みながら、手の本を落として、賀来が激しく倒れこむ。日南はあわてて部屋を出て行った。

「詮索するなと言っただろう！」

今まで聞いたこともない激しい怒声だった。賀来の顔半分が瞬間的に真っ赤になり、目に涙がにじむ。色の薄い結城の瞳が、異様な光に満ちていた。

「なぜあそこに来た、誰から聞いた、なんのつもりだ」

倒れている賀来の胸元をつかんで引き起こすと、細い鼻血がながれているのがわかった。

「何も言ってくれないから」

殴られた痛みと混乱で、それだけ言うとは賀来は呼吸を詰まらせた。「それがどうした、お前になんかできることは何もないんだ。なにもせずにいるといったのに、たったそれだけのことがなぜできない！」

襟をもったままゆすぶられて、後ろの机に賀来はしたたかに頭をぶつけた。

「僕だって」

涙ぐみながら賀来は言った。

「結城のためなら何だってする氣でいるのに、なににもするな、どうせなにもできない、僕だって」

興奮で喉がひきつる。

「僕だって怖かったんだ！　もしかしたら殺されるかもしれない、鍵をかけられて脅されるかもしれない、そう思いながら、結城のためになるなら悔いはないと思って、もう必死だったんだ。薬だの暴力だの、ひどい話をたくさん聞かされて、僕以外に誰も話さずに、ひとりで立ち向かおうと、もう殺されるのも覚悟で、それなのに」

「誰が戦ってくれと頼んだ。でしゃばるな！」

必死の思いを一言で否定されて、賀来の頭に血が上った。

「そんなにあいつがいいのか！ このぼくよりも、金とか力とかセックスとか、わかりやすいものばかりくれるあんな変態男」

「そういう汚い口をきくなら俺の前から消えろ！」

何ひとつ届かない。もう無理だ。僕のいつてことはめちゃくちゃだ。（君に結城はふさわしくない）という男の言葉が頭の中に木魂し、絶望感と怒りで頭がくらくらする。

「僕は海が見たいんだ！」

自分でも意外な言葉を賀来は叫んでいた。

「何……」

結城が一瞬戸惑う。

「海が見たい、結城と海が見たい。あの日からずっとそう思ってた。結城がそういつてくれた時から、その日が来たらその瞬間が来たら、僕らはどんなに幸せだろうって。その海はきつと、今まで見たどの海よりも青いだろうって。あの時の結城を信じれば、どんなことでも耐えられるって」

結城の視線は不安定に宙をさまよった。

「覚えてないの？ 全部葉のせい？ 僕が信じていたものはみんなあいつのくれた幻なのか？」

悲鳴のような言葉の余韻が消えると、結城の視線が、ゆっくりと賀来の上に降りる。血の飛沫で染まった賀来の白いセーターの胸が、怒りにあえいで上下していた。結城の眼から激しい炎が消え、代わりに不思議な色調が宿る。

「それで……」

うってかわって静かな、ややかすれた声で

「おまえは、大丈夫なのか」

「な、何が」

さんざんな目にあわせておいて、いきなり何を。結城のほうがどうかしたのかと賀来は一瞬不安になる。

「あいつは、……お前に何を」

きょとんとしたまま、賀来は答えた。

「何をつて？」

「何か、されなかったのか」

「余計なことしたら写真をばらまうとか言いやがったけど、そのまま帰ってきただけだよ」

「そのまま？ 本当に？」

「結城みたいに乱暴じゃない」

精いっぱい皮肉をこめて、握りこぶしで鼻血を拭く。

「あの野郎、嘘を……」

気が抜けたように、結城はつぶやいた。賀来は気の抜けた表情で言った。

「え、そんなこと考えてたんだ」

なんとなくさっきの結城の怒りの大元がわかった気がして、賀来は体から力が抜けていくのがわかった。

しばらく下を向いていた結城が顔をあげて、一言つぶやいた。

「よかった……」

思いがけない言葉に、賀来が目が大きく見開かれる。数秒の沈黙の後、唇をわななかせながら、何か決意するように賀来はゆっくりと言葉を発した。

「……僕は、殴られすぎだと思う。あやまってほしい、結城」

何かに打たれたように、結城の顔にかすかな朱が戻る。ゆっくりと手を伸ばし、ざんばらな髪の毛が汗で張り付いた賀来の頬にふれた。

その手にそっと賀来の左手が触れる。

涙で揺れる大きな瞳が結城をとらえた。

ここ四年、口にしていなかった言葉が唇からこぼれる。

「ごめん」

次の瞬間、賀来は結城の胸の中に飛び込んでいた。

とめどなく、恥ずかしいくらい涙がこぼれおちる。あの涼やかな

甘い香りが賀来の鼻腔いっぱいに広がった。

「結城、……結城、好きだ」

温かい胸の中で嗚咽が止まらない。打たれた頬と、心と、体中が痛く、熱かった。震える体をおしむように、賀来を抱きしめる結城の腕に力がこもる。子犬が母犬にすり寄るように、賀来は上を向き、つんとした鼻、そして唇を結城のほほに押し付けた。

結城の唇まであと少しの距離で、賀来は甘い吐息とともにその言葉聞いた。

「全部、覚えてるよ」

喜びは痛みとなって賀来の胸を貫き、次の瞬間、何か言おうとしたその唇は結城によってふさがれた。

僕は結城と一つになりたい、僕は彼と溶け込みたい。二人でなく一人になりたい。そうすれば世界は完ぺきになり、何の悲しみもなくなるのではないか。奔流のように全身を駆け巡るその欲求を、どんな言葉で伝たらいいか、眩暈のするような幸福の中で賀来は探し続けていた。

頬を紅潮させた日南を従えて、神父は食堂へ廊下を急ぐ。

ガラスの引き戸の向こうに、倒された椅子と、それから二人の姿を認めて神父は息をつめ、右手で日南を制した。

結城に抱きしめられた賀来の細い声が聞こえる。

「……ぼくは、結城のものになりたい」

神父は壁を背に後ろを向き、きつく眼を閉じて何かに祈った。

Blue 5

雑居ビルから出てくる結城。入ってゆく賀来。

ピントの甘い、写真週刊誌の隠し撮りスクープのようなその二枚の写真を前に、暗い自室で、大槻は異様な胸の昂まりを覚えていた。まさか自分がここまでやるとは思っていなかった。だがとにかく手に入ったのだ、極上の切り札が。スナックの女から聞き出した話を加えれば、かなり破壊力のあるネタにはなるだろう。

これをどう使おう？

今度は誰にも話さない、そう決めていた。中途半端に漏れれば村越がもみ消しに出てくるかもしれないし、いつのまにか放校なんてことになったらそれはそれで刺激がない。こいつを使ってあの二人を脅し、操ってやりたい。痛恨の一撃を与えたい。破滅までのカウントダウンのお楽しみは、俺だけのものだ。

最終的に、俺は誰に、どちらに一撃を加えたいんだろう。足元に這いつくばって、俺に許しを乞わせたいのはどちらだ？

机の上に置いた二枚の写真の間を、大槻の視線は行き来を繰り返して……

やがて、結城の写真の上で止まった。

黒いフードから端正な横顔を覗かせる結城の写真をつまみあげ、目を細めて、寂しげな人形のような容貌を、大槻はいつまでもじっと眺め続けた。

朝の光の中、体を反転させ、無意識に隣をまさぐる。伸ばした手が、ただ冷たいシートに触れる。はっと身を起こして、自分がまた一人なのを悟り、自分の隣の静かな空間を、賀来はただ見つめた。

シートに頬を落とすと、あの大好きな香りが残っている。

指で探り、日の光にきらめく、色の薄い結城の細い髪の毛をみつけた。つまみあげて、自分の目の前に持ってくる。

……またどこかへ？　そしてもう戻ってこない？

根拠のない不安に胸がおののく。

ほんの少し前まで自分の隣にあった結城の安らかな寝顔が、今はもう、切ない幻のようだ。

結城は、意外なほど強く賀来を拒んだ。唇を離すと、まるで悪いことでもしたかのように、体ごと離れようとする。

「どうして？　僕はいいのに」

「だめだ」

「どうして」

「理由なんてない」

いきなり拒否されて、悲しみに体ごと絞り上げられそうになる。

「僕じゃだめ……なんだ」

「そうじゃなくて」

結城は戸惑ったような顔を足元に落とした。

「お前を、傷つけたくないから」

はっと思い当ることがあった。

傷つける行為、結城にとってはそうなんだ。壊す、罰する、あの男はそうも言っていた。でもそうじゃない。これは罰じゃない。賀来は言葉を探した。

「結城、君に何かしてもらおうなんて思っていない。ただ君が……君が僕によって、一瞬でも幸福になれるのなら」

「あんなことで幸福になんてなれない」

ぴしゃりとした結城の即答に、賀来は頬を殴られたような衝撃を受けた。確かにそうだ、結城の受けた扱いを思えば。むしろ彼にとっては……

賀来は次に口にしようとした言葉をいくつか飲みこみ、宙を見つめ、そしてため息をついた。

「……僕は、おめでたいんだな。自分だけは、特別みたいに思っていた。他の人にできなくても、結城に氷の部分があるなら自分だけは溶かせると思いこんでるんだ。僕の心と体温でならそれができると。まるでそれが自分の役目のように。ただそう思いたくて……」
結城は少し笑ったように見えた。そして賀来のほうを向くと、ふわりと言った。

「じゃあ、眠ろう」

「え？」

「それで十分だろう。お互いの体温を感じるには」

「……」

ちよつと考えた後、賀来もふわりとした笑顔を結城に向けた。

そして僕らは共に眠った。幼い子どものように、小さな動物のよう
うに。

何年振りかに間近で見る結城の肌、唇、睫毛、ほくろ、そして呼吸。
吸。

何もかもが手の届くところにあり、まるで初めて見るもののよう
に、新鮮で美しい。

特別なことは何もなく、巣の中の小鳥のように、お互いの今を共有するそれだけの時間が、自分の中で宝石のように光る。いつも刃物のような結城が、僕の傍らに手を伸ばしたまま、無防備な寝息を立てる。

このひとときを永遠に忘れない。

じっと見つめて、自分の中で結晶にしようんだ、いつまでも変化しないように……

賀来はまばたきもせず、ちいさな子どものような結城の寝顔を見つめていた。

朝の光の中、賀来はぼんやりと考える。どうして今、僕はひとりなんだろう。

僕の目の前にある事実はただひとつ。きみは、僕のそばにいてくれない。

どんなに優しくしてくれても結局はあのわけのわからない場所に帰ってゆく。あの最低な男の所に。

ひとり身支度を整えながら、賀来は涙をこぼした。

結城、どこにもいかないで、僕のそばにいてほしい。僕が望むのは、たったそれだけのことなのに……

なぜあの男が必要なのか。どんなに頼んでも、あそこに戻るのをやめてはもらえないのか。

それを口にとするとまた君は、僕を殴るんだろうか……

光の海を見下ろす高層階のバーで木崎は、度数の高いロシアの酒をあおっていた。

地上の光に遠慮するように都会の空にもちらちらと星が瞬き、凍った空気の中にほろほろと風花めいたものが舞うのがわかる。

スターダスト。星屑。以前からこの呼び名が好きだった。俺のよくな屑でも、都会は地上の星に上手に隠し、光の海におぼれさせてくれる。

悪い男に泣かされるより

わたしや死ぬまでひとり者

人の赤子に歌をうとうて

わたしも夢をもらいましょう

思わず知らず、嫌っているはずの故郷の歌が唇に浮かぶ。

BLUEとだけ最初名乗っていた結城。初めて手に入れたいと心から思った俺の天使。いつか自分が人を殺すのは確かだから、せめてつかまらないための武器がほしいと真面目に俺に言っていた奴。

どうせ長生きはできないが、しなくちゃならないことがある。協力してくれるなら何でもする。たとえばこんなのはない？ 色もおいもほとんどなくて、食べ物に混ぜてもわからなくて、効き目が遅く、死は確実で、体に何も残さない……

俺はそれを神の雫と呼んでもいい。俺の知る範囲で手に入る代物だった。

一回につき0.5？、おまえがいい子なら手に入る。なんでもいうことをきくならな……

グラスの中の残り少ない酒をぐつとあおる。

俺のしていることは何だ？

あいつを好きにできる切り札を手に入れただけと思ったのに、今は自分を止められない。私財をはたいて、幾人分殺す量になるまで俺はつづけるんだ？ 気でも狂ったのか、いつやめるんだ？

バーの入口に細身のサングラス姿の男が現れる。戸惑ったように店内を見回すその姿に、木崎は手を挙げた。

「サングラスとは考えたな」

「こんな店、はいったことないから。年齢的に無理だし」

「お前が十六に見えたことはないよ」

木崎は結城のグラスに氷を入れ、小さな瓶から透明な酒を注いだ。

「今は飲みたくない」

「薬のほうがいいか？」

結城は顔をしかめた。

「まあ嫌いにさせても仕方ないな、おまえにはいろいろ無理やり飲ませすぎたし」

ひとりグラスの中の液体を眺め、口をつけた。

「美しいだろう。この夜景を見ながらお前と話がしたかった」

外に向かうカウンター席に並んで座れば、光の海しか視界に入らない。

「おれよりお前にふさわしい光景だ」

黙って光に見入る結城の冷たく美しい横顔に、瞬くネオンが下か

ら反射している。

「あの坊やとよろしくやってるか」

木崎が軽口をたたくと、結城は口を引き結んだ。

「……よろしく、じゃない」

握った拳に力を入れるようにつぶやいた。

「僕になんて出会わなければよかったのに……」

「何かあったのか。というより、俺のせいかな？」

結城は首を振り、小声でつぶやいた。

「ただ、後悔してるだけだ」

これ以上延ばさないほうがいい話題のようだ。木崎は本題に入
た。

「いまさらだが、おまえに聞きたいんだ。俺が今渡しているもので、
何をする気なのか」

まっすぐに木崎は切り出した。

短い間のあと、結城は静かにいった。

「最後まで聞かれないと思ってた」

木崎は小さく笑う。

「そこまで自惚れてたのか」

「そうじゃなくて、あなたはそういう人だと思ってた」

木崎はグラスに目を落とした。

「そのつもりだった。が、俺も一応人間なんぞな」

「答えたらどうなるんですか」

「どうもしない、自分のために聞くだけだ。じゃあ質問を変えよう。
どうしてもそれが必要なのか」

長い沈黙。

結城はカウンターの上に、細い指を広げた。

「この手で人を殴ると、時々血に染まる。何人かが倒れる。すると
さも最悪な人間のように人に見られる」

広げた手を握って、拳を作る。

「それはわかりやすい反応だ。僕は悪い。でも、僕は過去にもっと、

自分の中で消化できないくらいの風景を見た。僕がしたことを何倍かけ合わせても間に合わないほどの。その凄惨な風景を作り出した奴は、普通にいい服を着て社会生活を送っている。そして周りは僕に忘れろという。僕は忘れたくない、忘れる理由がない。というより、忘れるのは不可能だ」

拳で静かにこんこんとカウンターを叩きながら、結城は静かな口調で続ける。

「僕以外の人間はみんな、眠るように不都合なことは忘れてしまうだけだ」

そののち、言葉を探すようにしばらく黙った。

「僕は、自分の拳についた血と、世界が僕に忘れさせようとしている罪との落差が理解できない。その差を埋めるために、それは必要なんだ。それに類するものがあれば、何でも手に入りたい」

ややあつて木崎はつぶやいた。

「抽象的だな。だが、いかにもお前らしい、実に美しい理屈だ」
急にふらりと立ち上がる。

「付き合え」

「どこへ」

「ここじゃできない話がしたいんだよ」

木崎は先に立ってトイレに入ると、後ろを向いて結城を待った。個室が三つ並ぶトイレは、床も天井も周りの光景が反射するキラキラした素材で作られていた。

「人が来るし、話なら別の場所のほうが」

あたりを見回しながら不審そうに言う結城の腕をつかむと個室をあけ、木崎はいきなり背中を突き飛ばした。

結城は個室の壁に頭をぶつけ、便器の上に覆いかぶさるように倒れこんだ。後ろでドアのしまる音がする。

「木崎さ……」

振り向こうとすると、すさまじい力で頭を押さえこまれた。結城を抱え込むように、後ろに木崎が立っている。

「何をするんですか」

上ずった声で言うと、姿の見えない木崎の低い声が答えた。

「この個室は広いから好都合なんだよ」

ベルトをはずす音がする。あまりのことに結城は頭がくらくらした。酔っているのか？ 正気の沙汰とは思えない。ここをどこだと思ってるんだ。起き上がろうとすると、いきなり横から腹にパンチを入れられた。

「あ」

瞬間的に声が出なくなり、脂汗がにじむ。さすがプロ、急所に一発だった。

木崎が背後から手をまわし、自分のジーンズのボタンに手をかけているのも、まるで人ごとのように感じる。彼は筋金入りのサディストだが、かつてあの部屋以外で自分に乱暴であったことはなかった。その線引きがきちんとしていたから、どんなことをされてもついてこれたのに。

「木崎さん、これは嫌だ。僕が嫌だということはしないって、以前に」

懸命にかすれた声をしぼり出す。

「うるさい、黙れ。俺が黙れと言ったら黙れ」

乱暴に髪を掴まれ、顎がのけぞる。この変態野郎！ 心の中で何度叫んだかわからない言葉が結城の胸に充満した。首筋に酒臭い息がかかる。

「おまえいつも何をつけてるんだ」

「なにつて」

「その香りだよ。香水か」

「なにも……そんな金……」

しゃべるだけで脂汗がにじんでくる。木崎のパンチは正確だった。「勝手に分泌してんのか、ジャコウネコみたいに。俺がいい年してお前みたいな小僧っ子にとち狂ったのも、そのせいかもしれないな。だとすると、一生男にも女にも不自由しないだろう。あの坊や

がご執心なもの、そのせいかな」

男の手は容易に結城の一番感じやすい部分を手中にとらえていた。

「嘘を」

ひとこと発したとたん男の手に力がこめられ、声を失う。

「嘘を言いやがって」

限られた言葉に精いっぱい思いをこめて、結城は低い声で言った。

「怒ったのか？ いいぞ、怒りは正直な感情だ。なかなかかわいい子だったんで、ちょっかいいでも出そうと思ったが、やめた。お前さんの不興を買っては元も子もない。親友だと名乗ってたしな」

男の手の性急な動きに、歯を食いしばって意識を飛ばそうとする。「あの子が友人なら、俺はしもべだからな。位が違う。そうとも、俺はお前にいいようにされてるんだ、俺はしょせん力で支配するこ」としかできない道化なのさ、こんな風に」

背後に押し付けられたものの熱さが、怒りのように伝わってくる。

「結城、次で終わりだ」

「え」

意外な言葉に頭の芯が一瞬冷えた。

「次で終わりだ。もうブツは渡さない。次が満期だ。そのあと、俺のところに来るかどうかはお前が決めればいい。俺はお前といるといつか破滅する。何も考えられなくなる。何度お前を殺しそうになったか知れない」

嫌悪感で全身はち切れそうなのに、木崎の手の動きとともに、体の一部が意思と関係なく昂まってゆく。その頂点を体中が求める。なんとかその波から逃れようと結城は頭を左右に振った。

「滑稽でも馬鹿でもいい、笑ってくれていい。これが変態おやじの、おそらく最後の恋だ。だから、終わりにする。次の土曜。必ず来てくれ。その時、おまえに最後のプレゼントをする。大事な鍵だ、俺のすべてだ」

瞬間、体を二つに裂くような衝撃とともに、異物がねじ込まれる

感覚が体の中心を襲う。叫び声をあげると同時に大きな手に口をふさがれた。

「結城、おまえを愛してるんだ」

自分の知る、あの最も優しい夜。同じ愛という言葉を伴いながら、この落差に笑いさえ漏れそうになる。殴ってレイプして、そのどこが。

首筋に冷たいものを感じた。木崎の震え声で、それが涙であると知る。耳触りな声で自分の名前が連呼される。

荒い息とともに突き上げてくる衝動に、きつく眼を閉じて耐えながら、結城の中で何かのカレンダーがめくられる。……つぎの土曜。「あ、……あ」

木崎に口元を押さえられながら、喉元から絞り出てくる自分の声を聞く。

あと一回。

賀来、あと一回だ。

Blue 6

砂をかむように過ごした一日の終わり、賀来がぐったりと校門を出ようとする、チャペルから賛美歌が聞こえてきた。

染みも咎も汚れも無き小羊

我が主は屠られしや

子は我が為 十字の上に

釘もて裂かれし 御身体なり

子は我が為 呪い受けて

流させ給いし 君が血なり

懐かしくも 見失せし主は

間もなく再び 来たり給わん

その時まで十字架を負わん

救いの恵みを 喜びつつ

あの日結城は一応帰ってはきたが、それからというもののまるで僕などいないようにふるまい、僕らの間にあったことは、まるで自分の勝手な夢のようだ。

僕の中の結城のイメージはまた分裂し、姿を見るたびにときめく心が失望にとって代わるのを繰り返すうち、心に薄い膜が張ったようになった。

こんな思いをするくらいなら、結城の優しさなんか知らなければよかった。

まるで万華鏡のように姿をとらえることのできない彼。結城にとって僕は、いったい何なんだろう。どんなに頑張ったって、心を尽くして話したってあの最低野郎に勝てないなんて。

讃美歌を聞きながら、頭の中ではなぜか、結城が十字架の上で血を流していた。

僕はどこにいる？ 十字架の下で祈っているのか。それが何になるんだろう？

今朝十分遅刻したくらいで、まるで大罪を犯したように担任にとがめられた。

日ごろの君らしくない！

……遅刻より反抗よりはるかに桁の違う、大きな罪。見ないふりをしていれば見ずにすむそれを、僕は見ないようにして今まで来た。僕には今、結城しか見えないけれど、結城のそばにいたいように思ったら、彼と同じものを見ないといけないのかもしれない……

「賀来」

公園に続く坂道に差し掛かると、いきなり背後で聞き覚えのある声がした。

振り向いたせつな、背中に戦慄が走った。

「ちょっと話があるんだけど」

大槻が、心持ち頬を紅潮させて近づいてくる。

「僕はないよ」

動悸を押さえ、無視していこうとすると、いきなり目の前に一枚の写真が差し出された。一瞬見当のつかなかった被写体がだれかわかったとき、危うく声が出そうになった。

あのビルから、黒いパーカーを着て出てくる結城。驚きとともに、切なさで胸が締め付けられる。

見たくない。どうせこいつのところに今もいるんだ。

「これが何だかわかるよな？」

素早く胸ポケットにしまって、大槻が得意そうに言う。

「……」

胸が差し込むように痛い。なぜこいつがこれを？ 大槻に気をつけろ、結城の言葉が頭の中でこだまする。

「邪魔の入らないところで話をつけよう。穏やかにやるつもりだから穏やかに付き合ってくれよな」

公園の一角に放置された、廃屋同様の作業小屋。その片隅で、大槻は腕を組んで二枚目の写真を見せていた。

賀来は声もなく自分の写真に見入る。こいつはどこまでやるつもりなんだ。偶然ではなく明らかに計画的に撮られている事実が、空恐ろしかった。

「あそこがどういう場所か、あそこにいるのがどういうやつか聞きだした覚書もある。結城がどういう扱いを受けているのかもね。ことが公になったら、放校どころか、薬の種類では逮捕だよな」

「……そうだね」

自分でも意外なくらい冷静な声で答えていた。

「で、僕にどうしろと？」

写真を返しながら静かに答える。心のどこかが投げやりになっていた。冷静な態度が大槻をいらつかせた。

「別に特別なことをしてほしわけじゃない。俺に付き合ってもらえればそれでいい」

「付き合うってどういう風に」

「友達同士として、景色のいいところで過ごさないか」

意味がわからず、賀来は返答に詰まった。

「景色のいいところ？」

「俺の別荘に招待するよ。今すぐは無理だとしても、明日はどうか」

「あした……」

「学校帰りでもいい、朝から騒ぎになると面倒だから。そこまでお前が自分でくるんだ」

「自分で？ 一人で？」 さらに賀来は驚く。

「お前が自分の意思でくるんだ。拉致なんてことにされると面倒だからな、これは友人へのご招待だよ」

ことがばれても自分が法的にまずいことにならないように工夫しているのがわかる。その執念に怖れを抱かずにはいられなかった。何が目的なのだろう。

「服は私服で、あとは帽子……野球のキャップくらいあるだろう。深めにかぶって移動しろ。住所は」

「いくとは限らないよ」

乱暴に答えた。自分で自分の答えに驚く。

「お前、さっき言ったこと聞いてなかったのか」驚いた口調で大槻は言った。

「放校、逮捕？ その写真はただビルに出入りしてるだけだ。何の証拠にもならない」

いつもと違う賀来の雰囲気、大槻は戸惑い、そして咄嗟に賭けに出た。

「写真があれだけと思ってるのか」

「……」

はっとした顔で、賀来は大槻を見た。

「あれだけの写真でお前をおびき寄せることができるのは、俺も思っちゃいないさ。人前に出せない写真がまだある。見当は付くだろう？」

賀来の顔色がみるみる変わる。面白いほどの反応に、大槻は内心ほくそ笑んだ。

「お前の返答次第では、そっちのほうを先にばらまくこともできるんだ。お前はよくても、結城はどうかな？ すぐにでも引き延ばして教会の門に貼り付けることもできるんだぜ」

賀来はしばらく唇をわななかせた後、

「わかった。行くから」

驚くほどあっさりと返事をした。

「二度はないぞ。こっちの指定日時までに来なかったら」

「わかったから」

苦渋に満ちた賀来の表情に、体の奥からわくわくするような快感

が突きあげた。

捕まえたぞ！ どうだ結城！

「じゃあ、口で言うから覚えろ。メモは取るな。T県O町、K浜…
時間は……」

賀来は眼を閉じて、頭の中に書き込んだ。

記憶し終わると、何か決意したように大槻を見上げた。

「ひとつ、聞きたいことがあるんだ」

「何だよ」

賀来の大きな瞳に、幼い子どものような真剣さが宿っている。

「君はぼくを憎んでるの？ だとしたら、どうしてそこまで憎むんだろう？」

予期せぬ問いに、大槻は戸惑いを見せた。

「理由なんてない」

「僕に直せるところがあるのなら」

「お前ら目触りなんだ、見てるとイライラする。場違いなんだよ。それだけだ」

吐き捨てるように言う。

（お前ら……）

賀来は言葉を失って大槻を見ていたが、ややあって口を開いた。

「じゃあ、わかった。必ず行くし、どんな目にあってもいい。たとえ君に殺されたって僕は構わない」

殺す、という言葉に大槻は眼を見張った。

「でも、ひとつ教えてほしい。その言葉に従うことは、結城のためになるんだよね？ 僕が君の言いなりになる代わりに、結城に不利になることを何もしないでほしいんだ。彼を傷つける行為の一切をしないと、それだけを、君の誇りにかけて約束して」

賀来の、見たことのない透明な迫力に圧倒されて、大槻は一瞬たじろいだ

が顎をあげて、言い放った。

「よくいったな。望みどおり、結城には何もしないよ。その代り、

どんな目にあっても後悔しないつもりで来るんだな」

「……うん」

ふと横を向いて、賀来は溜息とともにかすかな頬笑みを浮かべたように見えた。

大槻の胸に今までで一番不快な感情がせりあがる。

自分の嫌悪の正体を初めて今、自分で見たような気がしていた。

その夜、十字架の下での村越神父とのいつもの押し問答は、結城の一言で幕を閉じた。

腕組みをしたまま壁に寄り掛かる結城と、今日こそは口を割らせようと意気込む神父。いつもの、硬直した空気がそこには満ちていた。

「私にはいつでも何でも聞く用意がある、ひとりで抱えていないでなんても話してくれ。いつも誰と会って、どこに行ってるんだ」

「話すことなんか何も無い」

「見るたびやつれてゆくのがわかるんだ。薬だけはやめなさい。賀来になら話せるのか」

「誰にも話す気はない」

「彼は君のことばかり考えてこの頃変だ。自分がどれだけ彼を振りまわしているか分かっているのか」

「なんのことかわからないな」

とぼけ続ける結城に、神父が差し出したのは、皺だらけのくしゃくしゃの紙。

賀来祐太郎

結城美智雄

二つの名前が鉛筆でびっしりと書かれており、裏には一言

「死にたい」

となぐり書きがあった。

「部屋のごみ箱から出てきたんだ。彼がこうなったことに君が無関

係とは言えないだろう」

しばらく見ていた結城は表情を変えず、いきなりメモを真つ二つに破った。

「結城君！」

くしゃくしゃにした紙を傍らのごみ箱に放り込むと結城は神父を見つめる。

「捨てた他人のなぐり書きを見せつけるなんて、人の日記を覗き見してそれを他人に話すより最悪だ。それが神父のやることですか」

「……」

顔を紅潮させて神父は黙りこんだ。結城は腕を組みなおし、神父の頭上からたたみかける。

「ひとつ聞きたいことがある。あなたは結城美智雄を間違った道から救いたいのか、賀来祐太郎を結城美智雄から護りたいのか。」

「……どっちなんだ」

聞いたこともない、威圧感のある低い声に、神父の背中に冷たい汗が流れる。何か異様な圧力に、顔をあげることにすらできない。

結城はしばらく上から神父を睨みつけた後、黙って背を向けると、夜の庭に出た。

中庭から養護施設の食堂を見ると、見慣れた背格好の人影と、養護施設から手伝いに来ているいつもの少女が見えた。

賀来。

二人で何か覗いて、珍しく笑っている。

顔をそらして宿舎の入口に向かったそのとき、

「結城」

窓の開く音がして、背後から賀来に呼びとめられる。彼に名前を呼ばれるのは久しぶりな気がした。

「入っておいでよ」

「いいよ」

「日南ちゃんがいいものつくってくれたんだ」

ひなちゃん。賀来の言葉に、少女の名前が日南だということを今

更思い出していた。

食堂に入ると、テーブルの上に水槽のようなものが置かれ、その中を白熱灯で照らして日南が覗きこんでいた。結城を見ると一瞬緊張したような顔を浮かべ、不安そうに頭を下げる。ピーピーと甲高い鳴き声。ガラスケースの中には、ふさふさした黄色い塊が数匹うごめいていた。

「鶏の雛だよ。彼女が最近友達からもらってきたんだって」

ほおを赤らめて、少女が続ける。

「野犬に襲われて数が減った話をしたら、自宅で生まれたのを分けてくれたんです」

結城の表情に、明らかな戸惑いが見えた。突っ立ったまま動こうとしない。

「冬場に外は無理だからね、底にガーゼを敷いて、電球で少し離れた場所からあっためるといって、何かで聞いたから」

「俺はもう行く」

「いいから、座って。彼女が手作りしてくれたクッキーもあるんだ」
珍しく強引に結城の腕をつかむ。仕方なくしぶしぶ結城は椅子に座った。

「きつとちゃんと育つよ、ヒナちゃんが育てるヒナちゃんだから」

「いやだあ」

笑いあう二人を見る結城の胸には、さっき見た「死にたい」という言葉が突きささったままだった。

「小さいきものほど、守って育てるのは大変なんだよね。体温ひとつ保つのでも」

賀来は掌にそっとヒナを乗せ、小さな頭をなでると、結城に差し出した。

「ほら」

「……やめろ」

反射的に結城は身を引いた。

「大丈夫だから。ね、ちよっとだけ」

いつになく強引な賀来は、結城の大きな掌をつかんで上に向けさせる、そっとヒナを乗せた。

ピイピイピイピイ。小さな声で鳴きながら、ふわふわと掌で動き回る命の感覚。小さなくちばしで、指をつつく。その非力で忌々しい、か弱いいのち。背中を妙な汗が流れた。小さなころ、飼っていたヒヨコが死んで祖父にまた買ってと泣きついた、そんな記憶が流れ込んで、掌の中のものを握りつぶせと迫る自分の中の暗い衝動とせめぎ合う。

結城は両手で包むようにすると、ケースの中にそっとヒナを戻した。

ふっと体の中の緊張がため息になって漏れる。

「……勝手に乗せるな」

賀来が穏やかな笑顔で言う。

「この子がね、優しく戻してくれてありがとうって」

賀来の静かな横顔を眺めながら、結城は泣きたいようなせつないような、得体のしれない苛立ちに全身が苛まれる未知の気分に襲われていた。

「あのどうぞ、食べてくださいね」

日南はクッキーの皿とミルクをトレイに乗せて、二人の前に置いた。食堂の灯りの元、砂糖漬けのアンゼリカやチェリーやルバーブが宝石のようにちりばめられたクッキーが、陽だまりのように輝くひと口ゆっくり口に運ぶと、賀来が横からじっと見ているのに気づく。

「何だよ」

「結城がクッキーかじるのって、似合わないよね」

「食えと言っというてなんだよ。どうすれば似合うんだ」

「こんなまずいもん食えるかって、僕に投げつけるほうが似合ってる」

結城は思わず咳込んだ。

「ひでえな、何だそれ」

日南がくすくす笑いながら出て行った。

ふと見ると、一緒に笑っていた賀来が、目元を赤くしてうつむいていた。

「……賀来」

「なんでも」

声が震えている。

「なんか、やっと普通に話をできたのが、嬉しくてさ。特別なことは要らないから、いつもこんな風に過ごせたらって……」

ふと横を向いた賀来の瞳に、うつすらと涙がたまっているのがわかる。言葉の掛けようもなく、結城はただ視線を反らした。

「もうすぐ……」

ひとこといって、結城は押し黙る。

「……いや、なんでもない」

ぴよぴよ、ぴよぴよ。ひよこの声だけが聞こえる食堂で、二人は彫像のように動かず、痛みの中で、ただお互いの鼓動だけを聞いていた。

賀来が俺と一緒にいて、いたい得るものなんてたったひとつでもあるだろうか。これ程魂のありが違うのに。共にあることを彼が望んだとして、渡せるものなんてないのに。そばにいても俺はお前の毒にしかない。俺はいずれ、……たぶんいずれ、愛という言葉の意味もわからなくなる。

結城の胸の中に、言葉にできない思いが渦巻く。

視線を前に落としたまま、賀来はぽつりといった。

「……僕は結城のためなら何でもできる。言ってくれば、いつでもなんでも。それだけ、覚えていて」

「わかってる」

結城は手を伸ばし、テーブルの上の賀来の握りこぶしをそつと上から包む。

下を向いたまま、小さな声で繰り返す。

「わかってるから……」

賀来は横を向き、細かいまばたきとともに一筋、細い涙をほほに流した。

Blue 7

翌日、夜になっても賀来は帰ってこなかった。

帰宅が遅いのを心配した村越神父に日南が

「そういえば、放課後お友達の家に行って、レポート手伝ってくる
とか言っていました」と告げて、その場は収まったが、連絡もなく十
時を過ぎたころ、これは普通ではないと神父は電話をかけ始めた。

普通の十六歳なら過保護の範疇に入るのだろうが、友達の家に勉
強を教えに行く、連絡なしに夜になる、どちらも賀来には一度もな
いことだったのだ。と言ってもそう親しい友達が多いわけでもなく、
かける先もじきに尽きた。

登校はしているものの、誰のところにもいない、連絡もしていな
い。結城が破り捨てたメモの文面が頭に浮かび、神父は日南を問い
つめた。

「誰のところに行くといった？ 友達の名前くらい言っていただろう
？」

「聞いていません、すみません」

日南は泣きそうになって謝るばかりだった。

詰問口調を反省して、神父は優しく問い直す。

「きのうの彼の様子はどうだった？ かわったところはなかったか？」

「別に……。結城さんと、珍しく仲よくしていました。おふたりで
ヒヨコ触ったり、私の作ったクッキー食べてくださったり、この前
見たときは喧嘩していたので、私すごくうれしかったんです」

無邪気な答えに、神父は逆に不安になった。……それこそ何かの
前兆だったのではないか。実際に話をしていたという結城の様子を
聞くべきなのだろうが、情けないことに、本音ではもう結城と話を
したくない自分がいた。

いやな予感がして、真っ先に結城は大槻を疑った。木崎に持たさ

れている携帯で、彼の自宅の番号を打つ。

出てきたのは、母親だった。

「遅くにすみません。学校の電話連絡網で、生徒対象なんですけど……」

母親が琢也を呼ぶ声が聞こえる。

電話よー。誰からって、名簿であなただけの前の佐竹君じゃないの？
連絡網だって。

いまゲームいいとこだから後にして！

なにいつてるの、布団から出なさい。いつもみたいにそのまま寝
ちゃうわよ。

結城はそのまま電話を切った。大槻のところじゃない。まさかい
まさら木崎が彼を連れ込むとも思えなかったが、

「なかなかかわいい子だったんで、ちょっかいでも出そうとも思っ
たが」という言葉が耳に引く掛かってはなれない。

……もともとああいうやつだから……

何か見境がなくなっている今、なにをしかすかはわからなかつ
た。

夜になると東南アジア系の人種が目立ち始める歓楽街で、結城は
見慣れたビルを見上げた。賀来が立ち寄る場所として、自分が思い
当たる所といえば、ここしかない。

本音を言えば、バーでのこともあり、木崎に近づきたくなかった。
今の自分がどう頑張ってもかなわない相手。やけ気味の今、どう扱
われるかわからない。でも……

決心してインタホンに手を伸ばしたとき、中からかすかにいびき
が聞こえた。隣の住人がエレベーターから降りてきて、結城を見る
と声をかけた。

「ああ、今呼んでも無駄だよ。この頃朝から一人で飲み歩いてて、
さつきふらふら帰ってきたとこだ。もう泥酔状態だな。非常階段に
ゲロはぶちまけるし、もう無茶苦茶だよ」

結城は黙って頭を下げると、階段をおりた。何度かけても電話に出なかったわけがわかった。

ここでもない……

結城は途方にくれて、深夜の空を見上げた。

もつと話をしていたら。もつとちゃんと話を聞いていたら。

横を向いて静かに涙を流していた賀来の横顔を、きりきりと痛む心で思い返していた。

鎧戸の隙間から洩れてくる明かりで、朝が来たことを知る。

……いまごろみんな、心配してるだろうな。

ほとんど眠れないまま朝を迎えた賀来は、カビ臭いソファから身を起こした。

電車とバスを乗り継いで、白壁の瀟洒な平屋の前に立ったのはきのうの夜のこと。九十九里浜に程近い、人気のない別荘地の一角に、その建物はあった。

鎧戸のついた観音開きの窓が並ぶさまは、まるで絵本の家のようで、手前には、クレマチスや小さなパンジーの花がひっそりと咲く庭があった。

賀来は、手元のメモとその家の住所を何度も見比べた。

こんなのだかな場所に呼ばれること自体がよくわからない。とりあえず、低い門を開いて庭に入る。あの日渡された鍵をドアに差し込むと、簡単に開いた。しばらく使われていないのが、空気の匂いでわかる室内。鎧戸やカーテンを開けること、電気をつけることは禁じられているので、ほとんど真っ暗な室内は眼を凝らしても何も見えない。言われたとおり、手探りで廊下を進み、突きあたりを地下室に降る。オーディオ類が並んでいるらしいその部屋の上のほうには、ドライエリアに向けた小さな窓があり、そこからわずかに外の光が差し込んでいた。指定されたとおり、買いこんできたインスタント食品をビリヤード台らしきものの上に置くと、手探りで、

部屋の隅の安っぽいビニールのソファに腰かける。

壁の一角がくぼんで電話台になっており、そこに固定電話が見えた。

お前はそこにただいればいい。定期的に電話するから必ず出るように。

こちらから指定があるまでそこを出るな。

それを守らなければ、すべての写真が学校中にばらまかれることになる。

戻るところには学校にも教会にも居場所はなくなっているだろう。

言っておくが鍵はお前の手にある、出ていくのは自由だ。そこにいるのはあくまでお前の意思だ。

事前に大概から言われていた言葉……

ついたとたんに半殺しの目にでもあうかと思っていたので、完全に無人状態なのは驚きだった。深夜十二時ごろ電話があり、受話器を取ると切れた。これが一応の監視らしい。

朝の光が二つある窓からかなり差し込んで来るので、地下の室内は思いのほか明るかった。何も食べる気がせず、買いこんだ食糧から常温保存牛乳を選び、ストローで飲む。わずかな小遣いと貯金箱のお年玉をかき集めて持ってきた金で買った食糧だった。

僕をここに閉じ込めて、みんなを心配させる算段なんだろうか。

そのことによって、僕が心を痛めれば満足するのだろうか。

このまま連絡を絶って、僕がここから出ように出られなくなるのを楽しむのだろうか。

一番嫌ないやな仕事が最初に待っていた。指定された時間に教会に電話しなければならない。

一人で考えたいことがあるから、ちょっと旅に出てる。すぐ帰るから、騒がずにそっとしておいて。学校にもそういつておいて……

閉じ込められるのも一人ぼっちも耐えられるけれど、身内にうそをつくのだけは嫌だった。

せめてどうか、日南ちゃんが出ますように、または村越さんがでますように。結城が出たら、ぼくは……

電話に向かい何度も自分に掛け声をかけるが、番号を押す勇氣は出なかった。

「神父様、警察に連絡したほうがよくはないですか」

午前七時半をまわり、パンと牛乳を持ってきた日南が食堂で、ほとんど眠っていない村越に声をかける。

「そうだな。だが……」

電話を前に、神父の胸には、二人の出自が重くのしかかっていた。調べたところ、東京在住のはずの島出身者はどういうわけか消息を絶ったり、連絡が取れない状態になっていた。加えて、ありえない報道規制。この子たちだけが島民惨殺の目撃者という重い事実。警察に介入を頼めば、身元を詳しく調べられることになる。島出身ということをして隠して学園に籍を置いていることも……

それがどれだけ危険で危険でないか、自分には見当もつかなかった。

「もう少し待とう、もう少しだけ」神父は自分に言い聞かせるようにいった。

「日南ちゃん、朝刊とってきてくれないか。それと君ももう学校に行かないと」

日南は頷いて食堂を出ていった。

ロザリオを首にかけ、教会に通じるドアに入っていくこうとすると、そのドアから行方の分からなかった結城が入ってきた。すれ違う二人に気まずい空気が流れる。

不意にベルが鳴る。

びくりと顔をあげる神父。手を伸ばす間もなく、結城がすぐに受話器をとった。

「もしもし」低い声で話す。

受話器の向こうで息をのむ気配がする。

「もしもし?」

続く沈黙。結城は受話器の口元を手で覆った。

「賀来?」

「……」

「賀来だろう? 俺だ、何か言え、一言でいいから」

「あ……」

電話のそばに神父が身を寄せる。

『僕は、……大丈夫だから。心配しないで』小さな声だった。

「今どこにいるんだ」

『言えない』

「そこに誰かいるのか」

『いないよ』

「賀来、ちゃんと話をしよう。帰れるなら帰って来い」

『一人になりたいんだ、今は探さないで。そのうちちゃんと帰るから』

賀来が自分から顔をそむけている気配がする。結城は言った。

「誰に言わされてるのか知らないが、おまえの言葉を聞かせろ、一言でいいから」

溜息のような、しゃくりあげるような息遣いがあり、そしてゆっくりとひとこと、泣くような声で

『……ユ・ウ・キ』

結城は絶句した。

「賀来、お前殉教者になるつもりじゃないだろうな!」

結城の突然の大声と同時に、ぷつりと電話は切れた。

「なんでどなるんだ、結城君」

責めるような口調でいう神父を見つめ返す結城の目が、四年前に見たおさない彼のようで、神父はしばし言葉を失った。

そのとき、朝刊を手に日南が部屋にはいつてきた。

「結城さん、新聞と一緒にお手紙がはいつてましたけど」

日南が渡した封筒には、切手もなくただ「結城美智雄様」とワープロ文字。ひっくり返しても差出人もない。

「結城君、賀来はなんていった」

結城は神父の声を背に、足早に自室に向かい、封を破いた。

―賀来祐太郎は食料もない場所に一人で監禁されている
彼からの電話を聞いただろう

彼を助けたければ指定の時間に下記の場所に来い
おまえ以外が来れば、さっき聞いた彼の声が最後になる

ワープロ打ちの文章を、三度読み返す。指定の日は、日曜の早朝。木崎と土曜の夜会ったのち、その数時間後の夜明け前ということになる。

何という順番だ……

体温があがってゆくというより、むしろ下がってゆくのを感じる。
今俺はいくつだっけ、結城はぼんやりと考える。十六歳か。
じゅうろく。

思わず口に出してつぶやいていた。

まだ、たったそれだけ。

受話器を置いてから、賀来の手の震えは止まらなかった。

本当だ、結城。僕は殉教者になりたかっただけかもしれない。君の役に立つなら何でもよくて、そのために犠牲になれるなら、それが僕にとっての幸せだと……

じゃあ、これは自分のためにしていること？ 自分だけのために？

混乱する頭に、回答は降りてこなかった。

Blue 8

賀来とは個人的に連絡が取れた、俺が迎えに行くからあまり騒がないで。

珍しく結城のほうから神父に報告があり、この件は結城に任されることになった。

翌日の土曜日まで結城は大人しく部屋にいて、賀来の机の上のものを、ひとつひとつ手に取ったり、服に触ったりしていた。

賀来らしくきちんと整えられた机の上には、養護施設の子供たちが掘った木製のブックエンドに挟まれた参考書、聖書、小説に教科書。ペンスタンドには、一本一本カッターナイフで削られた、長さも様々な鉛筆。

……あいつはよく、俺から何かの花の香りがすると言ってたけど、こうしていると、あいつの持ちモノや服からも匂いがする。表現しにくい、朝の森みたいなの……

主のいない部屋の小道具たちから立ち上る気配には、常に必要最小限のもので生きようとする、賀来のささやかで欲のない生き方が静かにあらわれていた。

机の上に置き去りにされた文庫本は、図書館から借りっぱなしのものだ。黄ばんだ表紙には「智恵子抄」の文字。

ぱらぱらめくると、いつも開けているらしいページで自然に止まった。

「山麓の二人」

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は

険しく八月の頭上の空に目をみはり

裾野とほく靡いて波うち

芒ぼうぼうと人をうづめる

半ば狂へる妻は草を藉いて坐し
わたくしの手にも重くもたれて
泣きやまぬ童女のやうに慟哭する
――わたしもうぢき駄目になる
意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて
のがれる途無き魂との別離
その不可抗の予感

――わたしもうぢき駄目になる

文字を追う結城の視線は吸いつけられたように離れず、同じページを無意識に何度も何度も反芻した。

木崎はアルコール臭い自室の窓をあけ、外気を入れようと試みた。滅多に開けることのない古い窓はガタついて、不要に大きな音をたてる。夜の街から上がってくる猥雑な喧噪を聞きながら、口元に手を当て息を吐き、酒臭くないか確認した。

この間は、悪かったな。……あの時飲んでた酒のアルコール濃度が60%だったから。

駄目だ、くだらない。

空回りする言い訳ばかりが頭に浮かぶ。

結城は来るだろうか？ 俺が彼ならごめんこうむる。あれだけ我慢強い彼が初めてはつきり嫌だといったものを、俺は殴ってまで。

……俺は彼の信頼を裏切った。あの部屋以外では自分に親切だとい前に言ってくれた結城。手放すと決心したのに、目の前にしたら、離れたくない気持ちとこれで最後だという焦燥が爆発して、外であんな真似を。ああ、今さら取り返しがつかない……

ふとビルの前に続く道に、黒いパーカーを着た結城の姿が目に入る。

その瞬間、まるで小娘のような胸の昂まりを覚え、木崎は火をつけては消していたタバコを卓上に放り出した。

いつものように、ポケットに両手をつっ込んだままの結城の前でドアを開けた木崎は、微妙に視線をずらしながら、静かにいった。

「……来てもらえる自信がなかったよ」

結城は口元に少し笑みを浮かべ、黙って部屋にはいった。

トレーニングルームの一角のホームバーカウンターで、木崎はいつものように卓上ポットのスイッチを入れ、カップを用意する。

「バーでは、悪かったな。あんな風に扱うつもりじゃなかった。ちゃんと話だけするつもりだった。酒に飲まれたのか……あれから自己嫌悪で吹き出物が出そうだった」

「強いお酒飲んでましたからね」

結城はカウンターのの上に散らばった煙草を片よせながらさりと云った。

「……お前の訪問はこれが最後になるかな」

ルビー色に輝く紅茶を二つ、ミントンのカップに揺らしながら結城の前に置く。

「ひとつ、最初に聞きたいことがあって。僕の友人がいなくなったんです」

「例の坊やか？」

「その行動につながるようなことをこの間なにか言っていなかったかと思って」

木崎はいつものように頭を額から逆なでした。

「んー、思い当たらないな。まあ、情報が入らないか気をつけておいてやるよ」

結城の隣に座ると、銀製の砂糖入れから角砂糖を二つ紅茶に放り込む。

「親友かってきいたら、そうですっていいやがった。お前さんにそ

ういうのがいること自体、不自然だ」

木崎は小さく笑った。結城は紅茶を飲む木崎の口元をじっと見つめる。

「あいつはわかってないから、何も」

視線を自分の手に戻すとつぶやいた。

「わかってないって何が」

「俺といっても何にもならないこと」

木崎はカップを置いた。

「何かになるから、そばにいたいわけじゃない。どころか、自分が破滅しそうになってもそばを離れられない、そんな衝動が恋ってやつだ」

木崎は自嘲めいた目を天井に向けた。

「その坊やも気付いてないだけだろう、おまえに友情を抱くなんてありえない。欲情ならまだしも」

木崎は右手で結城のほほに触れた。結城が一瞬体を固くするのがわかる。

「今日は何もしないよ」

「……してもかまわないですけど」

木崎はカウンターの上のタバコを咥えた。

「初めての時から、お前とやる時、たいてい薬を使ってた。男相手でゴム使うのも不自然に思っただろうが、あの外側に塗ってあったんだ。注射の次に吸収が早いし、体に針の後も残さない。しらふでのセックスを知らなければ、あの行為自体を天国だと思わせるくらいの威力がある。知ってたか」

「いつ使われてるかわからなかったけど、自分が変になるのは感じてた」

「変どころか。俺はそんなお前を見るのに溺れて、たった十六歳相手にあんなものを使い続けてたんだ」

木崎は一気に紅茶を飲みほした。

「危うくお前を殺すところだった。でもお前の一番の目的は、薬を

使った行為じゃない、これだったろ。ブルー、いや、結城」

木崎は結城の前に、ポケットから無造作に取り出した小瓶をコトリと置いた。

透明な液が底から二センチほど入っている。

結城の眼が見開き、ごく自然に瓶に吸い寄せられた。

「それと、これは俺から個人的に」

鈍色に光る古風な鍵を、結城の前に置く。

「……これは？」

「以前話した、俺の財産だ。まあ、ささやかなものだが。俺は金融機関を信じてないんで、某所に隠してあるんだ、犬みたいだね。これはそいつを開けるカギだ」

続けて一枚の封筒を、結城の前に出す。

「ここに地図が入ってる」

手の中の鍵を見ながら、結城は尋ねた。

「……どうして、僕にこれを」

「お前の夢と可能性に投資するのは、前から決めてたことだ。だが、今お前にこれを渡すのはなんていうか、俺のけじめのひとつだ。もうお前をもので釣らない、俺ということに価値があると思うなら来ればいいし、ないなら来るな。ブツももう渡さない。そのカギはお前に大人の知恵が付くまでとっとけ、それから使え」

木崎は窓の外の夜景に視線を投げた。

「以前お前は、自分を罰するために俺に抱かれないといった。これも俺に対する罰のようなものさ、くだらない欲望で大事な少年一人殺しかけたことへのな」

しばらく眺めた後、

「……ありがとう」

珍しい言葉を言って、結城は小瓶を振った。

「今までもらったの全部で、何人分くらい？」

「体重にもよるが、まあざっと十五人くらいは殺せるかな」

「ひと一人殺すのに、たとえば角砂糖に染み込ませたとして……」

「一人なら0・5?もあればいいだろう。人にもよるがそれでいたい数時間後から半日後だ、酔ったようになって死にいたる」

「それじゃ」

結城は瓶を置いて静かに言った。

「あなたは明日の夜明けまでは生きていられるわけだ」

Blue 9

一瞬呆然と視線を泳がせ、木崎は椅子を蹴って立ち上がった。

「……結城!!」

空のミントンのカップが転がり、タイルの床に落ちて割れた。

「お前……お前、俺を……」

「あなたはいつも角砂糖を二つ入れる。さっき俺が持ってきたのに入れ替えた」

結城は囁くように歌った。

「悪い亭主に泣かされるより、わたしや一生ひとり者

ひとの赤子に歌をうとうて、私も夢をもらいましょう」

木崎の額に脂汗が流れる。

「お楽しみの後、よく僕の横で歌ってたね。子守唄のつもりだったのかな」

「お前、……」

「小さいころ、この歌が好きだった」

木崎の耳元に、顔を寄せる。

「沖之真船島。俺はあなたと同じ島の出身だ、木崎範義さん」

木崎は何も言えず、ただ穴のあくほど結城の顔を見た。

「はじめて声をかけられた時、わずかな訛りを感じた。あなたの顔もうっすら覚えてた。あなたの道場にかかった看板も」

「まさか、俺が故郷を出たのは十四年前で」

「二歳にもなっていれば俺には十分だ。俺は何一つ、忘れることを許されていないんだよ」

一人称の変化と同時に、声色までが変わった気がする。信じられない思いで、木崎は結城に問いかける。

「あの災害のとき、……じゃあお前はあそこに」

「災害じゃない、あなたは知ってるはずでしょう。俺はこの眼で見

た。窒息したようになって死ぬ者、撃ち殺される者、火炎放射器で焼き殺される者。幼いころから、俺は見たものを全部記憶する能力があった。写真のように脳裏に張り付いて、どれもこれも忘れようにも忘れさせてもらえない。表情すら一つ一つ、今でも全部思い出すことができるんだ」

……忘れるのは不可能だ。バーでの結城の言葉が木崎の頭にこだまする。

「これは何の呪いかと思うこともある。けれどこの能力が主の思し召しなら、これから俺は神の仕事の片棒を担ぐことになるだけだ」
なんてやつを、俺は相手にしてたんだ。窓の外を見つめる結城の冷たい横顔を見ながら、木崎の背中に冷たい汗が流れた。

「おれを、そんなに許せないか……。お前をあんな風に扱ったから？」

「とんでもない、あなたには感謝してるよ。薬物を使った性行為の魔力も、暴力や恥辱の効果も、飴と鞭の使い方も、とてもいい勉強だった。一時は薬のせいでおぼれかけたけど、それも含めてこれはこれからの俺の人生でのいい財産になるだろう。いずれ生かす時が来たら」

穏やかな笑顔で木崎を見下ろす。

俺はとんだ道化だったわけか……。木崎は呻くようにしていった。
「俺は島を捨てた人間だ。たまたま私物を取りに島に帰ろうと思った船が事件で足止めを食って、事情も説明されずただ本土に帰された。島の友人から船上でわけのわからない電話を受けたが、突然切られて……。そのあとは」

「当局から金をもらい、疑問も追及も捨てた。だろ」

木崎は口をつぐんだ。

「そして金を隠した、犬みたいに」

「……俺はそんなに悪いか。あんな島どうなったって知るか。俺に

ペドフィリアの名前を着せて永久追放しやがった。一人残らず燃やされたところで」

「でも母親だけは好きだったといってたね。その母親を殺された事実には目をつぶったわけだ」

木崎は口を曲げて黙った。結城は木崎の耳元で静かに囁いた。

「あなたは自分で言う通りのクズだ。だから、汚い金は引き受けるよ。あなたは俺にすべてをくれた。利子をつけてこの国に帰してやる。このいきさつを知っているのは、この世であなただけだ。さんざんぼやいてた腐った人生なんて、もういらないだろう」

部屋に静寂が満ちる。何の情けも感情も持たない結城の残酷な言葉は、木崎の価値観からすれば「美し」かった。そして、彼自身も。「完敗だな……」

木崎はくすくすと笑い、顔を両手で覆った。

結城は黙って奥の部屋に入っていた。いつもブルーのカーテンが閉じられていた、一度も人間扱いを受けたことのないひんやりとした部屋。

懐から取り出した薄い透明なゴム手袋に長い指を通すと、両手の指の股を音を立てて組み合わせた。片隅にある小さなデスクの上のパソコンを開き、デスクのわきの収納を探る。データ末梢ソフトを探し出すと本体に差し込み、作動している間に棚のアルバムを開いた。自分の写真だけ抜き出してデスクの上のシュレッダーにかける。DVD-Rをいくつか取り出し、それをつかんで道場に戻ると、持ってきたリュックに無造作に放り込んだ。

「結城」

自分など目に入らない様子でてきぱき作業を進める彼に、木崎が声をかける。

「俺は本当にお前が好きだった。信じてくれるか」

「わかってる」

横を向いたまま結城が答える。

「……お前はこれから集蛾灯みたいに、俺のような人間を周りに

集めて生きるんだろうな」

すべてを終えて、結城が木崎に向き直った。木崎は場所を移してソファに腰かけたまま、結城を見上げていた。

「お前の嫌いな話かもしれないが、結城、お前の恍惚の表情はほんとに綺麗だったんだ。俺は馬鹿だから、それを見て自分がお前を幸せにしているように勘違いしたことがある。あんな目にあわせておいて、まるで恋人に最上の幸福を与えているように思ってたんだ。どれだけ頭がいかれていたんだか」自嘲めいて、口の端をゆがめて笑った。

「一瞬なら」

結城はぼつりといった。

「俺も勘違いしたことがある。……もしかしたら自分は、あなたを愛してるのかもって」

木崎の目がぼつと輝いた。

「本当か」

結城は黙って頷いた。

……そうか。

だからお前は、俺を殺すんだな。

言葉にできない身勝手な確信が、木崎の胸を貫いた。

しばし沈黙した後、下を向いて、静かな声で言う。

「これで最後なんだな。お前が一番嫌いだったことを最後に頼みたい」

「何を」

「同情でいい。キスしてくれないか」

結城はゆっくりリュックを下ろし、手袋をはずすと、木崎の隣に座った。木崎の太い指があごにかかり、顔を心持ち上にあげると、長い睫毛を閉じる。かすかに開いた唇、あの林檎のような甘い吐息、白いほほの手触り。自分の唇を重ねれば、五感に伝わってくる結城

の存在は、甘く優しいばかりだ。

たばこのにおいも酒の匂いもしない若い結城の口内。絡める舌に優しく反応する舌。こいつが俺を殺す、俺のただれた人生に幕を引いてくれる。何の不満があるものか。

木崎は顔を離すと、小さな子どもにするように、ただ結城の鋼のように細い体を抱きしめた。

「お前の仕事を見届けたかった」

思いのたけをこめた言葉が、細く震える。

「一人で生きるんだな、おまえはこれから。俺は見守ってやる、できることはないが、どこからきつと」

木崎の背中にそっと結城の両手がまわされる。結城の全身から漂うあの甘い香りが、アルコールに痺れた体の隅々までを満たしてゆく。

お前は時々、どうしてこんなに優しいんだろう？ 今に至っても、お前が奪ってゆくものに、文句を言う気になど到底なれない。

結城は木崎の肩に顔を埋めた。木崎の目に、似合わない涙が膨れ上がる。結城のさらさらとした髪の毛を撫でながら、囁くようにつぶやく。

「戦ってくれ、俺の分も」

結城がかすかに頷いた気がした。木崎は結城の肩を持って、ゆっくりと身を離す。

「……もう行け。お前に最期をみられたくない」

立ち上がった結城の、あの透き通った視線を見上げたのち、目をそらして別れに片手をあげると、木崎はしびれ始めた体をくると後ろに向けた。

結城は後ろを向き、リュックを肩にかけた。

>i7367—1094<

小走りに、寒風の吹きあげる階段を走り降り、凍てついた深夜の

道に出る。胸の内を、何かがごうごうと音を立てて流れる気がするが、立ち止まったら、考えたら、先に進めない。

コンビニのウィンドウをすかして見た時間が、午前一時半。つぎの待ち合わせが夜明け前の午前五時。時間に余裕がないわけではないが、移動先が遠い。一気にタクシーでは距離がありすぎる、まず路 駐の車を盗むか、と考えながら、リュックの中にサングラスを探す。

そのとき、

背後からひそやかに近づいていた人影が突然結城の口をふさいだ。のけぞったと同時に、もう一人がしたたかに腹に一発パンチを入れる。息が止まるのを感じながら、瞬間口を塞いでいる手を逆手でつかみ、捻じり上げると同時に、肘で相手の顔に一閃食らわし、正面の人影の股間に渾身の蹴りを入れた。

木崎に教えられたとおりに、反射的に体が動く。

二つの人影はよろめき、壁にぶつかり、街灯の灯りに顔があらわになった。

「お前ら……」

木崎の道場で二、三度見た顔だ。確かもうあそこを追い出された……

「なめんな糞が」

うち一人が低い声で唸ると、ふらふらと近くにあった瓶を振り上げた。

「気取りやがって。死ね」

左手で向かってくる横面を張り倒し、体勢を整えなおすと、背後から横腹のあたりに、鋭い痛みが走った。

「あ」

振り向くと、痩せたサングラスの茶髪の少年のふるえる手に、血にまみれたアイスピックのようなものが握られている。

「うるさいぞ！」

近所のビルの二階の窓が開くと、少年二人はよろよろと走り去っ

た。

「……」

言葉も出ない状態で、壁に寄りかかり、腰にあてていた手を離すと、服ににじんでいた血がべとりとついた。

天罰、か……？

もし、天があるなら。

脂汗が流れ、吐き気が走る。服をめくると、血が流れ出ているのはわかったが、わき腹にあいている傷は思いのほか小さかった。深いかもしれないが、これなら出血は大したことはない。

結城は手探りでリュックをあけ、血を止められそうなものを探す。打ち身用の湿布薬と、自転車の荷台をふくためにいつも常備していたタオル。ないよりはましだ、一応血は止まるだろう。ハンカチで強引に血をふきとり、シールタイプの湿布薬で蓋をする。その上から、細く擦ったタオルをきつく巻いた。息を深く吸うと鋭い痛みが脇に走るが、耐えられないほどではない。結城は、発作の気休めに携帯している強めの痛み止めを口に放り込むとがりがりと噛み碎いた。

……進め、進まなくちゃ。車を探して……

相変わらず、何かがごうごうと音を立てているような胸の内に、賀来 の部屋で読んだ高村光太郎の詩編が、脈絡なく押し寄せる。

わがこころはいま大風の如く君にむかへり

愛人よ

いまは青き魚の肌にしみたる寒き夜もふけ渡りたり

されば安らかに郊外の家 に眠れかし

をさな児のまことこそ君のすべてなれ

あまり清く透きとほりたれば

これを見るもの皆あしきころをすてけり

……

君の見いでつるものをわれは知らず

ただ我は君をこよなき裁きの司とすれば

君によりてころよろこび

わがしらぬわれのわがあたたかき肉のうちに籠れるを信ずるなり

冬なれば櫟の葉も落ちつくしたり

音もなき夜なり

わがこころはいま大風の如く君に向へり

Blue 10

地下にいても、細く開けた小窓から遠い海の音が聞こえてくる。
ごうごう、ごうごう。

よほど荒れているのか、地鳴りのような、叫びのような、孤独な
とどろき。

九十九里浜……

いつか来たかった。いつか結城と一緒に。

高村光太郎が、気の違った千智子を静養させた土地。住む世界は
分かれても、死ぬまで、そして死んでも、永遠に思い続けたただ一
人の女性。

凍るような冷たい空気の中で、賀来は上を見上げる。僕は本当に
今、君の助けになってるのか、結城？ 僕のためにもし君が傷つい
ていたら……

（お前になんかできることは何もないんだ。何もせずにいると言っ
たのに、それだけのことがなぜできない！）

結城の怒声を思い出し、胸の前で手を組む。

何も望まない、次に会うとき、彼が僕を許し、ほんの少しでいい、
笑ってくれますように、神様。

指定された倉庫の前でタクシーを降りると、結城は海岸に向かっ
た。ただまっ黒な塊となって唸りを上げる夜の海。海と空の境に、
狐火のような明かりがぼつぼつと見える。

ふと、駐車場にちかちかと点滅する光を見つける。近づいてゆくと、
懐中電灯を手に立ち尽くしている人影が逆光の中に見える。

その姿は、すべてを用意して獲物を待つ狩人のようでもあり、途
方に暮れた子どものようにも見えた。

結城はリュックを片手にぶら下げ、大槻琢也に向かってゆっくり
と歩いた。

大槻は灯りを消した。
あたりはほとんど闇に沈む。

「どうしてほしいか言え」

心持ち荒い息で、それだけ、結城は言った。

大槻は改めて、自分が呼び寄せた存在をまじまじと見つめた。

冬の海から吹きつけてくる風のように、殺伐としたなにかがむき出しになっている冷え切った風情。闇の中に光る目。海から投げ出されたように立つ、一人で生きるものの立ち姿。

（見たかったのはこれか）大槻は自分に問いかけた。

ずっと、自分が何のためにこれをしているのか分からず、ただ決めた通りに暴走する自分を止められないまま、ここまで来ていたのだ。

「よく来た、な」

寒さで口が回っていない。結城が来るまで三十分は立っていたのだ。

「こういう状況で、本当のお前と、話がしたかった」

大槻は青い唇で言った。

「賀来は」

「安全な場所にいるよ」

大槻は携帯を差し出すと、画面を見せた。

目を閉じた賀来が、古びたソファの上に転がっている写真。

画面から目を離すと、結城はなにかが燃え盛るような目つきで大槻を睨む。

「勘違いするなよ、あいつは自分からそこに来たんだ。俺は場所を提供しただけだ。こんな誘いに単純に乗るなんて、よほどあいつお前というのが苦痛なんじゃないか」

「どうしてほしいか」と言えよ」

大槻の言葉の最後に重なるように結城は言った。額を汗が流れる。

刺された場所から、何かが抜けていくようだ。

「そうだな……」

大槻はかつて考えていたことをひとつ口にした。

「学校で、みんなの前で、賀来を殴れ。理由も話さずにだ、それこそ前歯も折れるほど。それが約束できるなら、やつの居場所をお前に教える」

「……なに？」

「約束したとしてもし破ったら、これからも同様のことが起きるだろう。どのみち学園はあいつにとって地獄になる」

「……」

何かきちんと考えようとするが、頭の芯が痺れて先に進まない。

わき腹の鈍い痛みは吐き気となって喉からせりあがろうとしていた。「いま約束するといえばあいつを解放するのか」

息遣いを気取られないように、早口で言う。

「そうだな、口で言うなら簡単だ。態度で示してもらおうか。とりあえず、跪いて俺のつま先にキスしろ。そしたら場所を今すぐ教えてやるよ」

勝ち誇ったように顎を上げて薄笑いを浮かべる大槻の顔に、結城は一切視線を向けることをしなかった。ゆっくりと屈もうとして力が一気に抜け、すんと地面に膝を落とす。

大槻が驚いて落とした視線の先で、地面に両手をついたまま、結城は大槻の靴の先に顔を近づけた。

……嘘だろうか？

「おい。やめろ！」

思わず大槻は叫んでいた。信じがたい光景だった。

結城がぼんやりと顔を上げる。月あかりと、離れた道路の街灯くらいしか光源のない浜辺で、表情すらうつすらとしか確認できない。

「お前……。なにしてるのか分かってるのか？ そんなに、あいつのために、どうして」

「じゃあ何をすればいいんだ」

結城はこちらの言葉もよく聞かずに続ける。そんな姿は見たくない、矛盾した言葉が喉まで出かかる。

「本当に、賀来のために……そこまで？」

「早く言えよ。時間がないんだ」

かすれた、投げつけるような言葉。

大槻は一気に頭に血が昇るのを感じた。

「やめた、お前には教えない。あいつは好きに帰れるようにしてあるよ。お前のもとに帰りたくなったら帰るだろ。信用して家で待ってけ」

「……」

座ったまま大槻を見上げていた結城がふらりと立ち上がった。

「ふざけるな。死にたいのか」

おさえた怒りがにじみ出た、押し殺した低い声。

「死ぬ？ やってみろよ。俺を殺せばあいつの居場所なんて永久にわからないぜ、それでもいいならな」

結城はいきなり大槻を突き飛ばすと、したたかに拳で顔面を殴りつけた。体が反転したところを捕まえて、近くに止めてあった車のボンネットにうつぶせに押しつけ、右腕を思い切り背中にねじり上げる。鼻血で顔をまっ赤にしながら、大槻が叫ぶ。

「それ以上やってみろ、死んでもしゃべらないからな！」

「死んでも？」 結城が薄い笑いを含んでいう。

「死んだ方がましと思えるほどの痛みや恥辱を知ってるのか、お前が」

ポケットに突っ込んだ指先に針状のものを光らせた次の瞬間、それを大槻の人差し指の爪の間に遠慮なく差しこむ。蹴り殺される瞬間の犬のような声をあげて、大槻は絶叫した。

「何本やれば満足する？」

涙でぐちゃぐちゃの大槻の眼前に針をみせて、結城は次の指をつかんだ。

「や、めろ、やめてくれ」

喘ぐように大槻はあっさりと降参した。

「早いな」

つまらなさそうに、結城がつぶやく。はあはあと荒い息を吐く大槻の顔の正面に回って、結城は尋ねた。

「賀来はどこだ」

「住所は教える。ここから見える道を真っすぐ行ってすぐの無人の家だ。もうじき取り壊すうちの別荘で、カギはこれ……」ぺらぺらとよみなくしゃべる大槻に、結城は苦笑いした。

「現物はいらない。お前が電話して中から開けさせる。携帯の履歴は全部消せ」

大槻は携帯から番号を押して、別荘の固定電話にかけた。

「今から行くから、開けとけ」短くそれだけ言うと、切った。

人差し指の先から、玉のように盛り上がってはこぼれおちる血が、大槻の銀色の携帯を血で染めていく。格が違う。結城の前でただ無様な子供になり果てている自分に声も出ない。顔をゆがめて右手を抑える大槻の手首を結城が不意に握る。びくりと手を引こうすると、いきなり結城は血まみれの指先を自分の口に含んだ。

「！」

柔らかい唇の感触に突然包まれて、大槻は絶句した。

血を吸われる感覚が、痛みとともに体の芯を痺れさせる。

結城は睫毛を伏せて指先を眺めると、ふところから小瓶を出し、栓を抜いて、透明な液体を指先にたらした。

「それは？」

「消毒薬だよ」

先をしばらくティッシュで押さえると、絆創膏をきつく巻く。

「傷は小さいし、こんなもんだろ」

指先に巻かれた絆創膏を見ながら、大槻は今の感触を思い返し、胸の鼓動を抑えかねていた。結城は傍らのリュックに瓶をしまうと、そのまま止めてあった車に背中を預けるようにして、目を閉じた。

「どうかしたのか？」

「……何でもない」

夜明けのうす明りで、肩で息をしているのがわかる。薄く眼を開けて、結城は言った。

「今度くだらない真似したら殺すって言ったと思うんだが、聞こえなかったかな」

「……」

大槻は、明るくなってゆく空を見上げながらハンカチで鼻血を押さえ、つぶやいた。

「なんであいつと。何で賀来なんだ。いつもそう思ってた。お前が俺を憎んでることも……」

「そっちが賀来にあれこれ仕掛けたのが先だ」

「そうかもしれない、最初は軽い気持ちだったけど」

濃紺から紺色、赤紫、グリーンに黄色、あらゆる色を溶かしこんだ夜明けの空のグラデーションが地平から広がり始めている。

「今思えば、俺、嫉妬してたのかも……」

結城はゆっくり体を起こした。明るくなると、さらに顔が真っ白なのがある。

「おい、ほんとに大丈夫か？ 顔色がひどいぞ」

「俺のことはもういいから、タクシーでも拾ってとっとと帰れ」

大槻はなにか立ち去り難そうに、結城を見て黙っている。

「行けよ」

朝焼けを映す海に顔を向けたまま、結城は言った。

「あの、悪かったな。……もう、おれ」

大槻は言葉が続かず自分の指先に目を落とした。

「その、やめるよ。ごちゃごちゃするのは」

結城は横を向いたまま手をあげて、別れを告げるようにひらひらと指先を振る。大槻も少し照れながら指先を振ると、

「……じゃ、な」

それだけいって、大事そうに左手で右手を包み、通りのほうに歩いて行った。

「さよなら」

結城はひっそりと口の中でつぶやいた。

上のほうで、誰かが玄関を開けた音がする。ゆっくりとした足音が、廊下をこちらへ向かってくる。

大槻？ それとも。

ソファから身を起こして、胸の鼓動を聞きながら階段を見つめる。細く長い脚でそれとわかったとたん、賀来の全身に電流が流れるような喜びが湧き上がった。

結城！

すらりと長身の、見慣れたシルエットが、黒いパーカーに黒いパンツ姿で、階段の下に降り立った。フードを深くかぶったまま、薄暗い室内を探るように見ている。階段わきのスイッチをかちりと入れる。一瞬で部屋中が光に満ちる。

一瞬目を細めた結城と、ソファの脇に立つ賀来の目が合った。

「賀来……」

結城は両手でフードを外した。ずっと見たかったあの結城の美しい目。賀来はかけ寄ると、何も言わず抱きついた。そのまま彫像のように、二人ありったけの思いと力で抱き合う。

外の空気に冷え切った結城のほほに、賀来は自分の熱い頬をすりつけた。

「結城！……結城、結城、ごめん」

声を詰まらせて何度も名前を呼ぶ。

「大丈夫だったか？」かすかに微笑みながら、かすれた声で、結城が聞く。

「僕は大丈夫。一度大槻が来て写真撮って行ったけど、寝てるふりしろって言われただけだから」

「あいつに拉致されたのか」

結城の問いかけに、賀来は言葉に詰まった。

「自分からくるように言われて、あの……。僕らがあそこに出入りしている写真と、それから、人に見せられない写真を公表するって、そんなふうに言われて」

一呼吸おいて、結城はゆっくりといった。

「その件は片付いた。写真のことも、もう大丈夫だ」

体を離して見て、結城の顔がひどく青白いのに気づく。

「結城、大丈夫？　すぐく具合が悪そうだ」

「なんでもない」

結城はぐったりとソファに座った。呼吸をするのもつらそうな様子で、そのまま目を閉じて、ソファの背にかけた自分の手に顔を埋める。発作の前兆だろうか？　賀来はおろおろと、苦しげに胸を上下させる結城のわきに座る。

ふと、自分の服の脇がうっすら赤く染まっているのに気づく。血？　どこで？

そこでやっと、結城の服の脇腹部分に、シミが広がっているのに気づいた。

触るとべたりと手が赤くなる。

「結城！　怪我してるの？」

黒い服なので目につかなかったのだ。

「……海は、すぐそこなのにな。いま、朝焼けで、すごくきれいだった……」

うわごとのように、顔を伏せたまま結城は言った。

結城の服を強引にめくると、腹に乱暴に巻いたタオルの一部が血に染まっている。

「救急車呼ばなきゃ」

「だめだ」

「これは呼ばなきゃ駄目だよ、結城。僕にはどうしようもない傷だ」
賀来は泣きそうになっていった。

「呼ぶな、絶対」結城は聞き入れない。

「このままじゃ死んじゃうよ」

「それならそれで仕方ない。そんなもの呼ぶ資格はもう俺にはない」
「資格って？」

結城は答えない。

喉にこみ上げるものを感じながら、賀来は言った。

「今結城が死んだら、僕のせいだ……」

「違う」結城が即答する。

しばらく沈黙した後、熱に浮かされたような眼で、天井を見上げた。

「……俺は死なないよ、賀来。毒ガスの後遺症で発作は起こしてるけど、なんだか、あれ以外では死なないような気がしてるんだ。いづれ俺はあの発作に殺されるだろう。でも、それまでは悪魔が俺を守ってくれる。いや、神かな……どっちでもいい。

俺がやろうとしていることがこの世界に必要なことなら、このさき俺は死なない。目的を果たすまで……」

「目的って……？」

うわごとなのか本気なのか。

しばらく考えたのち、結城がつぶやく。

「それを聞くと、共犯者になる。お前に話す気はない」

賀来は唇をかんだ。

「じゃあ、もし、この先僕が、結城の共犯者になりたいって言った
ら」

「そのときは、おまえの前から消えてやるよ」

賀来は世にも悲しそうな顔をした。

天井を見つめたまま、結城が続ける。

「お前もわかってるだろう、俺はいつまでも俺じゃない。何もかもを壊して生きてゆくしかない。お前はもう、俺のそばにいちやいけないんだ……」

賀来はハンカチを取り出すと、結城の額の汗をそっとふいた。

「それでも、僕はそばにいるよ。結城が迷惑だっていっても、そばを離れない。どんなに怒っても、きつと無駄だ」

「バカだな……」

ため息交じりに結城はつぶやいた。

「ここにずっと一人でいてわかった。結城のそばにいないければ、僕は僕でいられないんだ」

結城はゆっくりと横を向き、苦しそうに眉根を寄せた。何度か瞬きしたその目に、光るものを見た気がした。まさか、賀来は思う。東京に出てきてから、結城の涙を見たことは一度もない。

賀来はかがんで、結城の唇に顔を寄せた。結城はふいと顔をそむける。

「どうして」

「俺は汚れてるから」

「なんで汚れてるの」

儀式のように、死者に手渡すキスしかしていない。まだ血の味がある。結城は胸の中でつぶやいた。一生、この汚れも味も消えることはないだろう。

すべての言葉は弱い吐息とともに消え、もう音にはならない。

賀来は首をかしげ、黙ったままの結城を見つめながら言った。

「じゃあ、いい。結城が聞いてほしくないことは聞かない。誰に怪我させられたかも、他も全部。でもね。このまま生き続けて、結城がだれかほかの人に変身して僕から逃げ続けても、きつと見つけ出す。神話みたいに、物語みたいに。どんな世界に行っても、僕はいつでも、結城のそばにいるんだ」

苦しそうに目を閉じた結城は、荒い息をしたままもう返事をしなかった。賀来は結城の耳元に口をよせ、呼びかけた。

「車を呼ぶよ、教会に帰ろう。医者に診てもらおう。君が死んだら何の意味もない。生きてさえいてくれたら、それでいいんだ」

冷たい結城の頬に手を当て、額に額を寄せて、体温を移す。

「おまじないだよ。結城、聞こえる？　僕がひとつキスすると、君

はひとつきれいになる」

冷たい唇を包むあたたかい賀来の唇を、羽根枕のように結城は感じていた。

結城の目の中に、あのブルーが広がる。

上から赤いインクがぼとりぼとりと落ちてくる。

潜ろう、もっと深いところへ。濁った色が薄れ、澄んだブルーになるまで。

潜行する先に、キラキラ光りながら落ちてゆくものが見える。

あれは、そうだ、やっと見えた。

賀来の十字架だ……

賀来は？ 賀来を探さなくちゃ。

結城は水をかきながら、ゆっくりと手を伸ばした。

木崎範義の遺体は、東京湾に面する公園の駐車場の車中で見つかった。

空の酒瓶をいくつか抱くようにして横たわる傍らに、鉛筆書きの遺書めいたメモが一枚。

「酔生夢死。わが人生に悔いなし。この酒がもし俺を殺してくれたなら、灰は誰かが海にばらまいてくれ。

海よ、俺の孤独な人生に祝福を……」

第一章終了＞

<Blue

$$\begin{array}{r} > \\ & i \\ & 7 \\ & 2 \\ & 5 \\ & 6 \\ \hline & 1 \\ & 0 \\ & 9 \\ & 4 \\ < \end{array}$$

Blue 10 (後書き)

読んでくださってありがとうございました。

ここまでがBlue第一章です。

第二章のタイトルは「Joanna」となりますが、主役二人はもちろん変わらないまま、お話は新しいステージへと進みます。

飽きずについてきていただけたなら、Joannaのほうも引き続きお付き合いくださると嬉しいですよ。

J o a n n a 1 (前書き)

ここからは第二章に入ります。

副題は J o a n n a となりますが、「Blue」の第一章が Blue 1～10、第二章が J o a n n a でこれも Blue の続きの話であることに変わりありません。

長い章になりますがお付き合いくださいませ。

Joanna 1

定規で引いたような唐松の高い幹がいくつもまっすぐに緑の天井からなだれ落ちる、そんな森の中。

高原の香りが満ちる早朝の道を、ふたりで歩いてゆく。

林の向こうに小さな小川が見える、あのきらきらしたところまでいこう。

以前のように、綺麗なものの名前を言いあいながら。

返事の帰ってこない結城の背中に向かって、そんなふうに話しかける。

水。

背中から声が返ってくる。

君らしいね、じゃあ、風。

……透き通った小瓶。

小瓶の中の星砂。

割れたたまご。

それきれい？　じゃあ、ふわふわのひよこ。

針の先の血の雫。

綺麗なものをいうんだよ？　砂糖漬けのくだもののかけら。

ふたつのうごかないからだ。

……結城？

結城がふつと振り向く。

ふたりの顔が見たい？　君はほんとは知ってる。

なにを？

結城がゆつくりと手を広げる。

この手がね……

「賀来！」

突然呼ばれて目を開けたので、何が起きたのか咄嗟にわからなか

った。

「大丈夫か？」

顔を覗き込むたくさんの目、目。

「……え、僕は……」

自分が固い地面に倒れていたと、半身を起こしてようやく気付く。
一番近くにあったのが、体育教師の柳沢の顔だということも。

「静かにしてろ、たぶん脳貧血だろう」

背後がざわざわして、担架を運んできた生徒達が顔を覗かせる。

「あ、目が覚めてる」

「今気がついたんだ、一応運ぶかな」柳沢が独り言のように言う。

「いや、担架なんて。大丈夫です」

「でも顔がひどく青いぞ。担架はいいとしても、一応保健室には行ったほうがいいな。保健係いるか」

「今日休みでーす」

「どうせ俺が担架借りてきたんだから、返しがてら一緒に行きます」
ひととき背の高い生徒が、柳沢のそばにかがみこんでいった。

「ごめん、俺のせいだ。立てる？」

誰だっけ。ふたクラス合同のドッジボールの授業だということは
思い出したが、名前が思い浮かばない。背の高いのに腕をつかまれ
ながら、ゆっくりと立ち上がる。

「じゃあ頼むわ、秋葉」

あきば。ああ、隣のクラスに最近来たという転校生。確かダブル
で一歳上の。

「僕、あの、何で倒れたんですったけ」

校舎に向かって歩きながら、片手にたたんだ担架を抱える秋葉に
聞く。

「ドッジボールの試合で、オレの球をまともに頭に受けたんだよ。
でもその後も一応試合を続けてたんだけどね、なんかどんどん顔が
白くなっていくなと思ったら、急に倒れた」

秋葉は前方を見たまま答える。

「目がさめるまで、倒れてどのくらい……」

「ものの2，3分かな」

茶色い長髪を馬の尻尾のように後ろでくくった秋葉の、非国産の野武士みたいな浅黒い風貌は、日本人にも17歳にも見えない。いや、ダブリだから18か。でも話してみるとなんということはない、さばさばした普通のやつだ。

南米育ちの妙なのが隣に来たらしい、と噂していたみんなに話してやろうと考えているうち校舎入口につくと、養護教諭が待ち構えていた。

「歩いてるわね。記憶はしっかりしてる？」

ふた月前来たばかりの新任で、確か桑名小夏。ほら、しっかりしてる。結構遊んでるって話だぜ。どうでもいい噂の記憶まで芋づるのようについてきた。

「大丈夫です」

「倒れる前のこと覚えてる？」

「いま聞いたけど、そこらへんはあいまいで」

「じゃあどこら辺まで思い出せる？」

不意に眼前に、結城の白い掌が広がる。

（君はほんとは知ってる。この手が……）

「……はつきりしません」

いやな汗が吹き出し、心臓がぎりつと音をたてた。

秋の風の中で学園の木々もかすかに色づき、夕暮れの街路樹で外来種のアオマツムシがけたたましく鳴き騒ぐ、そんな季節になっていた。

生徒が一人突然欠けた、そんな事故を抱えて春の初めまでひとしきりざわめいた学園も、時とともに沈静化して、日々は以前と変わらぬ落ち着きを取り戻したかに見えた。ただひとつ、それまで以上

に結城が避けられるようになった事実を除けば。

自宅の階段から落ちて転落死していたのを、家族が発見。

誰が見てもただの事故。

けれどそのこととは別に、死んだ大槻琢也が、結城と対立していたことは事実だった。

かかわりがわからないだけに、まるで結城に呪われて大槻が死んだかのように学園ではささやかれていた。

声にならない声は、消すことができない。さざ波のように広がった畏怖は、それぞれの中に凝ったまま、消えてはくれなかった。

けれど、誰も知らない事実がある。

木崎範義という男と、彼にブルーと呼ばれていた、結城との関係。新聞の地域版の片隅にあった、その最期…… 海の近くの駐車場の車内で死亡。

結城とかかわった人間が、同じ日に迎えた運命。そのふたつの死。僕だけが知るそれについて、僕はどんな声もあげることができない。疑問も、質問も、その先にある恐ろしい想像も、しまいこむしかない。ただ夢にだけ立ち現われて、問いかけてくるその責め苦に耐えるばかりだ。もうやめてくれ、もう考えたくない、そう浅い眠りの中で叫びながら。

もうやめる、もう考えない……

呪文のように自分に言い聞かせながら、自分の影を踏んで、賀来はいつものように一歩一歩、秋の道を歩いた。

「どう、今までの学園の印象は」

校門を出てすぐのケヤキ並木を歩きながらクラス委員の中条が聞く。

「映画が一本撮れそうだ」

カバンを肩に担いだまま秋葉がぼそつと答えた。

「映画好きなんだ？」

いつも中条とセットの竹之内が問いかける。

「あっちの高校で同好会に入ってた程度で。映画とか演劇とか、とにかくフィルムアートの類の、特に演出に興味があつて。この学園も、校舎がいいから選んだんだ。石やレンガ造りの校舎って日本ではほかにあまりない。よく地震国日本で崩れずに済んだな」

「関東大震災からこっち、建物が崩れるような地震って関東地方じゃないからね。ここもまだ、できて五十年だ。アメリカって地震少ないんだっけ」

「東海岸はないけど、北部だと西海岸、南部はアンデス・ロッキー山脈まで環太平洋火山帯にはいつてるから地震は結構あるよ。コロンビアでもね、まあ震度四くらいでも崩れるところは崩れるな。スラムとかは」

「秋葉ってスラムとかとは真逆な階級だって聞いたけど」
竹之内が話に割って入る。

「まあ、コロンビアじゃ裕福なほうだったかな」秋葉はポケットをまさぐると、チュッパチャップスを取り出し、ごそごそと紙をむいた。中条と竹之内が意外そうに見守る中、口に先を突っ込んでゴロゴロと転がしている。

「あっちじゃそれも流行りなの」竹之内の問いに
「オレは南米代表じゃないよ」棒のはじをくるくるさせながら答えた。

児童公園に入ると、噴水の周りの鳩がぼっと飛び立つ。

「あっちじゃ、公園のパン屑にたかるのが鳩じゃなくてみんな禿鷹なんだ」

「嘘だろ」

「本当さ」

群れ立つ鳩の向こうで、水飲み場に顔を伏せていた少年がふと顔をあげた。

「あ」

中条が小さくつぶやいて足を止める。

同じ学園の制服を着たその少年と、秋葉の視線が自然と交差した。

茶色っぽい髪の、色白の背の高い少年。睫毛の長い、無防備に見開かれた瞳は感情の読めない野生動物のようだった。遠目に見ても、恐ろしく整った顔立ちだということはわかる。

（ガゼルといえばガゼルだし、全体を見ればピューマでもあるし）

「こっちだ」

中条に袖をひかれるようにして、藤棚の下を通り、噴水を迂回する。

「何かマズいの？」

「しっ」

口の中で呟くように言う。

「D組の結城美智雄だよ。あまり近づかないほうがいい」

「何やったヤツ？」 楽しげに秋葉は聞いた。

「それはちよつと…」

竹之内が声をひそめて割って入った。

「あいつやばいんだ。ものすごく。噂だとひとり、じゃなくてもしかしたら二人……」

「おいよせよ。面白がって話すことじゃないだろ」中条が中断する。

「まあでも、特に君は気をつけたほうがいい、とだけ言うておくよ」中条は付け加えた。

「オレが？ どうして」

「賀来祐太郎にボールぶつけて気絶させたら」

「それとこれと何の関係が？」

二人ともそれきり黙りこむ。

振り向いて見た秋の景色の中に、しなやかな少年の姿はもうなかった。

『…人間にとって、最も悲劇的なことは、人間性を失うことかもしれない。』

人間性のありかとはどこなのか、それを奪う悲劇として用意された悪魔という存在は、当時の人々に とってどれだけリアルであった

たのか。

本書は、古今東西、世界のあちこちで見られた「悪魔払い」という儀式について、文化的土壌的背景をふまえつつ、史実をもとに考証していくものである』

ドアノブを回す音に、賀来はあわてて本を閉じ、「悪魔憑きの歴史」というタイトルを隠すようにそっと隣の小説の上に重ねる。

濡れた髪をバスタオルで半分覆うようにして、上下オフホワイトの部屋着の結城が部屋に入ってきた。

「その服、みたことないな。最近買ったの？」

卓上に肘を置き、ごまかすように早口で問いかける。

「教会のバザーの中から売れのこりをもらってきたやつだよ。わざわざ買わない」

ばさばさと髪をこすりながら結城が答える。

「今日、体育の時間に倒れたんだって？」

「あ、うん、でもたいしたことなくて」

これもバザーの売れ残りのカウンターチェアに腰かけて、結城は賀来をじつと見つめた。

「それで、いまは？」

低い声で問いかけてくる。

「今？ 別に何ともない。ただの貧血だろうって言われた。鉄分とれってさ」

「夏休み直前にも倒れたよな、一度」

賀来は視線を上に向けて少し考えた。

「ああ、学園の校外行事で。歌舞伎鑑賞だっけ？ あれは人いきれが気持ち悪かったんだよ」

「その時と今回とどう違う？」

「ん〜」

首をかしげた賀来から結城は眼を離さない。

「歌舞伎の時ののは、覚えてるんだけど。急に動悸がして脈拍がぐん

とあがって、あれ何でだろうと思ってたら全身から血の気が引いて、頭とか指先から冷たくなってくのがわかった。冷や汗が流れて、頭痛と吐き気がいっぺんにきて、もう死ぬかと思ったよ、一時的に」

「じゃあ今回は」

「それがよく覚えてないんだ。気がついたら倒れてた。でもそうだな、体がどんどん冷たくなって動かなくなる、息ができない、そんなのはぼんやり覚えてる。あ、直前にピーって耳鳴りが聞こえたかな。で、ちよっと思っただ。結城のもこんな感じなのかなって……」

言い終えたとたんにはっとして、賀来は自分の口を押さえた。結城の顔色が変わっているのがわかる。

「結城、ちよっと思っただけで、今のは」

「……お前」

組んでいた腕をほどいて、独り言のように結城は言った。

「冗談じゃない……」

「だから違うってば、違うよ。大体今日のは最初ボールがぶつかったからで」

「ボール？」

「秋葉って力あるから。でもそんなの一瞬で、ものの一、二分で気がついたんだ。ぶつかってから倒れるまで何かちよっと試合してたらしいけどそこところがよく……。でも、秋葉がついて保健室に行ってくれた。みんなが言うより親切だよ」

「ボールをぶつけた？ 秋葉？」

「え、知らなかった……？」

「倒れたただけ聞いてた」

二人はしばらく沈黙した。

「もう寝ろよ」

結城はチェアを立つと、再び部屋のドアノブに手をかける。

「結城！」 自分でも意外なくらいの大声だった。

「トイレに行くだけだ」

「秋葉のせいじゃない、秋葉はわざとやったんじゃないんだ」結城に歩み寄り、懸命に主張する。

「わかってるよ」

「ほんとにわかってる？ 本当に？」

結城の手をつかんだまま、賀来はたたみかけた。

「……なんでそこまで神経質になるんだ」

賀来の手を振り払うと、結城は部屋を出て行った。

賀来はぺたりと椅子に腰を下ろす。不意に心臓が躍りあがるように打ち始める。

（大丈夫、大丈夫、だいじょうぶだから）

胸を押さえながら、賀来はいつもするように、繰り返し自分に言い聞かせた。

Joanna 2

「すげえなあれ」

「誰のだよ、芸能人でも来てるのか」

昼休み、学園の駐車場に似つかわしくない明るいダイヤモンドホワイトのベンツを遠巻きに、登校してきた生徒達はひそひそとささやき合っていた。

「転校生のおやじが来てるんだってよ」

「あのでっかいやつか。秋葉なんだっけ」

「秋葉・エルネスト・メロなんとか」

「長えな」

「さっき見たけど、おやじさんこてこてのラテン系だったぞ」

秋の陽ざしを倍にして照り返すような派手な車の輝きが、校舎に反射している。キラキラと窓に踊る光を避けるように、目を細めて結城は渡り廊下を渡っていた。

正面から、長髪を後ろで一つにくくった背の高い少年が、何人かの友人に囲まれてこちらへ来るのが目に入る。

……昨日公園にいた、マタギみたいなやつか。顔を確かめる間もなくすれ違った次の瞬間。

「結城美智雄！」

いきなりフルネームで呼ばれた結城は、驚いて振り返った。周りがあるいていた生徒の誰もが一瞬動きを止める。

マタギ少年は、結城を指さして嬉しそうに言った。

「当たりか。一度だけでちゃんと覚えられたな、オレ」

目の高さが自分より上の生徒に会うのは、結城には久しぶりだった。

「俺、秋葉・エルネスト・メロ・ロペス。よろしく」

秋葉…… こいつが？

にゅっと差し出された骨ばった大きな手を眺め、結城は答えた。

「君とは面識がないと思うけど」

「いや、あるな。昨日公園で会った。オレの顔見たろ」

「何か用なのか」

「賀来祐太郎ってのは、キミの友人か」

秋葉が連れていた友人二人をはじめ、周りの生徒が息をのむ気配が伝わる。

「だったら？」

「ボールぶつけて悪かったな。それを言おうと思って」

秋葉はさりとといった。

「本人に謝れよ」

「本人にはもう謝った」

「じゃあ済んだ話だ」

「オレは恨まれてないのかな？」

秋葉の連れが後ろから服を引っ張っているが、秋葉は全く意に介さない。からかわれたり冗談でからまれたりすることに耐性がない結城を知っている周囲が、そろそろと後ろに下がっていった。

「恨む必要なんてない。恨んでほしいのか？」

「そうか！」

秋葉は急にっこりすると、両手を広げた。

今度は断りもなく結城の右手をいきなり両手で握り、ぶんぶんと上下に振る。

「それじゃ安心だ！ 次に会うときは、面識がある奴ってことになってるよな？ ちゃんと自己紹介したいところだが、バカ親父がおせっいかいしに学校に乗り込みやがってうるさいんで対決しなくちゃならない。いずれゆっくり話ができれば嬉しいよ、アミーゴ」

大声でしゃべり終わると、大きな掌で結城に投げキッスをよこしてさっさと去っていった。周囲とともにあっけにとられていた結城があたりを見回すと、みな視線をそらしてそそくさとその場を散っていった。

……変なやつ。

腫れ物に触るように遠巻きにされることに慣れっこになっていた結城は、上下に振られた自分の手を思わず眺めていた。

「君どうかしてるよ！ あいつには近寄るなっていっぱばかりだろう」

中条が顔を紅潮させて声を張り上げた。

「大袈裟だよ、話してみれば別に普通じゃないか」

「話しただけじゃ普通じゃないってことは分からないんだよ」
竹之内が続ける。

「ま、普通じゃないな。なんというか、詩のひとつもささげたくなる風情がある。うん、あれはいい、特に目がいい」

中条と竹之内は顔を見合わせた。

「昨日の続きが聞きたいな。ひとりじゃなくてふたり、なんだっけか」

「……もう君には何ひとつ話す気はないよ」中条が声をこわばらせる。

「ま、それもいいさ」

応接室の前に立ち、秋葉は二人を振り返った。

「ちよっと親子の会話してくる。聞いてても面白くないぞ」
ドンドンと乱暴にドアをたたくと

「秋葉エルネスト入ります！」

返事も待たずにがちやりとドアを押しあける秋葉に背を向け、二人は廊下を教室へ戻った。

夕暮れの食堂で、村越神父は受話器を握りしめていた。

「お忙しいところすみません。以前にも同様のことがあって心配になりましたもので」

『私の赴任前ですね。そのときは賀来くんは貧血症ということ以外を受診されたのでしょうか』若い女性の養護教諭が答える。

「いえ、特には、本人がいいといいましたもので。でもこういうこ

とが続くようなら、私としましてもちよつと……」

『ではこれで二度目ですね』

「いえ、あと、一回……二月のおわりですが、朝刊を読んでいた時に、食堂で急に」

『安静時ですね。同じような症状ですか』

「ほかの症状の時私はそばにいなかったもので比較はできません。

いきなり前のめりになって。息ができない、とか言っただけでそのまま倒れました」

『あまり頻繁に起こるようなら、大きな病院で診てもらったほうがいいかも知れませんね。心臓とか貧血とかの既往症は？』

「今まで貧血はありませんでしたし、毎年春に行われる学園の健康診断でも、心臓に異常はありませんでした」

『では最初に倒れた時の状況が重要ですね。再確認したいんですが、きっかけらしいものはありませんでしたか？』

「新聞を読んだあと、何か気になる記事があったらしく、一枚地方版を抜き取って折りたたんでいたんです。それから、それをつかむようにして急に」

『新聞の内容について、当人に訪ねたことはありますか』

「それが、倒れた当時のことは記憶にないというんです。新聞を読んでいた記憶じたい、ないといわれました」

『ご心配なら、メンタルクリニックを含めて専門医に診ていただくことをお勧めします。勿論血液検査や脳波を含めた全身の精密検査が先ですが。こちらでも日常の様子に注意しておきますね』

結局、似たような症状を起こしている結城のことには言及せずに電話を切った。

今のうちに何とかできるなら、賀来は救ってやりたい。

自分の中にできているあからさまな差別に、神父は苦い思いをかみしめた。

自室のファイルから、一枚の新聞を抜き出す。気になって取っておいた、あの日の地方版。

結城がひどいけがをして賀来とともに帰宅し、賀来が頑として状況を語らなかったあの日から二日後。大槻君が階段から落ちて死んだとのことでひどくショックを受けていたその翌日、彼はこの新聞を読んだ。

いくら眺めても、載っているのはごみの分別方法の細分化とか、小学校を放課後趣味のサークルに開放するお知らせに小さな地域の祭り、あとは海辺の公園に駐車していた車の中から、アル中の男性の自殺体が見つかったという小さな囲み記事くらいだ。

賀来がショックを受けるような記事はどこにも見当たらない。

神父は元通り新聞を折りたたみ、ファイルに戻した。

当時のことを質問すると、賀来はひどくいやがる。というより、ほとんど覚えていないの一点張りになる。本当に記憶がないのか、わざととぼけているのか、もともと何も語ろうとしない結城とともに、賀来と自分との距離が遠くなることに神父は危機感を募らせていた。

彼を『あちら側』に行かせてはならない。

どの側という具体性は置いておいて、それはいわば本能の叫びだった。

宿舍の玄関に入っすぐ、結城は廊下の奥に目障りな人影を見て足を止めた。

派手なピンクのミニワンピースを着て、色あせた髪を頭の上でまとめた若い女が、入浴セットを手に歩いてくる。

咄嗟に身を隠そうとしたが、タッチの差で女に見つかった。

「あら、今日は早いね、結城くん」
ため息をついて上を向く。

「ね、部屋の天井の灯りが切れたの。電球かえてくれない」

「電球なら神父にもらえば」

「わたしじゃ背が足りないのよ。あなた180センチはあるじゃない」
「い」

胸を押し付けるようにしてしなだれかかってくる。

「いいものが手に入ったのよ、とっておきのキャンディー」

女は黒字に赤のドット模様の入った包み紙のキャンディーをひらひらさせた。

ここの宿泊施設は、夫の暴力や様々な緊急の事情により家にいられなくなった信者の緊急の駆け込み寺のような役割も果たしており、この女性、如月真由美もその一人だった。一時は部屋を分けてもらった結城と賀来も、二週間前、真由美が入居したことで再び同室になっていたのだ。

「電球ならぼくがつけましようか、ちょうど頼まれて買ってきたところだし」

振り返ると、新しい電球を手にした賀来が立っていた。

真由美はむくれた。

「もういいわ、ひとりでできるわよ」

賀来の手から電球を奪うように受けとり、さっさと階段を上がつてゆく。

「結城も大変だね」

半分笑い混じりに賀来が言う。

当初は夫の暴力が怖くて家に帰れないと泣いてばかりだったのに、結城に目を付けてから、家のことを一言も言わなくなっていた。

「DV男のところへでもどこへでもとっと帰ればいいんだ」吐き捨てるように結城が言うと、

「村越神父が慈悲深いから、僕らも今まで置いてもらえてるんだよ」もっともなことを言い、賀来は電球のストックをしまいにいった。あの女との間にあったことを知ったら、「僕ら」のうちひとり、置いておくのが得策でないと神父が決心するのも遠くはない。結城は自分の冷えた胸につぶやいていた。

第二木曜日は校外から講師を呼んでの特別授業のある日だ。

その日呼ばれたのは、姉妹校である緑の聖母学園の宗教学専門講

師、恩田英明神父だった。

キリスト教の暗黒の部分、異端の迫害の歴史にスポットを当てる。というテーマは、賀来には興味深かったが、周囲はいかに教師に見つからず熟睡するかにかに関心はないようだった。クラス順に講堂の席に着席する間、スライド上映のために会場は暗くなっていったが、ひそひそ話が背後で交わされたと思ったら隣がどかされ、いきなり秋葉が割り込んできた。

「あ、君？」

「よう」

秋葉は陽気に手を挙げると、

「こないだは悪かったな。大丈夫か」

ガムをくちやくちややりながらメモ帳を広げた。

「どうしてここへ？」

「まあまあ。あまり近くてもなんだし、つてことで」

斜め前を見ながら鉛筆を走らせる。

彼の眼の先には、すでに着席している結城の横顔が見えた。

周りはざわめきながら、秋葉をちらちらと観察している。かつて、結城にこれほど大胆なアプローチをした傑物を見たことがない。この空気の読めない転校生がどんな騒動を巻き起こしてくれるか、周囲はひそかに期待していた。

灯りが完全に落ちて、秋葉はスケッチをやめない。横目で見た秋葉のクロッキーは、驚くほどうまかった。

単純な線で、ものの見事に結城の特徴をとらえている。鼻と顎の角度、目と睫毛の陰影。そのラインの美しさ。唇の周囲、目元に宿るエロティックで蠱惑的な風情。彼がなぜほかの誰とも違うのか、秋葉の鋭角で飾らない線が雄弁に物語っていた。こいつはすごい、と見とれていると、いきなり紙を破って余白に何か書き、小さくたたむと隣をつついて紙をまわし始めた。

まさか、と思う間に紙は手から手へと回り、ついに結城のもとへ到達する。周りが首を伸ばしてひそひそと囁き合う。

結城は怪訝そうに紙を受け取ると、開いて眺めていたが、振り向きもせずに黙って破り捨てた。ところする間に、秋葉はまた次の絵を楽しそうに描き始めている。周井は秋葉を見やり、結城にこっそり視線を移し、授業どころではなくなっていた。

次の紙が到達したとき、結城は隣の生徒に何かひとこと話しかけた。生徒は頭を何度か下げ、当然の結果として、それきり回ってくる紙を全部拒否した。秋葉を止める言葉が喉元まで出かかっていた賀来も、ほっと溜息をついた。

壇上では、スライドに映画の一シーンが映し出されている。木の柵ごしに美しい尼僧の手に頬を寄せる修道僧のモノクロ画像。

尼僧の顔が結城に似ている、とふと賀来は思った。

どこことなくサンタクロースを思わせる風貌の恩田神父が、講義を始めた。

「尼僧ヨアンナ。このポーランド映画を知る者は諸君の中にほとんどいないでしょう。監督はイエジー・カヴァレロビッチ、原作はヤスワロフ・イワシキエウイチ」

「どんだけややこしいんだよ」

秋葉の独り言に周りが吹き出す。

「天使のヨアンナといわれた美しい院長は、異なる八つの悪魔に取り付かれ、正気を失います。十七人の尼僧たちもみな悪魔につかれ、情欲のままにふるまい、修道院は狂気の館となります。悪魔払いの先任者はヨアンナの魔性に狂って火刑に処され、次の赴任者がスリン神父。覚悟を決めた神父が会ったヨアンナは、平常時は美しく淑やかですが、ひとたび悪魔に支配されれば獣のように情欲をあらわにし、暴れ狂います。神父は自分自身を、そしてヨアンナも鞭うつことによって誘惑から逃れようとしませんが、最終的に、ヨアンナの中の悪魔を自ら引き受ける事でしか、彼女を解放する術はないと確信します。と同時に、ヨアンナを愛し始めている自分も自覚するのです。」

神父はついに彼女のために悪魔と一体になり、罪のない馬屋番を

殺し、その罪によって自らのうちに悪魔を呼び、悪魔もろとも火にあぶられることでヨアンナを救おうと……」

賀来はいつしか狂おしいほどの胸の高まりを覚えていた。

結論のない苦悶。死を覚悟した戦い。自分を犠牲にして到達する出口。なにもかもに、どうしても自分を置き換えてしまう。こんな風に美しい解決法があるのなら、ほんとうにそれが結論なら、いつそどんなに……

「これは史実をもとにした物語です。十七世紀フランスの片田舎ルーダンで、ウルスラ会の修道院がまるごと悪魔とりつかれ、修道女たちは狂い回りました。有名な『ルーダンの悪魔憑き』事件です。このときは、グランディエという司祭が、悪魔を呼んだとして処刑されました。またアメリカで有名なのが、セイラムの魔女裁判……」

今度は秋葉は、せっせと画面のヨアンナをスケッチし始めていた。「宗教学的に見れば、悪魔憑きは乗り越えるべき宗教上の試練であり、信仰の力で克服されるべきものですが、科学的に見れば、解離性障害、統合失調にヒステリー、本来の人格の深いところに問題があると考えられています。ただ歴史上、過剰に宗教的見地からこういう例を悪魔の仕業としてきたため、神の名のもとに多くの罪なき犠牲者を出してきたのもまた事実なのです」

頬杖をついてあさつての方向を見ている結城の後ろ姿を見ながら、賀来はいま彼がこの話をどんな気持ちで聞いているのか、心の中を覗きたいと切に思っていた。

「……あいつもそのうち、結城に殺されるぞ」

ひそやかなささやきが、席の後ろのほうでは交わされていた。

Joanna 3

帰宅の用意をして保健室を出た桑名小夏は、不意に廊下の影から現れた人影に、びくりと足を止めた。

「あ、驚いた。何か用？ もう診察は終わりよ」

何度か見たことのある、背の高いきれいな少年。名前は知らないが、一度見たら忘れられない妙に無機質な印象のある子だった。

「ちょっと、友達のことでも聞きたいことがあるんですけど」

「あなたの名前は？」

「結城美智雄」

名前に記憶はあった。原因不明の発作を起こすことがあるというので、前任者から要注意の申し送りがあったのだ。

「名前だけは聞いていたわ」

再び鍵を開けて、小夏は保健室に戻った。

「ちょっとした間なら」患者用の椅子を勧める。

重厚なエンブレムのついた紺のブレザーを、ちょっと窮屈そうに着た結城は、学園ドラマのキャラクターのようだと小夏は思った。

「賀来祐太郎。……最近診ましたよね」

「知ってるけど、お友達なの」

「一緒に住んでるんです。俺も発作の癖がある。彼の特徴と比べたいと思って」

「あなたは前からよね」

「そうです。俺のはだんだんひどくなる。彼のも同じものかどうか、それだけ知りたい」

愛想のないぶつ切りの会話だった。患者の情報の守秘義務を思い、小夏は逡巡した。

「神父さんも心配してたわ。で、まずあなたの症状のほうは……」

「俺のことはいいんだ」

いらいらした調子で結城は話を遮った。

「比較したいなら、ちゃんとあなたのほうの症状もきかせてくれな
いと」小夏は食い下がる。

「言えば彼のほうの症状も聞けるんですか」

小夏はちよつと躊躇したが

「私の見解だけなら」とだけ答えた。

結城は不愉快そうに黙っていたが、訥々と話しだした。

「動悸、めまい、吐き気、割れそうな頭痛、気が狂いそうな感じ。

耳の奥が熱くなって、自分の体中を流れる血液の音が聞こえる。あ
とピーという耳鳴り」

「お医者にみてもらったことはあるの」

「教会かかりつけの医者が一度」

「血圧とか脈拍は」

「最初ひどく高くて後のほうで極端に低いといわれた。脈も浅すぎ
てそのときはふれなくて、測るのに苦労してたけど、大体あとで聞
くと160以上」

「どのくらいで回復するの？」

「いつも大抵失神するんでよくわからない。もういいだろう」

小夏はメモをとる手を止めた。

「あなたはまず血液検査をしなさい。中枢神経系の病気かもしれな
いわ。賀来くんのはうは」

少し間をあける。

「はつきりとはしないけど、精神的なものが大きいと思う。パニッ
ク障害の可能性が大きいかも。わからないわよね」

「……知ってる」

結城は意外そうな顔をしていた。

「知ってるの？ 珍しいわね」

「脳幹部にある青斑核という部位から、ストレスその他の原因によ
りノルアドレナリンという神経伝達物質が過剰に分泌されて起こる
と聞いたことがある。あるいはただ精神的に」

「青斑核はともかく、たぶん大きなショックがあって、認めたくな

い現実を隠すために発作という代替え行為を起こしている可能性が高いと思うの。最初発作を起こしたときに読んでいた新聞で言うのがカギを握ってると思うんだけど」

「新聞？」

「私はそう聞いたわ。二月の終わり、朝刊の地方版を読んでいて、いきなり倒れたと」

ほんの少しの時間ののち、結城はすべてを理解した。

……あれを。それで、たぶん……

「もういいです、どうも」急に話をやめた結城を、小夏は訝しげに見た。

「役に立てたのかしら？」

「十分です。俺もここだけのことにするから、先生もそうしてくださいますか」

急に低姿勢になった結城に、小夏は少し欲を出していた。

「そうねえ。あなたさえよければ、賀来君のことこれからも報告してあげたいんだけど」

「？」

結城は意図をはかりかねて、次の言葉を待った。

「簡単なことよ」

不意に視界が小夏の顔によってさえぎられ、首に手が回されると、化粧臭い唇が結城の唇を覆った。

……またこれか。

礼儀のように、結城は彼女の舌に応える。だが、安っぽい化粧のにおいは耐え難かった。

「やっぱりか。結構遊んでるのね、あなた」

小夏は体を離すと、してやったりという顔でほほ笑んだ。結城は足もとの鞆を拾う。

「小さな怪我でもいつでもおもてなしするわよ」

足早に保健室を後にすると、結城は左手の甲で口紅をこすり落とした。

夕闇があたりを支配し、ネオンがまたたきはじめると同時に客引きがぞろぞろと路上に出てくる通り。結城は何カ月ぶりに、あのビルの前に立っていた。

自分がなぜここに来たかわからない。

もう縁のなくなったビルの一階のコンビニは、相変わらず変わり映えのしない客層を含んでは吐きだしていた。

近くのベンチに座り、あの階の窓をぼんやり見ていると、木崎にきつく肩を抱かれた感触がよみがえってくる。

……一人で生きるんだな、おまえは、これから。

俺は見守ってやる、できることはないが、どこかからきつと……

あの日確かに木崎は生きて体温を持ち、涙を流し、あそこにいた。今はこの世のどこにも存在しない。消えてしまった。

……自分が殺したから。

この事実に関か感慨があるかと心のあちこちを探しても、何も出て来はしない。ただ、なんてあつけないんだろう、という他人事のような驚きがあるばかりだ。

もうこの世のどこにも、あの孤独な男が生きた痕跡はないのか。いや、かすかにある。結城はそれを、自分の親指の爪の間に見つけた。……わずかな黒いしみのような点。

一時期、どんなことをされても声を上げなくなった結城に苛立った木崎は、葉の勢いもあって、めっちゃくちゃな行動に出ていた。あとが目立って残らないよう、柔らかいもので首を絞めたり、爪の間に針を差し込んだり、鞭で殴りつけたり。

ただ自分の苦しむ姿が見たくて、さんざん暴力をふるった上に、お前を殺したらどうしようと取り乱していた滑稽な男。

これは、あの時の針が汚れていたので残った色だ。

この針だけでも汚れていてよかったかなと、ぼんやりと結城は思う。でないと、あの男の存在はあまりに儚すぎて、あんなに必死で

生きていたのに、自分にとってもまるで幻想の中の人物のようだ。
いや、そのうちすべてがこうなるのだろう。

愛しても殺しても、何の实感もない影法師のような人々。

何の手がかりもない現実。たやすく集まる欲望。

……賀来が落ち込んでいる苦悩に、ふとうらやましさを覚える。

認めたくなくて、信じたくなくて、発作の中に逃げ込むしかないほどの苦悩。俺は、俺のしたことは、それほどのものなのか？

それすらいまはわからない。きっともつとわからなくなってゆくのだろう。

おぼろに光に沈む街の雑多な風景を、夢の中のように、結城は見やっていた。

鶏小屋の餌入れを掃除し、新しい餌を入れ終わると、日南は卵の籠を持って外に出た。宿舎に向かう賀来の姿を目に留めたとたん、胸の高まりを覚えて思わず声をかける。

「賀来さん」

いつも何か考え込んでいる賀来の漆黒の目がこちらを向く。

「日南ちゃん、卵とれたの」

「昨日はだめだったけど、今日は三個も」

にこやかに近づいてきて、日南の籠を覗く。

「たまにはお菓子作ってよ、日南ちゃん上手なんだから」

「クッキーくらいしか作れないんですけど」

「以前シュークリームも作ってたよね」

「あれは膨らまなくて失敗で」

賀来の混じりけのない漆黒の、つややかな髪を見て日南は思う。

結城さんは全体に色が薄くて、近寄ると空気だけで身が切れそうな緊張感があるけど、賀来さんはちゃんと体温があって、色があつて、そばにいと安心できる感じがする。

「賀来さんは将来神父さんになるんですか」

「……そうだね、このままいけば、たぶん」

賀来は少し言いよんだ。

「神様を信じているから？」

「信じたい、と思う。信じる気持ち、ぼくや信仰の厚い人たちを高い次元に導くなら。でも、こんなこと考えてるようじゃまだまだなんだろうな。条件付きの信仰は、信仰じゃないから」

「素敵な会話ねえ、さすががしくて」

いきなり背後からしゃがれた声がかかる。振り向いて真由美を認めた日南は一気に赤面した。

「あたしもそんな会話、十代のころにしたかったわ。きらきらした男の子と」

「あの、あたしもう行きます」

日南は卵の籠を抱えて足早に食堂のほうへ向かった。

「お邪魔しちゃって」

真由美は髪をかきあげながら、細い煙草に百円ライターで火をつける。

「施設内は禁煙ですよ」賀来は穏やかに嗜めた。

「あなた本当に十七？ すっかり出来上がってるじゃない。どう育てればあなたみたいな子ができるのかしら」上を向いて煙を吐く。

「あたしの子なんて、生まれた時からハンデまみれよね。母親がこうじゃ」

「お子さんがいるんですか」

「星って書いてセイって読むの」

真由美はGパンのポケットからよれよれのカード入れを取り出して開いた。

「かわいいでしょ」二歳くらいの、色白でぼっちょりした幼児が両手に電車のおもちゃを持って笑っていた。

「ほんとにかわいいですね、いい名前だし」賀来は素直に答えた。

「このほっぺに何度もあざを作っちゃってさ。旦那の暴力からも守ってやれなくて。親父がそういうやつだったから、自分は同じ失敗しないと誓って頑張ってきたのに、こういうわけか似たようなのば

かり捕まえちゃって」

真由美はカード入れをポケットにしまった。

「でも会いたいだよ、施設にいるんだけど、何もできないのに無性に会いたい」

「血を分けた子どもってそういうものでしょう」

真由美は賀来の顔を眺めた。

「いい子ね。どうしてあたしあんたみたいのより、ゆーきくんみたいな男にばかり惹かれるのかなあ」

結城の名前に、賀来はびくりと反応した。

「わかってんのよ、一度や二度寝たからってしつこくするから、あたしいつも嫌われるのよね」

足元に落とした煙草を乱暴に踏みつける。

「部屋に戻って寝るわ」

クルリと身をひるがえした真由美の細い背中を、賀来は黙って見つめていた。

一度や二度寝たからって……

棘のように突き刺さる言葉が、即座に賀来の心に失望と諦観のふたつを押し付ける。

そういうこともある。仕方がない。関係ない。

行き場のない感情は処理され、一部消去され、受け入れられやすい形に変換されるのにしばしの時間があるよとのっぺりした顔で賀来に告げた。

ひと気の少ない市立図書館の書架の前に恩田神父は立ち、次の講義のための資料を求めて背表紙に目を走らせていた。

ふと奥の書架に目をやると、見覚えのある学園の制服に身を包み、写真で見た顔の少年が同じように棚を見上げて行き来している。

少年の名前を思い出すと同時に、恩田はつかつかと少年に歩み寄っていた。

「中世の魔女裁判でも調べたいのかな？」

不意に背後から声をかけられ、賀来は本を取り落としそうになる。灰色のあごひげを蓄えたサンタクロース顔の恩田が、資料を小脇に抱え、穏やかな笑みを浮かべていた。

「先生！」

賀来は声を上げた。

「先週は講義をありがとうございました。僕聖ペテロ学園の……」

「君の顔は覚えてる。面白い本ばかり選んでるね」

「いえ、あの……」

ばつが悪そうに賀来は俯く。魔女狩りの歴史。悪魔つきと科学。先週の講義をなぞるような本ばかり賀来が選んでいたのは事実だった。

「何かのレポート？」

少し躊躇して賀来は答えた。

「人間が人間性を失って行く過程を、……医学じゃなくて、魂のレベルから検証してみたいんです。うまくいえないけど」

「ふーむ？」

少しの間、賀来は言葉を探した。

「病気によって侵されるのが脳ならば、悪魔によって侵されるのが魂ですよね。」

僕は現代医学を否定するわけじゃないけれど、精神世界を、脳の故障と考えるのがどうもしっくりこないんです。脳と精神と魂って、どういう位置関係なのか」

恩田は本を探しながら答える。

「まあ、信仰する者の立場から見れば、神の創造物たる人間の精神というものが、ただの脳の化学反応じゃ困るからね。正と邪の間で葛藤するのも、内なる聖なる存在と反キリストの戦いだということにすればわかりやすいし」

「先生自身はどう思いますか。人間は化学反応によって動いているだけののりものですか、それとも魂という別次元のものがあるんでしょうか？」

恩田は賀来に向きなおった。

「答えの出ない問いにぶつかる私はよくこう考えるんだ。それは正しいか否かを判断するのは容易ではない。だがそれは美しいか否かと考え、美しい方を取れば大抵間違いはない」
なるほど、と賀来は思った。

「人間が、試験管の中の化学反応によってひとを愛したり神に祈ったりしているという考えは、実に味気ない。でも、魂を信じればひとの物語は美しい。だから、人のこころはここでなく」

恩田は頭を指差し、次に

「ここにあると、私は考えてる」

バツテンにした手を胸にあてて笑ってみせた。

「先生はロマンチストなんですね」

「もちろんだとも」

おどけた表情の恩田に、賀来は久しぶりの笑顔を向けた。

「ときに、村越さんはお元気かな」

「え、お知り合いなんですか」

頬笑みながら恩田は答える。

「君のことは写真を見せてもらったりして自慢されたことがあるよ。彼とは学生時代からの付き合いなんだが、なにやらこのところ電話してもふさがちなんで気になっていてね」

「……」

思い当たることはありすぎる。賀来は返答に詰まった。

「まあ、よろしくいってくれ。今度飯でも食おうと言ってたと伝えてくれるかな」

「わかりました」

恩田の後ろ姿を見ながら、賀来は彼の言葉を反芻していた。

……魂を信じれば、ひとの物語は美しい。ならばそれを失いかけている人間を、救済する手はあるのか。

結城に起こっていることはなんなのだろう？ どの立場に立てば、僕はこの問題にきちんと立ち向かうことができるのか。

もしも僕に起きた発作が、結城に起きたものと同じならば、僕は
いずれ彼を理解できるかもしれない。僕にとってはそのほうが、取
り残されて苦しむよりましかもしれない。でもそうしたら、彼が忘
れないでと言っていたあの思いを、いったい誰が記憶してあげられ
るだろう。

(……愛してる)

もう一生たぶん二度と彼の口から聞くことはない、そのひっそり
した言葉を思い出すたび、賀来の胸にまだ訪れていないはずの惜別
の悲しみのようなものが押し寄せてきて、幼子のように、声をあげ
て泣きたいような衝動に駆られる。

僕は君の魂に寄り添いたい、君を理解したい。でもそれを心から
願うたびに、避けられない疑問が目の前に立ちはだかる。

君はその手で殺したのか、結城。僕の知っている、あの二人を。

君に近づこうとすればするほど大きくなるその問いは、口にすれ
ば刃のように、すべてを破壊するだろう。

……例えば僕がスリン神父なら、君がヨアンナなら、美しい物語
が生まれるのに。

男に手を差し出すヨアンナの花のような顔を、賀来はさすがよう
に思い出していた。

Joanna 4

聖ペテロ学園のペテロ祭は、学園創立記念日の十二月十八日に行われる。

学園あげての一大行事である祭の準備は、秋口から始められていた。

玄関脇の掲示板に張り出されたポスターの周りに集まった生徒達は、恒例の行事をまず確認していた。

「演劇部はまたクオ・ヴァデイスやるのか」

「キャストが男だけで済むからって、あの話もう何年やってるんだって話だよな」

「ペテロカレーも定番になったな」

「去年は現美研が聖者のヌード展やって始末書だったんだっけ」

クラス参加以外のサークル・クラブ単位での参加予定者は二週間以内に計画書提出のこと。

この掲示からにわかに学園内は、祭りの準備に向けて騒がしくなる。

「寄付金は正直ありがたいが、交換条件となるとどうしたものではないかね」

校長室のソファに前かがみになって座り、副校長の向田は大きな封筒をぱさりとテーブルの上に置きながら言った。

通常では考えられない金額を寄付金として振り込んだという知らせと、息子の望む活動をすべて可能にしてくれるようにとの要望書が、中には入っていた。

「直に話を聞いた時には、あちらの人間特有の大口だと思いました。が、まさか本当に金額通り振り込むとは」

気持ち声をひそめて、坂崎校長が答える。

「もともと期限付きで、亡き母親の母国での生活を体験させてやり

たいというロペス氏の願いで入ってきた上に、ああいう特殊な事情のある転校生だ。特例として受け入れてもまあいいでしょう」

副校長は小さく咳払いをして、さらに声をひそめた。

「で、あの話も本当なのですか？ ロペス氏が、もとFAR……」

「向田君」間髪をいれず校長は遮った。

「わが校はいささか微妙な状況に立たされている。受験の実績を売り物にできるわけでもないカトリックの学園で、不況に加えて生徒減少のおり、経営もけして楽とは言えない」

「わかります」

「奨学金を増やして優良な生徒を招きたくても元手がない。校外に向けて一番のアピールのチャンスである学園祭の規模を大きくするためにも、資金は必要だ。こういうときに、何でも学園の力になると申し出ってくれる人物の御好意を無にする理由は今のところない。違うかね」

「……おっしゃる通りです」

「では、氏の前身とか職種など、余計な詮索は以後無用ということだ」

冷えた茶を一口すする。

「もつとも、今回の話とは別に、きな臭い生徒にただ優秀だからと奨学金を出すのも考えものなんだが……」

「あの夏休み前の怪文書のことですか、“彼”にまつわる」

「嘘であれ何であれ、ああいった黒い噂を学園に呼び寄せる存在とというのは実に困ったものだ」

校長は独り言のように付け加えた。

……FAR？ 怪文書？

放送室でスイッチをいじりながら、賀来はうつすらと聞こえた校長室での会話を反芻していた。

帰宅を促す校内放送に向けて各装置の調整をしていた時、室内設置の呼び出しマイクがたまたまオンになっていたらしく、校長室で

の会話が、何かの拍子に部屋に流れ込んできたのだ。雑音混じりのかすかな会話の中で、はっきり聞こえたアルファベットの部分が妙に引っ掛かった。

もとFARって……何かの職業の略語だろうか。にしてもどうやら、音が漏れていたと知らせてオフにしてもらうには既にまず過ぎる会話だ。賀来は気を利かせて、いつもの蛍の光を流し、マイクのスイッチをオンにすると全校によびかけた。

「五時半の放送です。特別な用のない生徒は帰宅してください。視聴覚室、あるいは資料室へ。部屋の雑音がいりました。室内に呼び出しマイクが設置してある各部屋は、念のためにマイクがオンになっていないかどうか確認してください」

帰宅を促す賀来の声と、蛍の光。

学園内にある、小さなバラ園の中のベンチに腰かけて、暮れてゆく空を見上げながら、結城はいつもの妙な気分を襲われていた。放送係の賀来の担当は木曜日。何となくその声を聞くまで学校のどこかにいるのが習慣になっている。

昔、島内放送も、夕方になるとこの音楽を流していた。音楽が終わると島の空は赤く染まり、鳥が渡り、なぜだか切ない気分を襲われ、家の明かりが見たくていつもの白い砂の道を走って帰った。

「ほらほら、また走って。そんなに走ると転ぶよ」

十字路の何でも屋のばあちゃんが掃除しながら声をかける。

あの島にはもう、誰もいない……

「おい、バラの棘でも死ねるんだぜ」

不意に背後から声をかけられて、結城は振り向いた。顔を見てうんざりする。秋葉。あの気の知れないヤツ。

近くのバラを無意識にむしっていた指が、紅く染まっていた。

「知ってるか？ リルケってバラの棘刺して死んだんだと。すごいよな、詩人って」

「知らないな」結城は膝の花びらを払って立とうとした。

「まあ、そのまま。少し話してもいいだろ」

秋葉はどっかりと結城の隣に座った。こんなに自分との距離を意識しないやつに会ったことがない。結城は呆れて秋葉の顔をしげしげと見やった。

「オレの印象ってどうよ？」

ポケットをまさぐると、キャンディーを取り出して紙をむく。

馬の尻尾を垂らした長髪、浅黒い肌、こけた頬に長身。ちよつと考えてから結城は言った。

「一年中原発反対運動をしてる自然食品の店の店長」

「なんだそりゃ」

「マタギって言葉は知らないだろう」

「知らねえな。結構おもしろいな、あんた」

秋葉は愉快そうに笑い、むいた紙を丸めてベンチの下に捨てた。ベンチの下を見やり、秋葉の口元を見つめると、結城は言った。

「甘党か」

「ああ、お袋からおしゃぶりを取り上げられてからずっとな」

「……味見したいんだけど」

秋葉は意外そうに答えた。

「へえ？　好きなんだ。悪いけどこいつはオレ専用だからダメ」

「意外とケチなんだな」結城は視線をバラのほうに移した。

「別にいいよ、そんなにほしけりゃあとであんたの分も持ってきてやる。その代り、というか、頼みがあるんだけど」

飴玉の代わりに自分にいきなり頼みごとをしてくる相手というのも前代未聞だった。

「学園祭でさ、オレ、映画作りたいわけよ」

答えない結城のそばで勝手に秋葉はしゃべりだした。

「叔父が映画プロデューサーでさ、撮影の様子見学したこともあるし、大体勝手はわかるつもりだ。映画ってやっぱりスターから生まれるわけよ。使おうと思う役者のオーラが、作品の立ち位置を決め

るわけよ」

「個人参加は認められてない。サークルかクラブ単位だけのはずだ」
聞いていないように見えた結城が口を挟んできた。

「いいの、オレ特例だから」

あっさり言うのと、秋葉は結城の顔を正面から見た。

「で、あんた主演してくれないか」

「嫌だ」

即座に結城は断った。

「おい、返事が早すぎるぞ」

「俺はもう帰る」鞆をつかんで勢いよく立ちあがる。

「なあ、まあ少しは話を聞けよ、結城美智雄」

「フルネームで呼ぶな」

苛々した声で答える。

「なんであれこれと俺に絡むんだ」

「なんで？ お前がすっげえきれいだからだよ」

あまりにあっさりと言われて二の句が継げない。

「……馬鹿か」

秋葉は両手を広げると、天を仰ぐようにしていった。

「気配だ！ 顔立ちよりも、気配。風情。姿形の裏にある、アートのなもの触媒としての魅力。エロスと詩情。ミューズの引力。

リリアン・ギッシュの無垢、アラ・ナジモヴァの妖艶、グレタ・ガルボの神秘。スクリーンが夢世界を写すカーテンであった頃のスターが持っていた、虚構の中にこそ息づく美。もうこの世界にはないと思っていたそれを、オレは君に見つけた。ユリイカ！」

「自分をモデルにして撮ったほうが傑作になるぞ」

立ち上がった結城の手首を、いきなり秋葉は力を込めてつかんだ。結城は驚いて棒立ちになる。

「明日からはお前のことユリイカって呼ぼう。アルキメデスが万有浮力を発見した時の言葉だ。我発見せり！ ……いろんな読みかたがあるんだ。エウレカ、ヘウレーカ、ユアリーカ、どれがいいかな。

オレお前に会ってから、お前の綺麗な目のことしか考えられないんだ」

「……」

子どものように無邪気ではかげたアプローチに、何か言い返そうとして言葉が出ず、代わりにかつと頬が紅潮してゆくのを結城は感じていた。こいつ、どうしたらいいんだ。恥ずかしさと戸惑いとどうしようもない不快感がないまぜになり、力いっぱい殴り飛ばしたくなる衝動を抑えるのがやっとだった。振り払うように秋葉の手をほどくと、呼吸を整える。

「……いいか、よく聞け。俺に構うな。二度と俺に話しかけるな」

低い声で静かに言うと、くるりと秋葉に背を向ける。秋葉は細い筒状に丸めた原稿を取り出すと、再び結城の腕をぐいつかみ、強引に結城の鞆の蓋の下に突っ込んだ。

「おい!!」

「まあ、脚本読んでから断っても遅くはないだろう？ 学園祭は三カ月も先なんだぜ」

秋葉は芝居めいて結城を指さすと、

「P i e n s o q u e R i l k e m e a l a b a c i e
r t a m e n t e !」

(リルケも俺をほめてくれると思うぜ)

おどけて言い、お辞儀をすると軽やかに走り去っていった。

背後でドアの開く音に、賀来はレポート用の資料をまとめる手を止めた。

「結城？」

「ああ」

「あのさ、F A R なんとかって何の略かな」

椅子ごと体を半分後ろに回して尋ねる。いつにも増して苛々した様子の結城は自分の机に鞆を乱暴に置いた。

「それだけじゃわからない」

「まあ、そうだよ。ダイニングのパソコン使いたいんだけど、神父様が使ってた」

結城は筒状の紙を鞆から抜き出すと、いきなり賀来に放り投げた。
「やるよ」

咄嗟に両手で受け取る。

「何これ」

「秋葉が押しつけてきた。映画の脚本だそうだ」

「読めばいいのに」

「冗談じゃない。俺に映画に出るとか、何考えてるんだか」吐き捨てるように言うと、乱暴に制服を脱ぎ棄てる。

「大胆っていうか、何か知らないけどすごい執着の仕方だね」

賀来は含み笑いしながら筒状の紙を広げた。

ホチキスで乱暴に止められた原稿の最初のページの、なぐり書きのようなタイトルが目に入る。

M A T K A J O A N N A

……？ じゃあんな？

「尼僧ヨアンナ！」

不意に大声を出した賀来に結城が声をかける。

「驚くようなものか？」

「この間の講義でとりあげてた。覚えてない？」

「覚えてるよ。大して面白くもなさそうな」

賀来は興奮気味に丸めた脚本を広げてめくった。

「これ読んでいいかな？」

「読もうと捨てようと好きにしろ」

賀来は秋葉の卓抜したスケッチを思い出していた。あいつと僕は、案外同じものを同じように見ているのかもしれない。

「ひとつ思い当たった」結城が思い出したように言った。

「何？」

「F A R C なら」

「あ、さっきの。それだと何？」

「コロンビア革命軍。南米最大の反政府左翼ゲリラだ。アメリカ合衆国からは、国際テロ組織に指定されてる」

「……へえ……」

何気なく答えながら、賀来は不意に動悸が高鳴るのを感じていた。

Joanna 5

バラ園のベンチで花をスケッチしていた秋葉は、手元に落ちた影にふと目を上げた。

A組の賀来祐太郎が、両手でファイルを抱くようにして立っている。

「こんにちは」

「お、あんたか。もうすっかりいいのか」

軽く挨拶するとまた下を向いて続きを描く。

「B組はいま体育の授業じゃなかったっけ」

賀来の問いに

「半永久的見学」色鉛筆入れをがらがらかき混ぜて次の色を探す。

「そっちは」

「美術だけど先生が休講で自習」

「じゃあいつしよにバラでも描くか？ 道具は揃ってるぜ」

そういえばあの日以来、彼が体育の授業を受けているのを見たことがなかった。

スケッチブックのバラのフォルムも彩色も、この世のどこにもない色と線で鮮やかに構成されていて、一度見たら目が離せない魅力にあふれている。

「君は芸術家なんだな」賀来は隣に座ると、ファイルから、丁寧に伸ばした脚本を取り出した。

「昨日、結城に渡したっていう脚本、見せてもらった。悪いけど読んだよ」

「別に悪くないさ」秋葉は忙しく手を動かしながら言う。

「で、ご感想は」

賀来はひと呼吸置いた。

「すごい。原作もいいんだろうけど、……あ、僕原作は借りてきたけど読み終わってなくて。でも君の脚本は素晴らしい。簡潔で、清潔で、無駄がなくて美しい。すごく簡略化されてるのに、読んで

て泣けてきた。特に最後のほう。読んだあと、眠れなかったよ。そんな絵を描くなら、きつと映像化しても素晴らしいんだろうな」

「……なんか、金でももらったかのようなほめ方だな」

苦笑する秋葉に、賀来はむきになった。

「僕は今の全部本気で」

「あー、わかってる」秋葉は色鉛筆をいったん置いた。

「……本気でこれ映画にするの」

真剣な顔で賀来は問う。

「役者がうんと言えばな」

「……結城？」

「ああ」

「を、ヨアンナに？」

「お前もどうせ、気が変だ、殺されるぞっていいに來たんだろ」

スケッチブックをめくりながら秋葉は乱暴に言った。

「話を聞いた全員が目をむきやがる。しまいには反応見てるこっちのほうが面白くなってきた」

開いたページには、いつの間に描きためたのか様々な角度からの結城のアップと、そして尼僧服を着せた彼の顔のアップがあった。

「どうだ、これ本人に見せたらオレは確実に殺されそうか」

端正に閉じられた上品な表情と美しい顔立ち、そしていつも孤独を漂わせる目の冷たい輝きが、驚くほど尼僧服とあっていて、スライドで見たヨアンナの写真とよく似ているのに改めて賀来は驚いた。

「すごい、けど、……本人に見せたら激怒じゃすまないな」

「ま、そこが問題だ」

秋葉は考えこんだ。

「不細工な野郎ばかり使って、クオ・ヴァデイスなんかやるよりよっぽどいいのができると思うんだがなあ」

「そう思うよ」

秋葉は感激したように賀来を見つめた。

「君はなかなかの理解者だな。企画に賛成したのは君が初めてだ」

「いろんな意味で君は天才だと思う」

秋葉はいきなり賀来に抱きついた。

「アミーゴ！ 君は貴重な人材だ。君さえいればきつとうまくいく気がしてきた」

「それとこれとは。いや、ほんとにちよつと待って」大柄な秋葉に絡み付かれて賀来はおたおたと肩をたたく。

「誰が監督をやろうと根本的に、役者とか演技とか、結城は手を出さないと思う。君は天才だと思うけど、結城にこの話をする事自体正気の沙汰じゃない、その点では僕はみんなと同じだ」

「そうかなあ」納得いかない風で秋葉はつぶやいた。

「今の時点で結城が君に牙をむいてないのが奇跡なくらいだよ。これ以上しつこくすると、口もきいてもらえないどころか、絶対近づけないだろう」

「うゝん……」

秋葉は考え込んだ。賀来の胸もまた、千路に乱れていた。

彼の父親の出自、FARC。コロンビア政府と延々と対立している左翼ゲリラ組織。武装農民運動から出発し、キューバ革命を機に、コロンビアの寡党体制の打倒、土地改革、富の再分配を掲げ、社会主義政権樹立を目標とする。コカ栽培地や精製工場、密輸ルートを保護することで多額の軍資金を獲得。政府軍より高性能の兵器を備えることで勢力を拡大させ……

住民からの徴税、要人誘拐による身代金やコカイン取引で毎年推定八億ドルもの活動資金を得……

あの後調べた資料がずっしりとした重みを持って胸に蘇る。

「力と金を欲している」と語っていた木崎の言葉を思い出せば、この組織にかかわった、あるいは今もかかわっている人物の息子を結城に近づけるのは、とてつもなく危険に思われた。

もしもこの事実を知れば、結城は何らかの形で彼を利用しようとするかもしれない。身の周りのひとやものを利用しつくす彼の性癖からして、そうしないでいることのほうが不自然に思われた。

しかしその一方で、明らかにある種の才能に恵まれている秋葉が、結城を中心に据えてあの作品を撮るというのは、賀来の中の夢の実現でもあったのだ。現実化するとはあまり思われないが、完成したものを見たいというのは今から賀来の中にある渴望だった。ならば、自分の今すべきことは何か。

「君は急ぎすぎなんだ。いくら急いても、結城が動かなければこの話はないも同然だよ。もう少し考えないと」

「何かうまい手でもあるのか」

「それは……」

うまい考えなどあるわけもなく、ただ秋葉が結城に近づきたがるのは危険でしかないという本能的な危険信号だけが、二重になって賀来の内に残った。

教会の裏庭の野菜畑の石のベンチで、真由美は呆然と空を見上げていた。

風景は音楽になって目の前を連なって渡り、風のひと吹きさえもが、この世の理のすべてを自分に語りかけてくる。

真実はすべて私の内にあるのよ……誰もわかつちやいないけど。ベンチの上には、キャンディーの包み紙が数枚落ちていた。

ふと気付くと、あの少年がそばに立って自分を見下ろしている。

「ゆーきくん」

自分の口から出る言葉が音になって空に溶けていくのを真由美は見送っていた。

結城は包み紙を拾った。

「あなたにもあげるわよ」

手を伸ばして囁く。

「キスして。一回に付き、いっこ」

私服のグレーのパーカーの袖を引く。長いまつげに縁取られた伏し目がちの目が近づいて、柔らかな唇が触れると同時に、鮮烈な水のブルーのイメージが自分の中ではじけた。

……これをどこで？

雨だれのように降ってくる言葉をうつとりとうけながら、真由美は言った。

噴水のある、駅、の近く……

シンデレラの馬車みたいなホテルの近く……

真由美が差し出したキャンディーを受け取ると、結城はつぶやくようにいった。

それ以上やると、死ぬぞ。

……いいのよ。いいの。

背中が遠ざかってゆく。

あなたの声は、青い。姿も、blue……

私の人生は、夕暮れの海に沈んでゆく。

真由美は新しいキャンディーの紙をむいた。

キザキというストッパーを失って暫く、自分でもよくわからないほど不安定な状態になってから、自分の中の病的な暴力性を抑えるために必要になったものがあつた。たとえば、たやすく夢を見せてくれる甘い錠剤。

目の前にそれがあつたからという理由で、簡単に真由美の誘いに応じた。

真由美は夢の中に溶けようとしている、もう駄目だろう。

自分もどちらに向かつていくのかよくわからない。何か事を起こすにはまだ若く、力もなく、苛立ちと焦燥が先に立って道を迷わせる。

噴水のある駅……馬車のイルミネーションのあるホテル……最初に彼とあつた場所。何かに引き寄せられるように、またこの場所に戻っている。深い海に沈んでいくような時間帯をいつもそう過ごしていたように、結城は噴水のふちに腰かけた。

ふいと、目の端で傍らの若い二人連れが立ち上がり、そそくさと道を横切った。

右側のやせた男の後ろ姿に既視感を覚える。あの服はどこかで……
輸入物の安っぽいぎらぎらしたスタジャン。

めまいのするような勢いで、ある場面が結城の脳裏に展開する。
あの夜、あの手に握られていたのは、アイスピック……

はじかれるように、結城は立ち上がる。なにかをどうしたい、どうしなければと考えるより先に、凶暴な本能が結城の体を前に押し出していた。

雑居ビルの裏手にまわった二人は、携帯を取り出してどこかへ連絡しようとしていた。

「もしもし、あの、あの、偶然だけど今、俺らの……」

背後から伸びた手が携帯をすいと取り上げる。

次の瞬間、真っ二つに折られたそれが二人の足元に投げ捨てられた。二人は同時に振りむき、青白い顔のスタジャンがひきつった声を出した。

「ブルー……」

結城は一言だけ発した。

「悪いな、おまえの名前は忘れた」

次の瞬間、男は口元から血をふきながら壁に頭を激突させていた。
「ヨージ！」

叫び声を上げた男もまた、襟元をつかまれると同時に腹に膝を入れられ、前のめりに倒れる。ヨージは口元を押さえながら、折れた歯を吐きだした。

「殺りそこなったぶんを取り戻してみろ」

結城はヨージの髪をつかんで引き揚げると、もう一度したたかに壁に頭を打ち付けた。

割れた額から血が飛び、結城の白い頬に斑点が散る。

背後でよろよろと立ち上がった男が、ポケットから何かを取り出す。ジジジという鈍い音に振りむいた結城の腕に、電流が流れるような衝撃が走った。

「あっ」

思わず声が出る。男の手に握られているのがスタンガンだとわかると、身を翻して距離を取った。

「来いよこの野郎」男は片手で手招きして、スタンガンを差し出す。しばらく相手の間合いを測りながらぐるぐるまわった後、結城は一閃、相手の手元を蹴りあげた。

男の手からスタンガンが舞い上がった瞬間、結城は相手の額に渾身の頭突きを食らわせる。のけぞって倒れこんだ男は傍らのビールケースを掴み、両手で結城の向こう脛のあたりに叩きつけた。前のめりに倒れたところに、男が散乱していたビール瓶のひとつを振りあげる。咄嗟に身を反転させた結城の顔すれすれに瓶がさく裂し、顔を覆った手と頬に瞬間無数の血の筋を作った。

跳ね起きた結城は男に飛びかかり、幾度が激しく殴り合った後、一面のガラスのかげらの上に相手を引き倒し、組み合ったまま二転三転した。

ばりばりとガラスの割れる音がし、床がお互いの血で染まってゆく。やがて馬乗りになると襟を持ち、頭を何度か思い切り床に打ちつけた。傍らに落ちていたスタンガンを拾うとスイッチを入れ、容赦なく男の首に押し付ける。

虐げられた動物のような悲鳴がとどろく。

「もういいだろう」

低い声と同時に、結城の右腕はいきなり逆方向にねじあげられた。

「……！」

体を自らねじって腕をふりほどこうとするが、頑健な腕に挟まれた体はびくともしない。見上げた目にラテン系の大男がふたり、立ちただかっているのが映る。

サングラスと、口ひげの中年男。

結城が抵抗をやめると、口ひげが結城の顎をつかんだ。

「そこまでにしろ坊や、殺人罪まで背負いこむにはその歳じゃ早すぎる」

サングラスの男が倒れている二人の口をこじ開け、何かの錠剤のよ

うなものを素早く押しこむのが見えた。

二人は結城の腕を取ると、背中を抱くようにして表に止めてあった黒塗りの車に有無を言わず引っ張ってゆく。待機していた運転手に開けさせたドアに背中を突き飛ばすようにして結城を押し込み、続けて口髭とサングラスが乗り込むと、車はそのまま急発進した。

いきなりの展開に結城は混乱した。全く見識のない相手だ、自分に何の用があるのか見当もつかない。

殺されるのか？

「……俺はあんたらを知らない」

結城は荒い息の中でぼつりと言った。

「息子の絵がうまかったおかげで、ひとりの少年を救うことができた」

結城ははつとして、口髭を蓄えた恰幅のいいラテン男をみあげた。

「才能というのはいろんなところで役に立つものだ」

「……俺の知ってる名前を言っているのか」

口髭はにやりと笑った。

「そこはお互い名乗らないことにしよう。私は通りすがりに、少年の喧嘩を仲裁した気のいい男だ」

「さっき、ふたりの口に入れたのは何の？」

結城は後ろを振り向きながら聞く。

「飴玉だよ。たかが記憶を失う程度のな」

風景が、見なれたものにかわってゆくのを結城は眺めていた。

「君がひと時、あの界隈の住人だったことは知っている。だがもう近寄らないほうがいい」

「なぜ」二重の意味で結城は聞いた。

「薬のシマをめぐって、新旧の勢力が入れ替わってるんだよ。君はキーとなる男と以前かかわったと聞く。面倒がいやなら近づかないことだ」

不意に太い指が伸びて、結城の頬を払った。針で切り裂かれるような痛みに、びくりと体が反応する。

「ガラスで切り裂くには惜しい顔なにな。あんな喧嘩の仕方をしている、そのうち殺すか殺されるかでしか終われなくなるぞ」

ブレーキとともに、車は教会の裏口のかなり手前で止まった。

「降りなさい。若い猛獣のような少年よ、神のご加護を」

ふらりと車を降りて振り向くと、口髭が手をあげているのが見えた。結城も小さく手を振る。車は乱暴に発進して秋の道を走り去った。

Joanna 6

誰か来客を見送っていたらしい村越神父と賀来と日南が、ちょうど表門から教会に戻ってくるころだった。

「きゃっ」

最初に暗闇の結城に気づいた日南が悲鳴を上げた。賀来が唾然とした顔で言う。

「結城。……どうしたんだそれ？」

額に大きなあざと裂傷、頬と腕に無数の切り傷を負い、裂けた服には返り血が飛んでいる。

「ただチンピラにからまれたただだよ。誰か来てたのか」

結城はこともなげにいった。

「真由美さんが裏庭で倒れていてね。救急車で運んだんだが、今警察の方たちが来てたんだ」

神父が説明した。警察と聞いてかすかな動揺が結城の胸に走る。

「倒れた？」

「六時半ころ、私が野菜をとりに行ったら、ベンチの下に倒れていらして。声をかけたんですが、もう全然反応がなかったんです」

日南が赤い目で続けた。

「ベンチのわきの庭石で頭を打っていてね、意識が戻らない。ご家族とも連絡が取れないんだ。私も警察の方たちとの話が済んだからこれから病院に戻らないと」

「……」

神父の説明に、直前の真由美の様子を思い出していた。そのまま黙って宿舎に向かおうとする結城に、背後から神父が声をかける。

「実は彼女が薬物を過剰摂取しているようだと言ったと病院の方から説明があつてね」

結城は足を止めた。

「それで警察の方が調査にいらしたんだ。真由美さんと親しくして

いた人がいたら、いろいろ話が聞けないだろうかと思われたんだが、結城くん、君は……」

「親しくないし、知りません」

「……そうか」

結城はそのまま背を向けて宿舎の玄関に向かう。賀来は足早に後を追った。

血のにじんだ口元をぬぐう結城の手首に、火傷のような跡があった。いったいどこで何をしてきたのか、見当もつかない傷だ。

「警察の人がね」

廊下の洗面所の蛇口に手をかける結城の後ろから切り出す。

「日ごろ口にしてた薬とか嗜好品とか、知っていることがあったら何でも教えてほしいと言ってた」

「それが？」

顔を洗いながら結城が答える。

「この間彼女言ってたよね。なんかいいキャンディーがって」

「そのことについては忘れたほうがいい」

即座に言われて賀来は黙りこむ。

結城は顔を拭き、部屋に入り服を脱ごうとして、体のあちこちに服が触れる痛みに顔をしかめた。

「その傷ちゃんと治療したほうがいいよ」

「たいしたことない」

全く目を合わせようとしないうちに結城に、賀来はゆらゆらとした苛立ちを覚えていた。

「神父様が後悔なさってたよ。誰かがもっとちゃんとそばにいて様子を見てあげていれば、あんなになる前に気付いてあげられたのにつて」

「他人が親身になろうと無駄だよ。もう駄目だったのは今日見た時点であつた」

賀来は驚いて問い返した。

「今日見たの？ いつ？」

「夕方六時ころかな」

「どこで？」

「裏庭のベンチで寝転がってた」

「何か話はしたの？もう駄目だってどうして」

「何かわけのわからないことをぶつぶつ言ってたからね。結構楽しそうに」

上半身だけ服を脱ぎ捨てて下着姿になると、結城はそのまま疲れた様子で椅子に腰を下ろす。あざと傷だらけの体を見ながら、賀来の胸に言葉にできない鬱屈した思いが立ちのぼった。

「……誰にも言わなかったんだ」

「俺に何を期待してるんだ」

結城はだるそうに窓に視線を投げた。それはたしかにそうだけど

……

「施設にお子さんがいるんだ。救急車で運ばれるとき、名前を呼んでた。セイ、セイって」

「じゃあ施設のほうがましに育つだろ。どのみち、いないほうがいい親もいる」

賀来は思わず声を荒げた。

「どうしてそんなふうにいえるんだ。彼女は自分で育てたがってた。でも昔からお父さんにさえ暴力を振るわれて、きつと愛し方がわからなかったんだ。でも大人になったって人は変われる。誰かがそこを分かってあげれば、きちんと愛して力になれば、なりたかったいいお母さんにきつと」

「そんなセンチな想像をして出来なかったことを悔やんで見せれば、良心とやらの疼きが少しは軽くなるのか」

結城は抑揚のない早口で遮った。

「生きたいように生きて、あの女の今がある。どんな境遇であれ、今の環境は自分自身で選びとったものだ。人の運命は一本しかない。ああしていれば、こうだったらという他人の仮定なんて何の意味もない」

賀来は言葉を失った。人の運命は一本。自分で選びとった道。間違っているのではない、その通りだ。だが、君がそれを言うのか。僕の前に言い切れるのか？あふれる思いを押さえるように、声を低くした。

「…それはその通りだよ。そんな風に潔く割りきって生きられればいいと思う。だけど、君はほんとうに思ったことはないか？僕はあゝ、何度もあるよ。たとえば、あの日あのとき、もしも僕らが……。

いや、僕があゝのとき」

「どの日のどんな時だ？」

「……結城！」

冷たい声音に、賀来はめまいのするような失望を覚えた。熱くなつた自分の一部から思いがけない言葉が走り出る。

「真由美さんと関係があつたんだろう。それでも生死には無関心でいられるんだね」

結城の氷のような瞳がはっきりこちらをとらえた。言つた途端後悔していたがもう遅い。

「結局そんなことが氣になつてたのか」

「違……」

「誰といつセックスしたとか、その後どうしたとか、いちいち俺から報告してほしかったのか」

「違う！」

不意にドアが外からコンコンと鳴った。

二人の間に凍つたような沈黙が流れる。

「あゝ、日南です。おふたりそこにおられますか」

「はい」

ドアの外からの声に固い声で賀来が答える。

「今病院から連絡があつて。真由美さんが亡くなられたそうです」

賀来は結城の顔を見たまゝ、少し間をおいて答えた。

「わかつた、ありがとう」

「はい」

結城はベッドに移ると、横になつて顔をそむけた。

勘当同然で家を出た真由美の身内とは全く連絡が取れず、教会でささやかな葬儀を出すことになった。

早くからベッドに入った結城は朝になっても起きて来ず、賀来が気付いた時には熱が三十九度を超えていた。葬儀の準備に忙殺される神父とともに、学校が創立記念日で休みの日南が結城のそばにいと申し出た。

「できるだけ早く帰ってくるからね」

賀来の声を結城は夢うつつに聞く。やがて医者と呼ばれ、あちこち湿布をされ包帯を巻かれ、怪我から来る感染症、もっと早めに怪我の手当てを、という説教めいた声音と、しきりに謝る神父の声が重なった。

瞼の裏に、まっすぐに脚をそろえた唐松林が広がる。

きれいなものの名前を言い合おう。賀来の声がする。

昔よくやった遊びだ。

あそこの、きらきらひかる川に着くまで……

綺麗でしょう。すべての風景の中で、青だけが浮き上がって見えるでしょう。

耐えがたいほど美しいでしょう。これはそういう葉なの。

真由美の声がして、目の前に透き通ったキャンディーがかざされる。いつの間にかかざしているのが秋葉の手に代わる。手を伸ばす。高原の風が吹いて、また唐松林が見える。ふたりはいない。

踏み出した足の下に、キャンディーの包み紙が落ちている。赤と黒の毒々しい色。いくつも、いくつも。

後から賀来がくる、拾わなければ。

「……わなくちゃ」

「なんですか？」

「拾わなくちゃ、はやく」

……この道は綺麗でなければいけないんだ。

日南はタオルを額から外して氷水に浸した。結城はうつすらと、

熱でうるんだ目を開いて虚空を見ている。

「お熱が高いから夢をみるんですよ」

細い指で絞りあげると、額の裂傷をおおう湿布の上からそつとタオルを乗せた。

浅い息の下で、結城は小声で言う。

「ベンチの下……」

「はい？」

「何か落ちてた？ 何か、包み紙……」

「ああ」

日南は少し上を見て考える風だった。

「黒と赤の。ゴミだと思って、私片づけちゃいましたけど、いけませんでした？」

「……ありがとう」

結城は眼を閉じると、熱で深紅に染まる唇から、熱い小さなため息を漏らした。

三日目にやっと結城の熱は下がり始めた。

何となく秋葉に会いたくて、賀来は門をくぐるたび学園のあちこちに彼の姿を探したが、ずっと欠席のままだった。

秋葉に会いたい、会って話したい。何を話すというより、あの、ひとと距離を作らない彼の自然体が恋しかった。自分は寂しいのだろうか。こんな風に、結城を離れて人恋しくなることなんてなかったのに。

結城とは結局、熱がある間も下がってからまともな話ができていない。こんな風にすれ違ったまま、時が流れて行くんだろうか。

今日は教会に戻る前に寄らなければならぬ場所があった。

十月十五日は、大槻卓也の誕生日。生きていれば、今日で十七歳になっていたはずだ。

ひとり門を出ると、途中の花屋で買った、百合を基調にした花束を抱えて、電車で三十分の距離の墓地へ向かう。大槻家が納骨をすませたのち誰にも内緒で一度訪れてから、これが二度目の墓参りだった。

たとえば事故死であっても、世間がそう認めてはいても、賀来の中にはある確信があった。

自分と出会えなければ、彼は多分、死なずに済んだのだ。

気の早い木々が薄く紅葉を始めている静かな秋の墓苑。

誰もいないと思っていた琢也の墓前に女性の姿を見て、賀来ははっと立ち止まった。……肩にオレンジ色の蝶が止まっている。

琢也のお母さん？

ナナカマドの木の陰に姿を隠そうとしたその瞬間、振り向いた彼女と目が合った。

「あら」

肩から蝶がぱつと飛び立つ。

賀来は仕方なく、花束で口元を隠すようにして歩みよった。

「こんにちは」

「賀来、賀来祐太郎くん、そうよね？」

「はい」

「ありがとう、お誕生日を覚えていてくれたのね。どうぞ」

「……失礼します」

賀来は母親の前を通り、墓前に花を供えると、膝を折って琢也の墓に手を合わせた。供えたばかりの線香から、細い煙が幾筋も上がっている。背中に彼女の視線を感じる。

……ひとりで参るはずだった。何となく自分の姿を見られたことがいたたまれず、賀来は立ち上がって面と向かうのを躊躇した。

「以前、雪玉のことで、家に来てくれたわね。あなたとは一度、ちゃんとお話がしたかったの」

意外な言葉に、賀来は振り向いて母親の顔を見た。

「直接やりあったのは結城くんだったけど、あなたには迷惑ばかりかけていやな思いをさせていたのよね。後からいろいろ聞いたの。ごめんなさいね」

「いえ、そんな……」

賀来はあわてた。謝られるためにここに来たのではない。

「お友達から聞いたの、あの子があなたに仕掛けていたいろいろなこと。生きていれば今日で十七なんだけど、日がたてばあの子もきっと自分の馬鹿さ加減に気がついて、自分からあなたに謝ったと思うのよ」

「いいんです、そんなこと」

「私にとってはいい子だったのよ。結城くんのことだってね」

結城の名前を聞きたびに、胸にちくりと刺のような痛みが走る。

「あの怪我の時は恨みもしたけど、後であの子の携帯を見たら、結城くんの写真ばかり入ってるの。嫌ってるようなそぶりを見せていたけれど、本当はお友達になりたかったんじゃないかしら」

返す言葉もなく並んで歩きながら、賀来は増えてゆく胸の痛みに耐えていた。写真……。

「よく思うのよ。生きていれば、今あなたたちと同一歳。生きていれば、あなたとも結城君とも仲直りして、今を思い出として語れる日も来たかもしれない。生きてさえいれば、行き違った感情もわだかまりも誤解もいつかは解ける。

でも神様はあの子に、その時間を許しては下さらなかった……」
母親は目頭をハンカチで押さえた。

「どうしてなのかしら。どんな悪いことをしたとしても、そのチャンスは残してほしかったの。それが悔しくてね……」

声もなく隣で嗚咽しているのが伝わってくる。賀来は上を向いて唇を噛んだ。

結城、君にはこの母親の言葉も胸に届かないんだろうか。彼の死にどうかかわったかは別にして、ただ知ってほしい、そして胸のどこかを痛めてほしい……

それはもう、君に望んではいけないことなのか。

「ごめんなさいね、私の話ばかり聞かせちゃって。ここへはタクシーか何かで？」

「いえ、電車と歩きで」

「タクシーでよければ途中まで」

「ありがとうございます、でも歩きたいんです。歩いて駅まで行きますから」

何度かお互いお辞儀を繰り返し、賀来は墓地を後にした。

目の前を、あのオレンジ色の蝶々が飛んでゆく。もう十月なのに、先に立って、まるで道案内をするかのよう……

不意に後ろからけたたましいクラクションを鳴らされて、賀来は飛び上がった。

ダイヤモンドホワイトの、磨き上げられたベンツ。横にすいと止まり、ウィンドウがするすると開く。

「よう、こんなところで何してるんだ」

「秋葉……」

「なんなら途中まで乗せてやるよ。家に帰るんだろ？」

見たいと思っていた顔だった。賀来は頷くと、開いたドアから秋葉の隣に滑り込んだ。

「ここんどこ学校に来てなかったね」つぶやくように尋ねる。

「まあ、いろいろあってな。お前は？ 墓参り？」

「友達の。この冬に亡くなった……」

「ああ、例のやつか」

話を続かせたくなくて、賀来は窓の外に視線を向けた。

「おとといおまえの教会の前通ってきたんだけど、なんか葬式やってたな」

「身寄りがなくて教会で預かってた女性が、病気で亡くなったんだ」「ふーん」

簡単に答えたあと、賀来はまた黙りこんだ。会いたかったのに、言葉が出てこない。

「結城、学校に来てるか？」秋葉がぼそりという。

「誰かと喧嘩したらしくて怪我と熱で休んでるけど、明日は出られると思う。なんで？」

「おやじがさ、その現場を見たらしいんだ」

賀来ははっと秋葉の顔を見た。

「見た？ 誰と喧嘩してたって？」

「相手はチンピラらしい。けど、やり方が異常だって言ってた。あのままほっといたら、相手二人とも殺す勢いだったって」

「……で、相手の怪我は」

秋葉は躊躇するように言葉を切った。

「それがやばいらしい。一人は脳挫傷で死にかけてて、もう一人も重傷。事件扱いになってるみたいだ」

「どうしてそんな喧嘩を……」

「最初から見てたやつの話によると、結城がいきなり飛びかかったらしいぜ。理由は分からない」

賀来は言葉もなく視線を落とした。結城がどこでなぜ何をしているのか、自分に把握できることなんてもうほとんどない。

「言われてたことがだんだんわかってきたよ。やばいから近づくなんてみんなに言われて、大袈裟だなんて思ってたけど、確かにやばい奴みたいだな」

「……」

「ひとりかふたり、だっけ？　なんか冬に死んだ同級生も絡みがあつたようだけど、噂だとそっちも」

「やめろ！」

賀来の突然の大声に、運転手が驚いて振り向く。秋葉が手で払って前を向くように促す。

「悪かったよ、どうかしてた。お前墓参りに行ってたんだよな」
賀来は口を押さえていた。

「お前らさ、どういう関係？　一緒に住んでるんだろ？」

賀来は深呼吸をひとつすると静かに答えた。

「住んでるよ。身寄りがなくて教会で育てられたからね」

「それは聞いた。すぐく仲がいいって聞いたんだけど、そういう風でもなさそうだな」

「……」

「確かに魅力的なやつだからさ。お前みたいな育ちのよさそうなのがそばにいるのも分かると思ってた。でも、なんか思ってた以上に荒んでるよな。ぶっちゃけ、お前らにどういいういきさつがあって今があるのか、聞けるならちよつと聞きたいと思ってさ」

賀来はまっすぐ前を見ながらつぶやいた。

「……無理だよ」

「ひとこともか」

「話せないんだ。なにも」

言い切ってから、ひとり言のように付け足す。

「本当は、溜まってることもあって……。誰かに話せたら、楽だろうとは思うんだけど」

「話しちゃえよ、オレ誰にも言わないぜ」

「駄目なんだ」

「結城に止められてるとか？」

賀来の体がぐらりと揺れて、秋葉の肩によりかかった。

「賀来？」

息を吐き出すように、小声で言う。

「……苦しい」

「病気か？ 病院行くか？」

「待って……」

賀来はよりかかったまま薄い呼吸をゆっくり繰り返した。

「……話したいんだ。でも話せない。そんなことばかり考えて、こんなことばかり続いていると、こんなふうに、ときどき……」

「だから話せよ、オレ聞いてやるぜ。言えることだけ言っちゃえばいいじゃないか。ほら、深呼吸して」

秋葉は賀来の顔を覗き込んだ。賀来は何度か胸を上下させて、目を閉じ口元に手を当て、自分の息の回数を数えるようにした。

「……僕は、結城を、可哀相な人間だと思っていたのかもしれない。彼は運命の被害者で、だから自分がそばにいて、力になれることは何でもしなくちゃって」

「うん」

「でも、それは思い上がりだった。……彼は同情も同調も求めてはいない。一人で選んで、一人で生きて、それを自分で引き受けようとしている。彼には、誰もいららないんだ」

賀来はゆっくり呼吸を継いだ。

「それは、それでいい。彼のいうこともやることも、筋が通ってる。それはいいんだけど……」

考えていること、やろうとしていることやったこと、ほんの少しでも分かる言葉で伝えてくれれば、僕は彼のそばにいられる。せめて、心の一部でも体温でも、伝わってくるならそれでいい。伝えようとしてくれるだけでもいい。でも、それが、今は……」

大槻、木崎、真由美。うつかり出てきそうな人の名前を押さえこみながら話す、それだけで息が荒くなる。

「ひとこと信じてくれと言ってくれれば信じる。伝わらないから、疑ってしまう。疑いたくないんだ。わかりたい。こんな気持ちはおも……」

そこまでいうと、手を口に当て、顔をそむけた。

秋葉は黙って賀来を見下ろす。

迷っていた質問を口にしてみた。

「さっきいった運命ってのについて、聞くのはダメなのか」

「彼は昔はああじゃなかった」

賀来は声を震わせながら言った。

「それ以上は話したくない」

「……そうか」

しんとした車内に、静かな走行音だけが響く。

ややあって、秋葉が思い切ったように口を開いた。

「あのさ、オレさ。……年が明けたら、国に帰る予定なんだ」

「うん」

「治療中の持病があつて。血液の病気なんだけど。親父は日本でな
ら新しい治療法もあるかと思つたらしいけど、どうやら無理らしい。
ここに骨を埋める気はないから、足腰立つ間に帰るつもりだ」

賀来は顔をあげて秋葉を見た。

「どうせ無理だとは最初からわかつてたし、オレは死んだ母親の母
国を見られればそれでよかったんだ。でもいま、やりたいことがで
きた」

秋葉は前を見たまま続ける。

「だからオレになら何でも話せよ。誰にも言えないことでも、オレ
のところへ捨てちゃえばいい。みんな持つてつてやる。オレは今お
前に会えてよかったと思つてるし、結城に会えたのもよかったと思
つてる。彼からは信頼を得られてないけど。

このままぎりぎりまでここにいて、お前たちふたりの信頼を得て、

オレに会ってよかったと同じように思ってもらえたら、日本に來た
かいがあったってものだ」

「秋葉……」

「映画作りたいしな、やっぱり。あいつで」

秋葉は賀來の顔を見て人の良さそうな笑顔を浮かべた。

賀來は秋葉の眼を見てしばらく黙っていた。そして、静かな声で
言った。

「みっともない事言うけどさ」

「言えよ」

「泣きそうなんだけど」

「あっちむいててやろうか、それとも抱きしめてやろうか」

秋葉ののほほんとした表情に吹き出し、そして次の瞬間、賀來の
大きな瞳からは涙がこぼれおちていた。

とっさに下を向いて両手で顔を覆う。

背中をゆっくりと、秋葉の温かい、大きな手が覆うのがわかった。
結城に置いていかれる寂しき、彼の秘密を共有できない苦悩、大
槻の思いと母の涙、真由美さんの言葉、秋葉の告白。何に対して流
れている涙が整理もつかないままに、賀來は自分の苦しみが涙にな
ってほとばしるのに任せた。

彼を抱きしめなきゃいけないのはこの自分であるはずなのに、誰
の胸に甘えているのか。そう自分を叱りつけながら、彼はただ祈っ
ていた。

人としての魂を、結城が一日でも長く持っていられますように。

僕の不安が杞憂でありますように。 僕がいつまでも僕であり、そ
のままの心で結城のそばにいられますように、そしてどうか秋葉が、
一日でもこの世に長く生きていられますように……

そこにおられるなら、神様、お願いです。

Joanna 8

久し振りに出てくる学校は、いつもよりよそよそしく感じられた。学校が結城にとってよそよそしいのは今に始まったことではないけれど。

『ペテロ祭参加申し込みは今日の昼までです。滑り込みOK!』
けたたましく繰り返される校内放送を聞きながら、脳裏にはあのしつこいマタギ男の顔が浮かんでいた。

「あら結城君、もういいの？」

昇降口をあがると、階段を下りてきた養護教諭の桑名が声をかけた。

「大丈夫です」

「ひどい怪我したって聞いたけど。まあ、額が派手だわねえ」

勝手に前髪をかきあげて額の傷跡を見る。結城は顔をしかめてのけぞった。

フツと笑いながら桑名が続ける。

「顔の傷きちゃんと治さないと、映画に差し支えるんじゃない？」

「映画？」

「秋葉君の映画に出るんでしょう？ぎりぎりに申し込んできたとかで、結構話題になってるわよ」

結城はあたりを見回した。壁のポスターにたかっている数人の生徒の立ち話が聞こえてくる。

「昨日ぎりぎりに出してきたんだって？」

「結城が主演すると決まってるわけじゃないだろ」

「事後承諾なんて無茶苦茶だよな。命がおしくないのか、あいつ」

「最近賀来と急接近してるみたいだし、主役も賀来に乗り換えるつもりなんじゃないの」

結城は口を引き結ぶと、くると桑名に背を向け、立ち話をしてる生徒たちの背中ぎりぎりに階段を駆け上がる。

「おいっ、後ろ！」背後でお互いつつきあう生徒たちの声が背中を追いかけてきた。

放課後の玄関掃除に当てられた秋葉の班は、立ち話をする者、モップをただ引きまわしてボールを追いやボール遊びに興じるものと半々だったが、当の秋葉は玄関わきの事務室の椅子に腰かけたまま頬杖について動かなかった。

「秋葉くん、振りだけでもしようよ」

受付の窓からのぞきこんで、級友が誘う。

「だるい」卓上の日誌をぱらぱらめくりながら秋葉は答えた。たとえばではなく、体を動かすこと自体億劫だった。

受付の事務員は一人は来客を案内し、一人は電話で呼び出されたまま戻って来ず、部屋は無人だった。

秋葉は昨日の賀来の切れ切れの告白を思い出しては考え込む。

結城と僕、同じ出身……故郷は破壊された……

結城は忘れず、許さない。僕は祈ることしか乗り越えられない。同じ光景を見た者はいない。離れては生きられない……

「もしもし」受付の窓をノックされて秋葉は顔をあげた。ヘルメットの配達人が郵便物を手にしている。

「郵便です。これね、切手代が不足してるんですが」

「あ、はいはい」

老け顔なうえに上着も普段着ない自分が事務員に間違われたのが面白く、秋葉は小銭入れをかき回して金を払い、他の郵便物と一緒に封筒を受け取った。

切手代不足の封筒は妙に重く、振ってみると写真が入っているらしいのがわかる。差出人の名前はない。安っぽいあり合わせの封筒の宛名はただ学園名だった。

……なんかやばそうな匂いがする。秋葉は掃除仲間が外で本格的にボール遊びを始めたのを確かめ、卓上の鉢で封筒の口を細く切った。

中を覗くと写真は十五枚くらい、一瞥しただけでどうやら裸体写真らしいということが分かる。

どの変態教師あてか知らないがこんな面白いことがあっていいのか。秋葉は笑いをこらえながら、そっと写真を膝の上に取り出した。女と思ったが男の写真で、眼隠しや猿轡で顔はよくわからない。均整のとれた細く美しい体だということはわかる。白い布の海で溺れるように、繋がれた両手を頭上に伸ばしてのけぞり、あるいは横をむいて顔をベッドにうずめるようにし、或いはうつ伏せでシーツをつかんで身をよじる写真は見ようによっては美しく、ハーブ・リッツのファッション写真のように端正な陰影が際立っていた。

悪趣味だがよく見ればいい写真かもしれない。撮った側も被写体も。でも、ある人物に似ている。気のせいかもしれないがとても似ている……

最後の一枚に秋葉は驚愕した。ベッドにあおむけになったまま放心したように天井を見上げる、絵のような少年の顔。紅潮した頬に誰かの手が添えられ、泉のように澄んだ瞳には、長い睫毛に絡まるようにうっすらと涙が浮かんでいる。

何か美しい動物の化身のような、その非現実的な容貌は間違いない……

写真を裏返すとそこには、ペンで乱暴な走り書きが一行。

『この写真を撮った男は、今年の二月、彼に殺された』

「おい」

聞きなれた声に背後から声を掛けられて、秋葉はびくりと飛び上がった。

瞬間、膝の上の写真をかき集めて、封筒に押し込む。振りかえると、不愉快そうな顔の結城が入口に立っていた。

……嘘だろう。右手に隠し持った封筒の入り口をぎゅっと握りつぶす。

「誰がいつ映画に出るって言った？ 俺は断ったんだ」

「……え」

「出ないと言ったら出ないからな。賀来でも誰でも使え」

左手で後ろ手にそろそろと机の引き出しを開け、右手の封筒を押し込んで音が出ないようにゆるゆると引き出しを閉める。

「それは、まあ、おいおいと……これから話し合おうと」

混乱する頭をなだめて懸命に受け応える。

「なんで話し合いなんかしなくちゃならないんだ。そっちが勝手に」
不意に結城が黙りこみ、不審そうに秋葉を見つめる。

秋葉は動揺した。

「なに、……何だよ？」

結城は首をかしげるようにして言った。

「鼻血」

「えっ」

指を口元に当てると、もう唇まで垂れてきているのがわかる。

「うわ」

秋葉はがさがさと卓上のティッシュボックスから何枚かのティッシュを引き抜き、乱暴に口元に当てた。

丸めたティッシュはみるみる真っ赤に染まってゆく。

上を向くと、気道に一気に血液が流れ込み、秋葉は激しくむせこんだ。

「……だめだ」

手近なゴミ箱を引き寄せ、鼻の上をつまんでかがみこみ、のどに入り込んでいた血をせきこみながらゴミ箱に落とす。もうティッシュで押さえても無駄なので、そのままゆるい蛇口のように鼻血を垂れ流すままにし、ポケットの携帯を探した。

番号を押そうとするが、指が血で滑ってうまく押せない。

黙って見ている結城に携帯を突き出した。

「悪い、代わりに押してくれ」

「何かの病気なのか。救急車？」

「自宅だよ。ただ車で迎えに来てくれというだけでいい。番号は」

「結城！」

振り向くと、入口にいつの間にか人だかりができており、先頭で賀来が立ちすくんでいた。

「何をしたんだ!？」

「何もしてないよ」

通話が終わると結城は電話を切った。

「……すまない、構図が悪すぎるな」

結城の足もとにはいつくばってゴミ箱を抱え、口と鼻から血を吐きだしながら秋葉が小声で言った。

「ほんとに鼻血を出したただけだ。結城が電話してくれたから」
短く言うと、また鼻血が流れるに任せてうつむく。

「結城……」

「聞いただろ。信じなくても仕方ないけど」賀来を見ながら結城は投げやりに言った。

桑名が人垣をかき分けて事務室に入ってくる。

「どうしたの! とにかく保健室に来なさい、秋葉君」

「ここでいいです」

「あなたもよ結城君、後で話を聞くから」

「なんで俺が」

押し問答の中、車が表門の前に到着した。秋葉はひどく具合が悪そうに、椅子の足元にもたれている。賀来はずっとしゃがんで秋葉の鼻を押さえ、ティッシュを取り替えていた。血は一向に止まらない。

「帰れば大丈夫ですから」

体を気遣う桑名に秋葉はそう繰り返し、そのほかに、結城には関係ない、かえって迷惑をかけた、と言い続け、運転手に脇を抱えられるようにして車に乗り込んだ。

見送る賀来に窓を開け、

「結城にお礼いって」と短く言うと、タオルで口元を覆ったまま上を向いた。

結城は玄関わきで腕組みをしたまま寄りかかっている。

車が動き出す直前、秋葉は閉めた窓を突然叩き始めた。

「ガライ、ガライ！」

懸命に手招きし、手元の紙に何やらぐちゃぐちゃかきつける。

メモを押しつけると、口元を覆ったまま

「読んで。そいつを手元に保管して。それで絶対、絶対に封筒の中は……」

そこまで言うとはどくせき込んだ。

「わかった、大丈夫だから」

扉が閉まり、車は急発進した。賀来は手元の紙を見る。

『事務所手前の机、引き出し、一番上、茶色い封筒、けっして……』

最後のほうは読めない。もう野次馬もほとんどいなかった。結城のそばにいくと、賀来はひとこと言った。

「ごめん」

「なにが」

「君を疑うようなことを言った」

「……まあ、それは」

結城は背を起こし、上のほうを向いた。

「あそこにいた誰もが思ったことだろ」

賀来は事務所へ入り、机の引き出しを開けた。

「何やってるんだ？」

「なんか僕に渡したいものがあるらしい。絶対に……とかなんとかいつてた。これかな」

「どうしてそんなところに」

封筒を取り出したとき、事務員が戻ってきた。

「何してるんだね」

「あ、すいません」

二人はそそくさとその場を離れ、中庭に面した回廊のほうに向かった。放課後の人気がない回廊で、柱の陰に入るようにして、賀来は封筒を取り出す。

「ほかにもあったかもしれないけど、あれ以上探すわけにもいかな

いし」

「手紙？」

「さあ？ 写真みたいだ」

さっと一枚取り出した時点で、賀来は「あ」とひとこと叫んで写真で封筒に戻そうとし、あわてた拍子に封筒ごと取り落とした。

かがんで拾おうとした結城を止めようとした声は、悲鳴に近かった。

「結城駄目だ！」

飛びつくようにして封筒を取り返そうとしたときには、もう結城の手に写真があった。賀来はそのまま凍りついた。

最初の一枚を見た時、結城が固く唇をかむのがわかった。

裏返すと、殴り書きのようなメモ。

『この写真を撮った男は、今年の二月、彼に殺された』

賀来の全身から血の気が引く。

写真を見ていた結城の視線が、ゆっくりと賀来に向かった。

「秋葉が、これをお前に？」

「……」

賀来はふらふらと頭を振った。わけがわからない。

「違……」

「何がどう違うんだ？ あいつからの伝言だろう」

静かな声色に言い知れない怒りが含まれているのがわかる。結城は一枚一枚、冷静に写真を見ている。裏書きのある一枚を抜き取ると、すべてそろえて封筒に戻した。

封筒の口をつまんで、賀来に差し出す。

「ほら」

「……ぼくは、それは、いらない」

胸が早鐘のように鳴る。賀来は茫然と首を振りながら、自分の言葉を棒読みの役者のようだと思う。

「いらないなら俺が直接秋葉に返してきてやろうか、お礼付きで」

「結城……」

絶句した賀来の前で結城はひらひらと封筒を弄ぶ。

「それは……それはだめだ、僕が……」

次の瞬間、手の先の封筒を、結城は賀来の顔に向かって叩きつけた。

痛みと衝撃が裂けた封筒とともに眼前に弾け、視界を覆う。

「お前のものだ。持って帰れ！」

聞いたこともない結城の大声に、脳天から電流を流されたように賀来は硬直し、身をひるがえした結城の姿が視界から消えるまで縛りつけられたように動けなかった。

——世の中の関節は外れてしまった。ああ何と呪われた因果か、それを直すために生まれついたとは！

何の脈絡もなくハムレットの一文が脳裏に浮かぶ。

のろのろとかがんで封筒とこぼれた写真を拾うと、そのまま膝の力が抜け、賀来は真っ青になって地面に座り込んだ。

どこを歩いているのか自覚できないほど動揺したのは初めてかもしれない。

坂道の多い街並みを、ただ上がり下がりして進みながら、結城は今まで感じたことのない不快感に食いつかれてもがいていた。

分析するのも面倒だが、一番の痛手は、あの一文だった。賀来が信じるとするなら、大きな選択を彼は今、迫られていることになる。いつかこんなときが来るにしても、もっと先でよかったのに。少なくとも今、こんな形で苦しめたくはなかった。告げるにしても、その時期は自分が決めるつもりだった。

賀来にその選択を突きつけた秋葉に対する怒りは、自分のセーブできる限界を一気に超えていた。どこでどうしてもあの写真が秋葉の手に入ったのかも、どうしても知らなくてはならない。狂ったような凶暴な本能が、結城の中で燃え上がり始める。

……思い知らせてやる。どういうつもりで自分に接近してきたのか知らないが、今度は本当に自分の血へどの中をのたうちまわらせ

てやる。あれを見たこと、賀来の目に晒したことを骨の髄まで後悔させてやる。

許さない、絶対に。

Joanna 9

暗い公園の中で、腰の携帯のバイブが鳴り続けているのにふと気付く。取り出した携帯は、自分のものではなかった。

……あのとき。そうか、番号を押しているとき賀来に声を掛けられて、いつの間にか秋葉の携帯を間違って自分のポケットに。

乾いた血がこびり付いたままの携帯を開く。最新の着信はすでに録音に入っていた。怒りも手伝って再生を押す。が、その声に動揺した。

……賀来。

泣いているような震えているような声が、公衆電話の外の音混じりに聞こえてきた。

……賀来です。封筒は受け取りました。あれが僕に見せようとしたものなら、僕は秋葉の意図がわからない。

写真は知っているものでした。結城にとって一番人に見られたくない写真だと思えます。でも、あの一文が君が書いたものだ、僕は信じたくありません。それが本当でも嘘でも、もし選択を突きつけられるなら、僕はこのことを知らせてくれた君のそばではなく、やはり結城とともにいることを選びます。そうすることが正しいかどうかじゃなく、僕はそのように生きることを選び、そういう風にしか生きられないから。

それと、結城は僕と一緒にあの写真を見てしまった。どこで君があれを手に入れたにしろ、彼は君を絶対に許さないと思う。君自身のために、そのことを知っておいてください。自分がすぐ危険な立場にいるのだということを自覚しておいてください。

君は今の僕にとって大事な友人だった。見たことも読んだこともすべて忘れます。

……残念です。

結城はしばらく携帯を握ったまま、夜の風に吹かれていた。

どこから花の香りがする。寄る辺ない同じ夜の闇の中で、揺れる賀来の声音にはただ、悲しみだけがあった。ただそれだけが。

周囲の騒音にかき消されそうになりながら、細い声で呟くように語る賀来の表情までが、見えてくる気がする。

彼は今、ひとりだ。ひりつくような思いが、花の香りに混じって自分に届く。

彼が一番孤独な時、一番傍にいたべきは自分だったはずなのに……罪は賀来にはない。自分のしたことは、絶対に見てほしくないものを見られたことに対する八つ当たりでしかなかった。それと、もっと醜い感情……

結城は携帯を閉じた。胸の中に紅蓮に燃え上がりかけていた炎が、青く静かなものに変わっていた。

再び携帯が震える。……賀来？

咄嗟に通話を押し、耳に当てる。

「もしもし」

『やはり君か』

低いバリトンの中年男の声に聞きおぼえがあった。秋葉の……

『結城君だね』

「はい」

『息子がもしかしたらというものだから』

「彼はどうですか」平静を装って尋ねる。

『何とか出血は止まったよ。それでだ、お礼がしたいんだが』

「俺は電話しただけですよ」

『いや、実は、君との間に誤解があっとはいけないと息子が言うもので。わたしも一度じっくり話がしたいんだ、いろいろと。どうだろう、自宅に来てもらえないかな』

「今？」

『携帯をそのまま返してくれたなら心から感謝する。息子が心配し

ているもので』

結城はしばらく考えていた。

「ひとつ聞いていいですか」

『何だね』

「あなたはコロンビア革命軍と関係があるんですか」

長い沈黙があった。

『そうだとしたら？』

「そちらへ行きます」

『では来てもらおう。迎えをよこすから場所を言ってくれ』

災厄が降りかかるなら、倍にして返すか、それ以上のものを手にして帳尻を合わせればいい。結城の中で、本能に近い冷静な計算が始まっていた。

「エル、来たようだぞ」

インタホンの受話器を置いた父親に声をかけられて、ロココ調の豪勢な居間の片隅でゲームをしていた秋葉はスイッチを切った。

「オレもここにいたべきかな」

「むしろ主役はお前だろう」

「おやじ、どこまで話を進める気なんだ」

「それは相手次第だ、なかなか手ごたえのある相手のようだからな。だが私の価値観の中心、最重要事項は」

ロペスはびしっと息子を指差した。

「お前自身、お前への愛だ、エルネスト」

秋葉・エルネスト・メロ・ロペスはくると天井を見て肩をすくめた。

メイドに案内されて濃紺のブレザーの学生服姿の結城が部屋に入ってきて来ると、それだけで部屋がぱっと華やかになるようだった。

「傷も治っているようでまずはよかった。息子の大事な友人をお招きできて光栄に思うよ、ようこそミチオ」

掌を上に向けて秋葉の隣を勧める。結城は氷のような目で秋葉を

見ると、ロココ調のソファの秋葉の隣に腰かけた。風のように、ふわりと甘い香りが結城から流れてくる。

「今日の今日で申し訳ない、携帯のこともあるが息子が君に早急に会いたい事情があるというので。親バカですまんね」

「今までを見ていればわかります」

秋葉は冷ややかな結城のオーラをじかに感じていた。なにしろ隣はきつい。

「そうか、馬鹿丸出しか。君の親父はどうだね」

笑いながらロペス氏が言う。

「え？」

「私のような親は珍しいか」

メイドが目の前に置く紅茶を見ながら、結城はしばらく考えて言った。

「……早くに亡くなったけれど、幼児洗礼を受けさせてくれて、かなり小さいとき、これはお前にこそ必要だと言って俺に立派なロザリオを買ってくれた。優しかったけど常に視線が厳しかったと思う」

あの時から、何か俺に感じてたのかも知れない……語りながら結城は思った。

「ほう、で、そのロザリオは今どこに」

「友人の賀来が持ってます」

秋葉は意外そうに結城の顔を見た。

「彼が付けてるのは見たことないな」

「たぶん服の下に下げてる」

「君は付けないのか」

「俺は祈るのをやめた」

結城はポケットから携帯を取り出した。

「中は見えてない。でも最新の着信をひとつだけきいた、公衆電話からの」

「誰から？」

結城は再生スイッチを押してテーブルに置いた。賀来の声が流れ

だす。

……そういう風にしか生きられない……結城は君を許さない……君自身のためにそのことを知っておいて……残念です……

秋葉は食い入るような表情で声に聞き入っていた。

賀来が、結城と、あれを……

賀来の声が痛々しい。最悪の展開に唇をかむ。二人にあの後何があったか想像に難くない。同時に、あの写真は知ってる、という彼の発言も驚きだった。

結城に向き直ると、珍しく真剣な声音で言った。

「まず、これについての誤解を解かせてくれ。あの文章を書いたのは俺じゃない。写真は無記名で学園に送り付けられたものだ。たまたま中をみていて、俺は君に話しかけられて隠すつもりであれを咄嗟に机に突っ込んだんだ」

「その写真てのは今どこにあるんだね」ロペス氏が口をはさむ。

結城はポケットから一枚の写真を出して卓上に置く。

「結城！」

秋葉が止める間もなく、父親が写真に手を伸ばすのを秋葉は愕然として見ていた。

結城の上半身の写真を長いこと見つめたのち、ひっくり返して裏の文章を読み、髭に手をやり考え込む。

「これを撮ったのは」

「そのさきを言う前に条件があります」結城はロペス氏の顔を見た。「あなたの質問に答えるから、俺……僕の質問にも同じ数だけ答えてくれますか」

「いいだろう」

秋葉は双方の顔を交互に見た。

「彼は僕に今年の冬いっぱい、生きるのに必要なことを教えてくれた」

「これが生きるのに必要なことか」写真を返しながらロペス氏は言う。

「いずれそうなるかもしれない」

結城の言葉に秋葉はぎょっとした。

「もともと最初は僕が望み、それ以降は彼の趣味と取引に」

「取引？」

「金と薬と知識」 あっさりと結城は言った。

「簡潔だな。だがただの高校生がそんなことのためになぜこんなまねを。私の国でも珍しくはないが、たいてい貧しい餓鬼が金のためにやることだ」

「僕の人生にとってその三つはどうしても必要なことだったから。なぜというのは今は説明できない」

「で、裏書にあることの真偽は尋ねてもいいのかな」

「答えを正直にというなら難しい。ここは南米じゃなくて日本だから」

「なるほど、わかりやすい答えだ」 ロペス氏は愉快そうに笑い、葉巻を咥えた。

「店主が邪魔なストリートチルドレンを路上で撃ち殺し、銃を手にしたガキが小遣いのために十二、三でひとを殺す。私が身近で見してきた風景だ。この私が直接間接に手にかけて人数となると百人単位だしな。まあいい、問題は理由だ。君は彼を憎んでいたのか、条件付きとはいえ付き合わされたことで」

「合意の上でのことを恨むなんて不合理なことはいらない」

「ではなぜ」 手元の金色のライターで火をつける。

「どうしても答えが必要ですか」

「息子の友人として、君という人間を理解したいんだ。奴との間に何があってそういう結末になったのか、知りたいと思うのは当然だろう」

結城は少し上を向いてから言った。

「全部ではなく一部の理由になるけど。僕はある意味彼の趣味を利用したけど、彼は最初から乱暴に薬を使った。いつも前半が暴力で、後半は性行為。それまでがどんなに苦痛でも、エフェドリン系の薬

物でまがいものの天国に強制的に放り込まれる。耳元でうんざりするくらい愛してる愛してると言われて、僕にも同じ言葉を強要された。言わないとイかせてもらえなかった。葉の魔力でどうしようもなく、自分としては苦痛よりそっちのほうが辛かった。そのうち、本当に自分が彼を愛しているというような錯覚が起きた。体を翻弄されるより、自分の感覚を翻弄されることのほうが耐えがたく、屈辱だった。これがごく一部」

秋葉は顔をそむけてソファによりかかっていた。

「気分が悪いなら部屋に行くか」ロペス氏が視線を投げかける。

「いいよここで」

自分の横で平気でぺらぺらしゃべる結城を見て、秋葉は妙な感覚にとらえられていた。父親にあっさり自分の写真を渡したことと言いつ、彼には羞恥心のようなものが抜け落ちているんじゃないか。冷静沈着ではあるが、普通の人間にある何かが大きく欠落しているような気もする。

「大きな理由のほうは聞かせてはもらえないのか」

「今は無理です」

「では、彼を恨んでいないというのは本当か、再び聞きたい」

「恨んではない、彼は僕が望むものを与えてくれただけだ。最後まで彼は彼だった。あれが愛だというのは僕には理解できないが、彼の生き方にはそれなりに嘘はなかったと思う」

「ある意味幸せ者だな、キザキ・ノリヨシも」

突然名前が出てきたことに結城は驚愕した。

「……あなたは、何者なんですか」

ロペス氏は鷹揚に微笑みながら結城に問う。

「大体的見当は付いているかね」

結城は彼の顔を見ながら黙りこんだ。秋葉の鼓動が速くなる。

「僕のいる施設の女性が手に入れたと言っていて、その後急死したとき所持していたのが秋葉が持っていたと同じ包み紙のキャンディだった。彼がしょっちゅう口にしているようなので麻薬かと思って

いたが様子を見るとそうでもない。彼が何かの病気なら痛み止めか何か、必要なものを塗りこんで常備しているとして、FARCとかかわる父親がいるのなら、おおもとの入手ルートは自在だと思った。それと、彼女がそれを手に入れた場所で僕はあなたとあっている。薬の売買ルートにかかわってたキザキの名前も知っている。薬をめぐる勢力図が変わって抗争になっているとも言っていた。FARC系列のコネクションを生かして、日本へはそういう仕事で来たんじゃないかと」

「……素晴らしい」

ロペス氏は手を叩いた。

「感動的なまでに洞察力の優れた子だ。君が敵なら暗殺しなければならん。ひとつききたいが、FARCという情報はどこから」

「調べ物をしていて行き当たった単語で、あとはただの勘です」

ロペス氏は首をかしげた。

「まあいい、過去の話だ。問題は現在だ。君は木崎から何か渡されたか」

結城は沈黙した。

「あなたとの間に関係のない話だと思う」

「めぐりめぐって関係はあるんだ。前言った勢力図はこれから塗り替えられる。我々が介入したことで、あの一帯を支配していた薬のルートは混乱している。その中で、以前仕切っていた組の末端で薬の売買をしていたキザキが着服していた金と、ある高価な薬の流出先が問題になっているらしい。一部で、それが流れた先が君なんじゃないかという噂がある」

「ただの噂です」

「私はこの件に特に関心はないからそれでいい。だが組の末端のチンピラは最後のおこぼれ奪取に興味があるらしい。加えて、君が暴れるものでまたいらない敵が増えたな」

「おやじは、あの写真を送って来たやつに心当たりがあるのか」

秋葉が口をはさんだ。

「ルート確保をめぐり必死な組があんな遊びはしている暇はないだろう。やるなら誘拐でもなんでもとつとやる。あれは嫌がらせだな、個人的な。君に心当たりはあるか、ミチオ」

「ありすぎるくらいで。個人的な恨みになれば限定できるけど」

座りなおすと、結城はロペス氏の顔を見た。

「どちらにしろ結局僕の問題です。いろいろ教えてくれてありがとうございます。あなたについてだけど、今はFARCとは無関係なんですか」

「過去の話だ。私は農村出身でね、それなりに主義も理想もあり、母国の社会主義化という理想を掲げて戦った。打倒アメリカ、打倒帝国主義、国の利益を民の利益に」

横を向いて煙を吐く。

「だが、いつか資金源であるコカインの争奪戦と誘拐ビジネスが主流になり、理想はどこへやら。世界一のコカインの産地になるという結果だけが残った。九十一年から九十八年までの間に麻薬と誘拐ビジネスで組織が得た金は六千三百六十億円、ミサイル・濃縮ウランという危険な兵器をため込み、内戦のあった十年で巻き添えを食って三万五千人以上の市民が死んだ。そのうちの一人がこいつの母親だ」 秋葉を見やりながら話を続ける。

「エルネストの母親は美しい日本人留学生でね。赤ん坊も生まれ、あそこが一番幸せだった。だが結局、北米旅行中にDEAの捜査官に殺された。アメリカ麻薬取締局。知ってるか？ “レオン”に出してきた狂気の軍隊だ。こいつが十二の時だ。こいつの兄も巻き添えを食った」

十二、という数字に心のどこかが反応する。

「それでも地下に潜り、実業家の仮面をかぶってこんな仕事をしてるわけだ、他に生き方を知らんのでな。コロンビアが昔の私の理想通りの国になってくれるのを望んではいるが、もう私からはいろいろと遠い」

「僕も同じ歳で両親を失った」

結城はぼそりと言った。

「賀来の言っていたことか？」

「賀来が？ 彼がどこまで」

結城は顔をあげて秋葉を見る。

「その歳で君とともに親を失ったと。それ以上は聞いてないよ、なにかいろいろ語りたみたいで。すごく苦しそうにして泣いてた、オレの前で」

結城は沈黙した。彼はそのことでけして俺の前で泣かなかった。俺はもうそういう場所じゃないんだろう。

「僕たちは同時に故郷と家族を失った。奪ったやつを僕はけして忘れない。賀来には賀来の生き方と収め方がある、その形は未来永劫重ならないと思う。だから、かえって一緒にいるのは苦しい」

「同じ形のもの同士が集まると私の国のようになるぞ」ロペス氏は笑った。

「君が力や金や知識を求めるのは、復讐のためか」

「僕は一人で生きて一人で決断していくつもりだから、そういうものはすごく大事なんだ」

「なるほど、孤独な戦士だな。私も一人で戦う気概があれば」

ロペス氏は感動したように言った。

「本題に戻ろう。懸念の誤解は解けたと思っていいのかな」

「はい」

結城は答えた。自分にとっても、地獄の思いから救われた部分があった。

「さて、エル、自分で言うか」

「ええと……」

「？」結城は怪訝な顔で秋葉を見た。

「単刀直入に言うよ。オレやっぱりお前で映画撮りたい」

「またそれか！」

結城はあきれて思わず大声を出した。

「こいつはあと二、三カ月で母国に帰る。はっきり言って血液の病気でね、命がその先ひと月くらいだ。愛する妻のくれた宝物の最後

の望みだ、馬鹿と言われても私も協力したい」

いきなりの言葉に結城は驚いた。彼のものおじしない態度が初めて理解できた気がする。

「ただでとは言わない。君に悪意を持ち余計なちよっかいを出してくる奴は私が排除してやろう。必要なら金銭的援助もする。つまりない望みの見返りとしては十分すぎやしないか」

結城は混乱した。今まで聞いてきた話がこんな次元に着地するとは。

「本当にそんなことのために……」

「私にとっては世界でただ一つの宝だ」

結城は考え込んだ。

「じゃあ、もうひとつ。守ってほしい友人がいます。おそらくこれからいろいろ起きるだろうし」

「賀来か」秋葉がたずねる。

結城は頷いた。

「そちらも約束しよう。そして今日ここでの話はお互い永遠の秘密としよう。頭もいいし勘もいい、理性的で無駄がない。君は大事なわが息子の親友だ、何より息子がほれ込んでる。だが私はこういう人間なのでな、信頼に対する裏切りは死だ、わかるな」

「ええ」

「交渉成立だな。では私の前で握手してくれ」

手を伸ばしながら、秋葉は尋ねた。

「おい、オレはもしかしたら命拾いしたのか」

「そうかもしれないね」

結城は秋葉の手を握りながら、さりと笑った。

「誤解を解くなら今日中に呼べ、と息子をせっついたのは実は私だなにしろ相手が君だからな」

「間に合ってよかったです」

父親に肩を抱かれ、両ほほに接吻される結城を見ながら、秋葉の背筋に冷たい汗が流れた。

その夜、賀来は教会に戻らなかった。

村越神父は冬の事件を思い出して取り乱し、結城に心当たりを尋ねてきた。

あると言えはありすぎて説明のしようがない。結城はただ待ち、そして祈るだけという時間を、後悔の念とともに自分に課するしかなかった。

もしもこれで賀来になにかあったら、どれだけ自分を責めても責め足りない。自分のしたこと言ったことが、思い起こすほどに針のように自分に突き刺さって来る。もし百回の祈りのうち一回でも聞いてもらえるのなら、この世に神がいてほしいと結城は初めて心から思った。

バラとエメラルドとコカイン、コロンビアの産物。目を閉じると三つのイメージが、なぜか賀来の悲しげな表情とともに頭の中でスパークする。葉もやっていないのに、眼を閉じるたび繰り返し浮かぶ映像に結城はめまいを覚えた。

やがて、バラの花の影で俯く賀来のイメージが頭の中で固定し、消えずに残った。

「校門が開く頃学校につきたいので、早朝にここを出ます」

聖堂でまんじりともせず座り続ける神父に未明、そう告げた。

「そんなに早く、なんのために」

神父に不審がられたが、ただなんとなく、というしかない。

十月の朝は秋一番の冷え込みで、聞いたことのない鳥が夜明けの空にさえずっていた。

焦げ茶の体に、輝く金の角。この蛹は見たことがある、昔どこかで。

賀来は伐採されたオレンジの枝の、蛹の止まる部分を折って拾い

あげた。

足元には抜き取られたパンジーの苗もある。確かこれが餌だったはず、越冬のためにより安全なオレンジの木に登って蛹になったんだろう。何という名前だっけ、この蝶は……蝶の名前は。

植え替え中の花壇を離れ、バラ園のベンチに座って考え込んだ。ふと手元が暗くなり、顔を上げる。

名状しがたい表情の結城が、突っ立って賀来を見つめていた。

「……！」

立ちあがると、賀来はくると背を向けて立ち去ろうとした。その刹那、腕を掴まれて枝が落ちる。

青白い顔をそむけて俯く賀来を、結城は自分のほうに向けてひとこといった。

「ごめん」

「……」

賀来の頭に血が逆流する。様々な感情がせめぎ合って顔を上げることができない。

「話も聞かずに、俺が……」

足元を見て、賀来がつぶやく。

「蝶が……」

「何？」

「蝶の名前がわからない」

「……賀来」

腕をつかんだまま、結城は賀来の体を引き寄せ、抱きしめる。

冷え切った賀来の背中に手を回しながら結城は言葉を探しあぐね、賀来は結城の腕の中で、一晩の思いがのどにこみあげてうまく言葉を発することができないでいた。

「僕を許してくれたの」

「そんな風に言うな」

わだかまった体が、結城の中で溶けきれずにいる。手探りで、あまりに深く傷つけすぎた相手への距離を測る。謝る言葉、近づこう

とする言葉、どれも自分の中に久しくなかった。結城はただ賀来を抱く手に力を込め、賀来は結城の胸に握りこぶしで当てたままの手をゆっくりと開いていった。

「秋葉と会った。彼が送ったものじゃないこともわかった。俺がひとりで……」

ふと、結城の体の力が抜ける。背中に回していた手が小刻みに震え、息が荒くなったのを感じた。

「……結城？」

身を離して彼を見る。顔色が一気に失われ、視線が宙を彷徨っているのがわかる。

「結城、もしかしていつもの」

結城は口を押さえ、ベンチに片手をつくど、動物のように荒い呼吸をし始めた。空気が出ない、入らない。その全身の感覚が自分まで伝わってくるようだ。

「今、桑名先生呼んでくるから」

「だめだ。人目に付かない、所へ行きたい、それだけ手伝っ……」
ベンチに倒れ、地面に落ちたオレンジの枝を握りしめる。

賀来は結城を抱えると、庭仕事用の作業小屋に引きずるように連れて行った。

入口を閉めると、結城はそのまま床に倒れこんだ。あおむけで呼吸することもできず、右に左に身をよじり、片手で床をつかむようにして喘いでいる。

「結城、人を呼ぼう、このままじゃどうなるか」

床をかきむしりながら、結城は消え入りそうな声で言った。

「資格」

「なに？」

「人を、自分も、だから…… ない」

賀来ははっとして結城の姿に見入った。

近くの床に胃液を嘔吐する、口元をハンカチで拭き取る。軽いけ

いれんで口の中を切る、流れる血を拭きとる、それくらいしかできない。

必ず終わる、もうすぐ終わる、神様もう彼を許してください、そう祈るような思いで心に繰り返し続けて手を握る。十五分くらい結城の激しい苦しみは続き、やがて気を失ったかのように静かになった。

眠ったのか気絶したのか、どちらにしても、あの責め苦はひと段落したのだ。彼が自分の代わりに引き受けている煉獄の苦しみは。

汗びっしょりになり、蒼白な顔で目を閉じる結城の額を拭きながら、賀来は静かに語りかけた。

「……結城。僕のためにいつもいつも、ごめんね……」

白いシャツが汗で透けていた。

「昨夜、僕は、ほんとは死にたくて……死のうとしてたんだ。どうせ何を言ってもやってても君を怒らせるだけなら、いっそ死んでしまえば、君にも少しは僕の苦しみをわかってもらえるかと思って。陸橋から下を見たり、ビルの非常階段を眺めたり。でも……」

髪をなでながら、つぶやくように続ける。

「ときどき忘れそうになる。僕を置いて好き勝手なことをしているように見える君も、こうして僕をかばって毒ガスを吸ったために、すべての苦しみを背負ってくれているんだね、おそらく一生。わかってくれなんて、君は一度も言ったことがなかった……」

傍らのオレンジの枝を手元に持つてくる。

「今思い出したよ、これの名前。ツマグロヒョウモンだ。小三の頃、島で冬に蛹を見つけて、部屋に持って帰って、蝶になるのを待っていた。君が変化する途中が見たいって、蛹を手術しそうになるのを止めるのは大変だったよ」

賀来は一人で小さく笑った。

「どんなふうに、同じ生き物なのにどんなふうに変化して別の生き物になるのか知りたいって、その途中が不思議でしょうがないって……」

宙を見つめたまま一呼吸置く。

「……ある朝、冬だというのに蝶になっちゃって。この寒さじゃ死んじゃうって君が心配して、丁度学校の体験学習で東京の植物園に行くことになってたから、その時に持っていこうって君が言いだした。温室の中ではなそう、そしたら生きていけるって。二人で放したあのととき、瓶から出てガラスの天井近くにまで舞い上がったオレンジの蝶は、ほんとにうれしそうだったね」

結城の目がうつすらと開いた。

「結城！」

賀来は顔を覗き込んだ。

「気がついた？ 気分は？」

「……あのととき」

「なに？」

「手術するのを止めてくれて、ありがとう」

賀来は泣き笑いのような顔になった。

「あの蝶の子供は、増えているかな……」

「増えてるよ、きっと」

ああ、いつもの。また以前のやさしい結城だ。わずかな時間で消える彼に、この発作のあとでだけ会える。

賀来は結城の手を握った。

「蝶が、増えてるといいね。また行こう、いつかあの温室に」

「うん」

答えた結城の目が、宙をさまよう。

「……あれが」

「何？」

「あれがもし夢だったら、僕たちは今どこにいたんだろう」

あれがもし……。現在の結城なら絶対にしない仮定だ。賀来は囁くように言う。

「今も島じゃないかな」

「高校もないのに？」

「あのまま魚を捕り続けて漁師になっていればいい」

「二人とも絶対無理だな」

結城は声を立てずに笑った。

「結城は頭がよすぎるから都会に出ただろうね」

「どこでもいい、ただ」

声が途切れた。

「これ以上、もう、誰も……」

賀来は絶句して結城の手を握り、次の言葉を待って、その瞳を見つめた。

長い沈黙の時間のあと、結城は天井を向いたまま、思いつめたように話しだした。

「賀来、今しか話せないことがある」

「なに？」

「大事なことから、ちゃんと聞いてほしい。いい？」

「ちゃんと聞くよ」

賀来は息を詰めるようにして結城の顔に見入った。

「僕に聞きたいことがあるだろ」

「……」

「疑問に思っていて、それでもどうしても聞けないことが」

「それは……」胸の動悸がいきなり激しくなる。

「あの写真に書いてあったことは本当だ」

胸を刺し貫くような痛みに、思わず賀来は目を閉じる。

「結城、……今はそのことは」

「それともう一人、君が思っている人物も、僕がやった。このわずかな時間しか、僕には後悔も反省も許されていない。元にかえる前に、君にしてほしいことがある。僕の心からの頼みだ、君にしか頼めない」

賀来は閉じたままの唇をただわななかせた。

「……どうすればいい？」

「僕をとめてほしい。今のままでいい」

結城は弱弱い力で、賀来の手を握り、澄んだ瞳を賀来に向けた。
「頼む。」

……もう、“ブルー”に、戻りたくない」

登校時間より一時間ほど遅れて学校に到着した秋葉は、バラ園のベンチで茫然と座っている人影を見て足を止めた。

こんな時間に呑気なやつだな。

近づいて、それが賀来だと知る。肩をゆすり、声をかけた。

「おい、どうした。気分でも悪いのか？ 結城とちゃんと話は出来たのか？」

「……」賀来は小さくつぶやく。

「……たほうが」

「なに？」

「死んだほうが、いいんだ」

「誰がだ？ しっかりしろよ、誤解は解けたぞ。昨日の話聞いてないのか？ オレたちの友情話を」

「あのままでもいいなら、もう、それしか……」

「なんだって？」

秋葉は空を見つめたままの賀来の肩を激しくゆさぶった。

「おい、結城はどこだ。今どこにいる！？」

「作業小屋……」

消え入りそうな声を背後に、秋葉は薔薇園脇の小屋に走った。

入口を開けると、結城が床に倒れている。傍らにはオレンジの枝。

手首からは夥しい血が流れ、近くに血に染まった作業用のナイフが落ちていた。

「結城！！」

秋葉は叫び声をあげた。

頬は真っ白で、紫色の唇には既に息が感じられない。手首の下には血だまりができている。

振り向くと、入口に賀来が立ちすくんでいる。

「救急車呼べ、今すぐ！」

賀来は茫然と二人を見たまま動かない。

「何してるんだ、呼吸してない、早く！」

体育の授業中の生徒が入口に集まり始め、座り込んだ賀来のをわきを抜けて幾人かが桑名と教師を呼びに走る。

「結城、結城、いっちゃだめだ！」

結城の耳元で叫ぶ秋葉の絶叫が校庭に響いた。

秋葉と桑名二人の人工呼吸で、救急車の到着より早く結城の呼吸は戻り、手首の傷も見た目より浅く済んだ。かなり力のない状態で切ったのが幸いしたと医師は言った。

賀来は当時の様子について、何を聞かれても茫然とした様子で覚えていないの一語を繰り返し、周囲を苛々させた。だがそれが芝居ではなく、本当に記憶していないらしいのは秋葉の目にも見て取れた。

「死んだほうがいい」

この独白を聞いたただ一人の人間である自分が黙っていれば、賀来には何の責任もない。だが、この記憶は秋葉の重荷になった。

「覚えていることだけでいいんだ。何か話せないか」

病院のデイルームで秋葉は表情をなくしたままの賀来に問いかけた。賀来は力なくつぶやく。

「何も……。発作が起きて小屋で介抱して、そのあとは……」

霧のように、そこで言葉も記憶も消えてしまう。

「結城の発作って何なんだ。結城があんな病気を持ってたなんて」

「あれは、……全部僕のせいだ」

それきり、賀来は黙りこんだ。

病室で目覚めた結城は、医者と教師の問いかけに、自分でやったとはつきり答えた。

「なぜそんなことを」という問いかけに

「その時はそんな気持ちになったんだろう」と、他人事のように答えて煙に巻く。

顔見せ程度に現れた村越神父を始め、進まない問答に諦めた尋問客たちが帰った後も、秋葉は結城の病室に居座り続けた。

「……お前ももう帰れよ」

夕日が差し込み始めた窓に顔を向けたまま結城は億劫そうに言う。
「帰れよじゃないだろ。自分が何したかわかってるのか。オレたちは友達だろう？　わかるように話せないものかな」

「自分でもわからないんだから、無理だ」

「お前、死にたかったのか？　……あの時は全然そんな風に見えなかったのに。あの写真のせいなのか、あれが原因で」

「あれとこれとは関係がない。お前のしたことと今回のことは別だ」
秋葉は茫然と結城を見ていたが、決心したように言った。

「もうこんなことはしてほしくない。オレにとっては君たち二人はとても大事な存在だ。意味もわからないままに命を捨てるようなまねはしないでくれ」

それだけいうと、後ろを向いて目を押さえた。

「……秋葉、ひとつ頼みごとがあるんだけど」

「なんだ」

突然話しかけられて、秋葉は緊張した。

「作業小屋の中にオレンジの枝が落ちてる。金の角のある蛹がついてるはずだから、瓶に入れておいて」

秋葉はあきれて言葉を失った。こんなときに、一体何の話を。

「なんだって？　お前頭大丈夫か、金色の角のさなぎ？」

「ビンに入れて網のふたをしてくれるだけでいい。後で渡してくれれば」

前髪をかきあげる右手首にはぶ厚い包帯があった。

「わかったよ、もう少し中身のある会話ができると思っただけに来たんだけどな」

秋葉はため息をつく。

「……映画もしばらくは延期だな。いや、ていうか、それどころじゃないかオレ」

「傷なんて大したことなかったし、発作は毎度のやつだから大袈裟に考えることはない。二、三日うちに退院するつもりだから、もうとつとと始めよう」

「え、いいのか」

秋葉の顔がぱっと明るくなる。

「いやなことはさっさと始めて終わらせるのが主義だ。おまえにはいろいろ迷惑もかけたし……」

それだけ言うとは結城は、眠い、とつぶやいて枕に頭を落としてシートをかぶった。

騒ぎばかり起こしている三人が、結局本当に集まって映画を撮り始めたという話で、学園は持ちきりになった。とくに最後のアクシデントが、殺しても死ななそうな結城の自殺未遂騒ぎとあって、教師も含めて学園中が、映画の制作過程と三人の関係の変化を息をのんで見守っていた。

脚本を読んだ結城の条件は三つ。自分のセリフは極力少なく、撮影は二週間以内で、そしてスリン神父は賀来がやること。

「僕が……」

事件以来めっきり無口になっていた賀来は、結城のこの申し出に久し振りに感情のある表情を見せた。驚愕と戸惑いと、正直な喜びの灯った表情を。

賀来の胸の内にどんな葛藤があるのかは分からない。ただ彼は、あの事件の後まったくその件に触れようとせず、その事実そのものから顔をそらしているように見えた。意図的なものなのか、自然にそうなってしまったのかは、秋葉の判断の外だった。

校内で集まると見物人が増えるので、ファミレスやコーヒーショップの片隅で集まることが増えていた。

「オレがやろうと思っていたのにさ。身長でいけばちょうどいいんだぜ、オレ結城より五センチは高いし」

秋葉はぼやいた。

「映し方でどうにでもなるだろ」

「だいたいヨアンナより十センチも低い神父ってありが」

結城がばらばら脚本をめくる。手首には白いスポーツサポーターのようなものを着けていた。

「ヨアンナのせりふをもっと減らして」

「削るだけ削ったよ。それ以上減らしたらサイレントになっちまう」

「こんなにぺらぺらしゃべってたら二週間で終わらない」

あれほどの事件のあとなのに、結城もまたまるで何事もなかったかのように淡々としているのが不思議と言えば不思議だった。結城と論争しながら、まっ白な顔で倒れていた彼を見たのは幻かとさえ秋葉は思う。この二人が語らない部分に何が隠されているのか、それを背後に置いたまま撮影をするのは、まるで薄氷を踏むような思っていた。

結局身長の問題はカメラワークで何とかすることになり、秋葉は衣装や小道具の準備に取り掛かった。財源は問題なく、ロケは学園と結城たちの教会を使えば済む。困難といえば、二週間という期間の短さだった。

「たった二週間なんて無茶じゃないかな」賀来がもったもなさ心配をする。

「そうでもないぜ、ロバート・ロドリゲスはレジェンド・オブ・メキシコを二週間で完成させた。入念なりハーサルと最新のデジタルカメラのおかげで」

最新のデジタルカメラはすぐに用意された。残る問題は人数の少なさ。

「ほとんどせりふのない修道女は親父の関係でオレの国の女がクラブで調達できる。後はあっという間に殺される役くらいだ、最初に俺に学校案内してくれた二人に頼んどくわ」

秋葉は了承も得ず、勝手にメモ帳に中条と竹之内の名前を書き足した。

他の二人と違い、一度読んだものは難なく頭に入る結城はあっという間にせりふを覚えた。一方読み合わせに向けて脚本を読むたび、賀来は文章の中に入って出て来られなくなり、イメージの中で遭難しては時間を食った。

ヨアンナを畏怖し、同時に聖女のように崇め、救済しようとして彼女の中の悪魔に呑み込まれそうになるスリン。悪魔に魅入られた聖女と僧侶の恋はけして許されない。彼女の心を知りながら、私に

はそれはかなえられないと背を向ける。だが、愛のあかしを立てることに彼は命をかける……

めまいのするような思いで、賀来意識がスリンに同調する。

秋葉はスリンが告解するユダヤ教のラビの役をやることになった。やがて三人の衣装が出来上がる。賀来も秋葉もそれぞれ僧侶の服を着ることに、たいして抵抗はなかったけれど、結城はひどく嫌がった。

「君が、演じることにしても女装するのにも抵抗が大いにあるのは分かったけど、決めたことなんだからやってもらわないと。やりにくい役に入り込むのにも、衣装は役立っていうぜ」

秋葉は言葉を選んで結城を説得した。結城は黙り込み、そしてぽつりといった。

「俺はヨアンナじゃない」

もう何回目か、村越神父は番号を押しあぐねて、握った受話器をもとに戻した。

今日、ペテロ学園の養護教諭の桑名から書留の手紙が届いた。内容に胸が凍り、親友の恩田に相談しようと試みるが、内容が内容だけに決心がつかない。

再び手紙を広げ、読み直す。

『……以前ご相談いただいた賀来君の様子を個人的にお伝えしたく、突然お手紙いたしました。』

結城君の入院から、突然授業中に眠りこむことが多くなり、保健室で話を聞きますと、いやな夢を見て眠れないとのことでした。

夢の内容を思い出せないというので、心得があることもあり、簡単な誘導催眠を試みました。やがて語ってくれたのが以下の内容です。

……親友を殺そうとする夢を見ました。

彼が発作で苦しんでいた時は、助けようと必死だった。でも、苦

しみがひと段落して話をしていた、過去のままの彼に戻った時、言われたんです。

僕は僕を止められない、君は僕から離れられない。僕はいずれ君をも利用してしまう。

それでいいと言いました。でも、彼はそれじゃ駄目だと言うんです。これからどんなことに君を巻き込むか分からない、僕は僕でいたい。言いたいことはわかるだろう。この意志のある間に、君の手助けが必要なんだ。

どんな手助けかと聞くと、傍の棚にあった作業用のナイフを取ってくれと言われました。

君が考えている人間二人、僕がこの手でやった。わかったらそれをこっちに。手伝えないならそのまま出て行ってくれ、それだけでいい。

彼の告白に打撃を受けたままぼんやり考えました。彼がそれを使ったらどうなるか？

……僕も死ねばいい。

そう考えた途端、何も悲劇でなくなりました。そうか、それですべての問題が消える。そう思ったとたん、あたりの現実感がなくなり、そうかこれは夢なんだと思い……

僕は絶対止める人間だと思っていた。なのに、壁から外したナイフを床に置いて、そのまま逃げ……

夢のラストは見るたび違う。おいて逃げる。手渡す。手伝う。手首を切る感覚が伝わってくる。ナイフを胸に向ける。僕は彼をどうしたいんだろう、どこまでやってしまうのか。次に夢を見たら止めようと思うのに、いつもそうできない。だって渡さないと、彼が綺麗な眼で責めるようにこちらを見つめるのをやめてくれない。もう眠りたくない、眠るのが怖い。

誰かに懺悔したい。僕は人殺しですと言いたい。誰に謝ったらいい

いんだろう。生きたい結城がいるはずだ、その彼に謝りたい、或いは誓いたい、もうやらないと。どうやったら……

賀来くんはそれきり何も言わず、しばらく眠りました。

おうちでこういうお話はしていませんか？

妄想とも相まって、彼の結城君に対する過剰な思いが、あの呼吸困難や一時的な記憶の障害をも引き起こしているような気がするのですが……

一度カウンセラーにご相談なさることをお勧めします』

神父はため息をついて手紙をたたんだ。

夢ならそれでいい、が、夢でないなら賀来の告白には、彼の保護者として無視できない内容が含まれていた。

君が考えている人間二人、ぼくがこの手で……

僕は人殺しですと言いたい……

自分が今、するべきことはいったい何なのか。最後の選択をしなければいけない時期が、目の前に迫っているのか。

（あなたは結城美智雄を間違った道から救いたいのか、それとも賀来祐太郎を結城美智雄から護りたいのか、どっちなんだ）

あの日結城に言われて凍りついたあの言葉が、血の出るような痛みを伴って、神父の胸に蘇った。

土曜日の夕方、翌日のミサに備えて、祭壇の上に置く花を選ぶのは日南の仕事だった。お花の先生をしている信者さんからいただいた秋の切り花を抱えて、聖堂の木の扉に手をかける。と、脇の張り紙に気がついた。

「撮影のため午後四時から入室禁止」

そういえば賀来さんと結城さんともう一人背の高い人が最近よく集まっている。映画を撮るとかいつていたけど、もう始まったのかな。

四時まであと十分。ドアの隙間からのぞくとひと気はなく、日南はこの隙にと入り込み、花瓶に水差しから水を入れて花を生けた。と、階段を下りて来る足音に振り向く。

入口右の階段から、見たこともない真っ白な尼僧服を着た背の高いシスターが、壁に長い影を落としてうつむきながら階段を下りてくる。現実感のないその姿に、まるで幽霊を見たかのような恐怖を感じて日南は花瓶を滑らせた。

「あ」

派手な音を立てて花瓶は砕け、花は飛散した。白い顔をあげたシスターは、薄闇でよく見えないけれど、古い映画に出て来るような優雅な美しい顔立ちだと思った。

黙って歩いてきて、日南の横に膝をつき、細い指でかけらを拾う。

「いいんです、素手だとお怪我なさいます、箒で掃き集めますから」
日南はあわてて止めた。かけらの一つをつまんで、その切っ先を眺め、何か考えているように見える。日南が差し出した塵取りにそれを乗せると、茶色い瞳をあげて言った。

「もういいから、ここには入らないで」

「えっ」低い声に驚いて声をあげると

「結城！」

ドアから神父姿の賀来と、秋葉が入ってきた。結城は顔をそむけた。

「似合ってるじゃないか、というか、顔見せろよ」秋葉ははしゃぐ。
「さっきメイクしたところはもう見たし。プロの特別出張だからうまかったろ」

日南は仰天した。全く結城に見えなかったのだ。

「ええっ、あんまりきれいだから私本物の女の人だと思いました！」

「かわいいなあ。きみ誰？ 映画に出ないか」

秋葉がうれしそうに日南に声をかける。

「駄目だ」シスター姿の結城がぴしゃりと言う。

「なんでだよ、ただでさえ人員少ないのに」

「駄目なものは駄目だ」

「あの、私出たいなんて言っていないですから」日南が顔の前で両手を振る。

「なんで決定権がそっちにあるんだよ、監督はオレなのに」秋葉はぼやく。

……結城はこの映画を覆う空気を、外部に揺らされない、閉じられた世界のものにしたいんじゃないか。賀来は結城の強い拒否に、はじめて映画に向ける結城の意志を見た思いがしていた。

顔の輪郭を覆う白い布に縁どられた結城の顔は、通った鼻筋に白い頬、睫毛が深い影を瞳に落とし、よくできた彫刻のように性別のない美しさだった。日南が出て行ったあと、秋葉はしばらく結城を祭壇の横に立たせ、無言で眺めた。そののち脚本ノートを開いていろいろ書き足し、早くも今日のシーンの変更を始めた。

結城は窓辺に寄り添い、幾何学模様のレストランを見上げている。堂内の聖母子像のように、結城の周りは空気が動かない。白一色ということもあって、体にうつすらと窓の色を映した結城は、まるで大理石でできた彫像のようにも見える。賀来は結城を、もう何年も昔からカテドラルの空気の中だけに生きてきた孤独な女性のように思ひなし、胸を打たれていた。

秋葉は最初に試し撮りするシーンを説明した。今の結城と賀来で、どうしてもこれを撮りたい。ラスト近く、スリンが罪を犯し、それをヨアンナの足元で懺悔するシーン。秋葉のオリジナルだった。

「せりふを正確に言うより、自然さを優先して。気分で賀来のオリジナルが入ったっていい。特に演技しようとはせず君の気持のままで普通にしゃべって」

秋葉は賀来にさういふと、短いシーンのテストを撮影し始めた。木製の寄木細工のような壁に掛けられた木の十字架の前に、ヨアンナは一輪の白百合のように立つ。その足元に跪いて、賀来はなにかとても敬虔な気持ちでいた。聖女のような尼僧姿の結城と、神に仕える自分。この瞬間が、まるで遠い過去から約束されていたよ

うな気がする。

ヨアンナのつま先に口づけると、黒い僧侶服から、結城のロザリオが床の上にこぼれた。

「私の犯した罪を知ってもらいたいのです。神のためでなく、悪魔のためでなく、ただ愛のために犯した許されない罪を」

賀来の静かな物言いは普段からだったが、極限の思いを込めた言葉に魂が宿っているのが秋葉にもわかる。

「どうかわかってください。ただ愛のために、それだけのために、私は罪を犯しました。その咎で命を神にささげるのに悔いはありません。愛のためにしたことだと、どうかそれだけわかってください」
口元からこぼれる自分の言葉に、自分の今の魂がそのまま乗っていくようで、賀来はこみ上げる何かに全身を震わせていた。

ヨアンナは手を伸べて、スリンの頭の上に置いた。スリンはゆっくり顔を上げる。

ヨアンナの美しい横顔に、かすかな、そして十分な笑顔が浮かぶ。スリンは震えながらヨアンナの手を取り、その上に静かに顔を伏せた。

秋葉はシーンの最後まで、ほとんど呼吸することを忘れていた。

「結局、自殺さわぎの原因は何だったのかわかったのか」

ゴルフクラブを磨く父親の問いに、居間で映像をチェックしながら秋葉は答える。

「全然。二人ともお互い自覚してるのかしてないのか、それすらわからない」

「そんな状態で撮影もやりにくいだろう」
「かえっていいかも」

秋葉は父親に、カメラテストも兼ねて撮りためたいくつかの静止画像を見せた。

「これが彼か？ モノクロのせいかな、絵のようだな」

結城の扮する修道女の足元に跪く賀来。手をとってくちづけする

賀来……

「彼らが何も語らず自覚しない分、ここにその部分が集約されてくれればそれでいい。撮っていて思ったんだけど、オレは映画を撮りたいんじゃない、この二人を刻印したかったのかもしれない、オレの記憶と映像の中に」

「刻印？」

「二人をそれぞれ追っていて、思ったんだ。あの物語の中に二人をとどめたい。そして残したい、オレの目を通した二人の物語を。オレの永遠として」

「……お前の永遠か」

ロペス氏は壁のモルフオ蝶の標本の額を眺めながらつぶやくと、テーブルに置いた小箱から蝶のキーホルダーを取り出した。

「これを明日、あの二人に渡せ」

「おやじ、こんなのいつ用意したんだ」

秋葉は鮮やかなオレンジ色に光る七宝の蝶を手にとった。

「南米出身としてはモルフオといきたいところだが、ミチオが保管を頼んだというあの蛹は南国のオレンジの蝶だというからな。こっちの方が喜んでもらえるだろう」

「結城がキーホルダーなんか身につけるかな」

「私の愛と祈りが込められていると言え。それと、しばらくS町界限には近寄らないほうがいい、特にミチオ」

「なぜ」

「S町で喧嘩していたミチオの相手のうち一人、ヨージが死亡したらしい」

「……！」

「さんざん頭をたたきつけられてもともと瀕死だったそうだが、まあ恨みと利害がらみで身边がきな臭くなりそうだ。私が肩入れしている組と旧勢力も抗争の兆しがあるし、明日どうやら相手側に葉の一斉摘発が入るらしい。身の置き所を失っているチンピラどもが少ない身入りを狙ってミチオのブツを狙いそうだ」

「あの、ただの噂とか言ってた……」

「まあ私にはあまり関係のない話だが、とにかく気をつけるよう言ってくれ」

身を隠せと言えば出てきて戦いたがるタイプだ。

……俺はヨアンナじゃない。結城の言葉を思い出しながら、秋葉は掌のなかの蝶を握りしめていた。

>i7917—1094<

たった三人という人数での映画製作は容易ではなく、賀来はほとんどの時間を雑用に追いまわされていた。小道具の調達、ロケ地の下見と交渉、秋葉のつてで修道女役を頼んだ南米女性たちとの折衝。「昨日なんて行った先がキャバクラだよ。衣装合わせに行ったんだけど、このまま接客するとか修道女服着たまま大騒ぎで」

ロザリオ等の小道具に使うビーズやガラス玉の置いてある手芸店の棚をめぐりながら、賀来は結城に愚痴った。

「一番向いてない仕事だな」

「そう思うなら一緒に来てほしいよ。あれ、何か来た」ポケットを探り、オレンジの蝶のついた携帯を取り出す。

「携帯なんか持ってたか？」

「昨日の衣装合わせの時、ナナさんて人に渡されたんだ。ロペス氏から、連絡用に必要だからと預かってたって」

「至れりつくせりだな」

賀来は読みにくそうに画面を見た。

「まだよく使い方がわからなくて。メールは見られるけど送るのは……」

「で、なんだって」

「ナナさんだ。衣装のサイズ直しが終わったから取りに来てほしいって」

「店はこちらから遠いのか」

「なんか、近くまで店の車回してくれらしい。結城も来てよ」

「そんな連中に混ざりたくない、俺は今日買ったもの持って帰るよ」「ずるいな」

結城は賀来から買い物の袋を受け取った。

「昨日もらった蝶か、それ」

賀来の携帯のストラップを見ながらいう。

「結城はどうしたの、あれ」

「俺の部屋の瓶の蛹が寂しそうなんで、突っ込んどいた」

「どうせそんな事だろうと思った」

真由美が死んでから、二人はそれぞれ別の部屋に移っていた。

「じゃ、車が来るところまで歩いて行くから。次からは来てよ」

「断っとく」

軽口をたたきながら二人は別れた。思えば、映画製作という一つの目的がなければ、あんなことがあった後もこんな風に普通に賀来と口をきくのは難しかっただろう。秋葉というのは妙な存在だと、改めて結城は思う。

不意に肩が叩かれた。秋葉が原稿の袋とファイルを持って立っている。

「脚本直しが長引いちゃって。賀来は」

「昨日のキャバクラに行ったよ。S町じゃないからいいだろ。小道具の買い物は終わった」

「彼だけ？」

「珍しく携帯の呼び出しで。ナナさんて人からおやじさん提供の携帯をもらったっていわれて」

「ナナ？」

秋葉は首をかしげた。

「そんな名前は聞いたことがないぞ。ちょっと待て、父に電話で聞いてみる」

結城の胸に一気にどす黒い予感がこみ上げた。まさか……

「そんな女はいないって。携帯も渡してない。結城、賀来はどこへ行くって」

緊迫した声に、一気に血が凍る。

「その女の手と一緒に……」

車！ 口にしながら言い知れぬ恐怖に襲われる。すでにどこへ向かっているか、見当もつかない。

「彼は蝶のキーホルダーは身につけてたか」

「携帯につけてた」

「ならいい、GPS機能がついてる。ちょっと待て」

その時ほど結城はロペス氏に感謝したことはなかった。

「行き先はH埠頭のB倉庫らしい。こっちが動くからお前は控えてろ、父に任せて」

「病人のお前こそ家にいろ、また鼻血出されたら迷惑だ。パパの大事な宝ものなんだろう」

結城はもう手をあげてタクシーを止めようとしていた。

「ああ、もう」

秋葉は決心したようにジャケットの内側から黒い塊を取り出し、結城の腕を掴んだ。

「これが何だかわかるな。持ってけ」

「……」

その形状から中身が何であるかは明白だった。結城はにっと笑うと受け取って

「すごいもの携帯してるんだな。感謝するよ」

ズボンの内側に無理やりねじ込むとタクシーを止める。

「幸運を祈っててくれ」

「……それしかないよ」

あっという間にタクシーは視界から消えていく。

オレが後生大事にしている命の灯火をたやすく路上に投げつけるような結城の生き方、あれが賀来のヨアンナか。秋葉は彼を追えないだるい体に舌打ちしながら、全身から湧き上がる冷たい汗に身震いして壁に寄り掛かった。

カビ臭い暗闇で箱と箱の間で目覚めたとき、賀来は自分の状況が全く分からなかった。わかったのは手足が拘束されていることと、自分がまたへまをしたらしいということくらいだ。迎えの車に乗り、出されたコーヒーを飲んで、後は……

「自宅には連絡が取れないぜ、ずっと留守だ」

「携帯の番号は」

「最近変えたみたいだ、知ってるやつでは繋がらない」

声のする方を見上げた賀来と、細身で明るい髪をした三人のチンピラ風の男と目が合った。一人が笑いながら目の前にしゃがみ込む。「丁度良かった坊ちゃん、ききたいことがあったんだ」

充血した目と黄色い歯。薄い革のジャケットのあちこちが擦り切れている。

「君の美人の親友くんの携帯番号教えてくれないかな」

「……君たちは」

「お前のダチが殺したヨージのツレさ」

殺した……。また増えた。心の中で冷たい溜息をつく。

「お前はただの餌だ。ヤツを以前飼ってた男が、色狂いの拳句クソヤバイ薬と、それから金を組から結城に流してたんだよ。その行方を握るカギさえ渡してもらえばいい。それでも下っ端にとっちゃ大事な仕事なんだ、中途半端に済ますわけにはいかないんでね」

木崎の……。

彼に対する怒りと不快感がこみ上げる。結城が木崎を殺したというのが真実であることに、自分でも驚くことに心中ほとんど抵抗がなかったのだ。ともかく自分の役目はひとつ、結城の足手まといにならないこと。

「知らないし、知ってても言う気もない」

「お、結構突っ張るな。それならそれでいろいろと楽しめるぜ」

男の一人がCD-Rのようなものをひらひらさせた。

「結城ほど肝が太いかどうか、同様の目にあわせて試してやろうか」

「……！」

あれは、あの写真の？　こいつらが持っていたのか。学園に送ってきたのも……。

「おっさんがなじみを追い出し始めたところに、土産として勝手にいただいたというよかったぜ。結構使えるし」

賀来は顔をそむけた。

「好きにすれば」

「そんなこと言って後悔しないのか」

結城が踏んできた道なら、自分も踏まなくてはならない。ステンドグラスを見上げていた彼の姿がなぜか脳裏に浮かんだ。

「たかが番号を言えればいいんだぜ？ 言えれば地獄を見ないで済む」
「……」

ジャックナイフを弄んでいた男が、いきなり賀来の襟首をつかむと、縦に刃を入れて切り飛ばした。ボタンが飛び、首が引っ張られる。はじめて生身に感じる刃物の恐怖。

「まだ行くか？」

「もう面倒だ、あれ使え」

いきなり髪をつかまされると地面に引き倒され、押さえつけられたまま首筋に何か針のようなものが刺されるのがわかった。

「大丈夫かこれ」

「まあ実験だってことで」

近づく。一步また一步、君のもとへ。こうして暗い階段を登って、いつか君の立つその足元へ。目の裏に渦が巻き始め、その中に巻き込まれるように、賀来は目を閉じた。

突然下から叫び声が響いた。三人は手すりから下を覗く。

「どうした、何があった？」

倉庫の入り口の扉が開いており、見張りの姿が見えない。

一人が懐中電灯を取り出し、ナイフ片手にそろそろと踊り場まで降りて下を覗く。

次の瞬間、踊り場の手すりの外側から延びた手に襟首をつかまれたと思うと、あっという間もなく逆さになり、男は転落していった。入れ換わりに、手すりを越えて細い体が躍り込むように踊り場に飛び移る。

「ブルー……」

段上で立ち竦む二人に、結城は手にした粉を小さな袋ごと投げつけた。身をかわしながら二人が激しく咳き込む。

「餓鬼が火薬庫で誘拐ごっこか、全面戦争でもしたいのか」

結城は銃を取り出すと二人の足元に向けた。

「やめ、やめろ、引火して爆発する」

二人は叫び声をあげた。

「だからドンぱちできないってのを逆手に取るつもりだったんだろ？ 生憎俺はどっちでもいいのさ。いらいらさせると本当に撃つぞ」

結城は撃鉄を起こした。二人は悲鳴を上げた。

「わかったからやめてくれ」

「腹ばいになって手を頭の後ろで組め」

這いつくばった二人の背後に呼びかける。

「賀来いるか？ 出てこられるなら自分で出て来い」

返事はない。結城は階段をゆっくり上った。二人の背後に倒れている賀来が見える。結城は跪いて賀来の息を確かめ、ほっと息をついた。首に赤い注射の跡が見える。結城は唇をかむと、立ち上がりざまに二人の脇腹と背中をしたたかに蹴飛ばした。足元にディスクが見える。何なのか見た途端に見当がついた。

拾いあげると、転がってうめき声をあげる二人に銃口を向ける。

「やめ、やめろ、頼む」

「写真だな。これのスペアは」

「ない、本当はない」

ひきつったような悲鳴に余計に神経を逆撫でされ、引き金にかけた指に力を入れた時、足首を何かに掴まれた。振りかえると、反応のなかった賀来が微かに首をあげて結城の足をつかんでいる。

「だめ……」

懸命なかすれ声に結城は間をおいて銃を下した。

「……わかったよ」

再び二人に向き直り、いきなり顔面を続けざまに蹴り飛ばした。悲鳴と同時に歯の折れる音がする。壁にかかっていた荒縄で、血まみれの二人の手を後ろに縛り上げた。踏みつけて割ったディスクを二人の背中に放り投げる。

「賀来行くぞ。歩けるか、少しは」

「……しら、ない、なにも」

何やら口の中でブツブツ言っている賀来を抱えるようにして、片手を自分の肩に回し、声をかけながら階段を降りる。

不意に賀来が身をよじって暴れ始めた。

「いけない、行かない、そっちは崖が」

「大人しくしろ、階段から落ちるぞ」

次の瞬間、階下から銃声が響き、二人のすぐそばの手すりに跳ね返って火花を上げた。また一発。結城はとっさに背をかがめ、とたんにバランスを失って賀来を抱えるように階下まで転げ落ちた。

目をあげると、額から血を流した見張り役がよろよろと目の前で銃を構えている。

「……ヨージを殺しやがって」

足をひねって立てないのが自分でもわかる。眼前に突きつけられた銃の引き金に男が手をかける。デッド・エンド、これで終わりか。結城は目をそらさずに男の血走った目を見つめた。男に若干の戸惑いが見えた。

倉庫に銃声が響きわたる。反響がやみ、自分の体のどこも傷ついていないのを確認すると、結城は身を起こした。胸から血を流し、目の前に見張り役が倒れている。振り向くと、背後で賀来が結城の銃を握っていた。銃口から細い煙が上がっている。

「……賀来」

賀来は焦点の定まらない目をしてただ前を見つめ、そして銃を下ろした。

結城は銃を受け取ると、黙って男の頭に一発撃ち込んだ。

賀来の視線を遮るように頭を抱え、静かな声でささやく。

「何も見るな、もう終わった、みんな。撃ったのは俺だ。わかるか？」

背後で爆発音が聞こえた。さっきの火花が引火した袋が燃え上がっている。

「出るぞ」

賀来を抱えると、不自由な足を引きずって出口へ向かう。その時、倉庫の入り口からふたつの人影が飛び込んできた。

「結城、賀来！」

秋葉とあの喧嘩の時に見たサングラスの大男だ。

「ここだ」手を上げて答える。

サングラスは賀来をひょいと抱え、結城の腕を掴んだ。

「俺は自分で歩ける」

「足をやられたか？ 俺につかまれ」

秋葉は結城に肩を貸し、外に止めてある車までもつれるように急いだ。

背後で何度も爆発音が上がる。結城は言った。

「このままじゃでかいことになる、消防呼んだ方がいいんじゃないか」

「もう呼んだ」

秋葉は窓を閉めた。すでに遠くにサイレンが聞こえる。車はフルスピードで埠頭の倉庫街を駆け抜けた。

「人がいる、降りる！あの倉庫にまだ」

賀来が暴れ始めた。

「もう無駄だよ」

「降ろせ、火を見なくちゃ、火の中に落ち物が、蛹が」

「賀来はどうしたんだ」

秋葉が心配そうに言う。

「何か薬を打たれてるらしい。自白剤か幻覚剤か」

ついでに今の記憶を全部消してくれるならどんなにありがたいか。結城は祈る思いだった。

「さて、彼をどうするかだな」

秋葉は行き先を考えあぐねているようだった。結城はいった。

「いろいろありがとう、感謝してるよ。行きたいところがあるんで、言う通りの住所に降ろしてくれないかな」

車は夜の街を走り、倉庫や工場や団地が並ぶさびれた町のひと気のないマンションの前で止まった。

「ここでもいいのか？」

「悪いけど上まで手伝ってくれ、秋葉はいい、そのでっかいの」
ひと気のないマンションの三階まで、サングラスと運転手に手伝ってもらって賀来を運び上げる。ドアの前で、結城は賀来を受け取った。

「本当に大丈夫なのか」秋葉が心配そうに聞く。

「まあ、一晚経てば正氣に戻るだろう。今夜はここで俺が面倒みるから」

秋葉は二人を交互に見た。

「今日は日曜だし。ゆっくり休んで、せめて来週中には映画の続きが撮れるようにまで回復させてくれ」

……神経の太さだけは親父譲りだな。結城は苦笑いした。

手を挙げて背を向ける秋葉を見送ると、結城は鈍色のカギを差し込んだ。

木崎がくれたカギ、で開けた箱の中のものの、ひとつ……

室内は、長い主の不在に空気がどんよりと籠り、電気も切れてるので灯りひとつつかない。結城は唯一の家具であるベッドの上に賀来を寝かせると、一度来た時に買っておいたシャツと毛布を物入れから出して彼の上に掛けた。

カーテンを開けて、せめて街路灯の灯りを入れる。

「何もないし、下の自販機で飲み物買ってくるよ。一晚だけここで過ごそう」

賀来に声をかけると、小さな声が返ってきた。

「……もう駄目だ」

「なにが」

「駄目だ、なにもかも。もう、僕は、……さっき」

「何も駄目じゃない。お前は何もしてない。覚えてるだろ、撃ったのは俺だ」

賀来は突然、結城の両腕を掴み、そして絶叫した。

「もういい！もう殺してくれ、僕を」

「賀来……」

「もう生きられない」

結城は声もなく、絶望に震える賀来を見下ろした。

ひとは、ふつう、こんなふうなのか。他人の命に手をかけたただけで、崩壊しようとする賀来のうつくしくてひ弱な魂。自分とのものは遥かな距離。

賀来の背中を抱いたまま、結城は静かな声で言った。

「お前はしくじったんだ」

「……？」

「俺という限り、こんなことの繰り返しだ。あのとき、あのバラ園の小屋の中で、お前がちゃんと手を添えてくれていたら、すべては終わっていた」

賀来が目が驚きに見開かれる。

「俺は死にたかったんじゃない。お前にちゃんと選ぶ権利を与えたかった。俺のいない未来を。……どうしてそうしなかった」

賀来は身を離し、黙って結城の顔に見入る。

突然手を振り払うと、飛びつくように激しい平手打ちを結城の顔に浴びせた。

「二度というな！」

続けて何か言おうとして、次の言葉が出てこない。

「僕が、どんな、どんな、お、思いで、いままで」

嗚咽で言葉にならず、頬を真っ赤に紅潮させてただぼろぼろと涙を流す賀来を見つめ、結城は頬を押さえながら向き直った。

「……選んでほしかった」

「ふざけるな、お前なんか。選ばばよかった、そう言えばいいのか、畜生」

普段の賀来とは思えない激しい言葉が続く。

「賀来」

「うるさい、黙れ、馬鹿！　もう聞きたくない」賀来は後ろを向いて叫んだ。

賀来 of 肩をつかむとこちらを向かせ、いきなり結城は強引に自分の唇を重ねる。もがきほどうとする賀来 of 腕を押さえつけ、体の抵抗を封じた。

記憶にないくらいの熱く激しいキスに、賀来 of 全身の機能が止まる。

結城は身を離し、口もきけない賀来に、子供に語るような優しい声で囁いた。

「“おまじないだよ、賀来。僕が一つキスするたび、君はひとつきれになる”」

賀来は声を失ったまま、茫然と結城を見た。発作の後を除けば、もう何年も聞いていなかった結城の優しい声、柔らかな表情。何か言おうとして開けた口からは、ひきつるような呼吸しか漏れない。視界に膨れ上がり、目尻からこぼれる涙を、結城の指が下からそっと拭う。

次の瞬間、狂気と呼べる何かが二人の間で炸裂したように、またはるかな過去から予定された運命が時を得てごく自然に流れ込んだように、ふたりは抱きあってベッドに倒れた。

結城は賀来を自分の身の内に隠そうとし、賀来は結城という流れにのみ込まれるのを望み、互いが自分を消そうとするように渾身の力でしがみつき、ただ相手の存在を求めあう。

悲しみの上にまた悲しみが、悲劇と諦めと望みと高揚、そして絶望が繰り返し積み重ねられ、もう全体がどんな色かわからない。賀来 of 脳裏に瑪瑙の断面のような複雑な色の虹がかかり、やがて結城の存在で体が満たされてゆく喜びと苦しみの中に、すべてが溶けてゆく。

青白い月灯りと街路灯だけが照らす部屋に、お互いが初めて聞く相手の声と息遣いが響く。孤独なつがいの獣のように、ふたつの若い体が闇の中に踊りながら沈んでいった。

何も考えたくない、もう、何も……

倉庫の火災はすんでのところで大火災となるのを免れたが、焼け跡から若い男性の黒こげの遺体が三つ出てきたことでかなり大きく報道された。評判の良くない遺体たちの火薬あそびが原因というのが一応の推測だった。

結城が神父に頼んだ睡眠剤で賀来は二日眠り続け、目覚めてからは何ひとつ事件のことを語らなかった。

ときどきそうなるようにまた記憶の一部を抹消したのか、それとも押さえこんで無視しているのか、それは見ている結城にもわからない。ただ生き抜くために、とりあえず生きてゆくために、賀来の内の何かが、記憶の分解と再構築をしている気配があった。

自分について来るために、賀来の心が懸命に手に入れ続ける機能。賀来の冷静な無表情を見るたびに、結城の胸に鈍い痛みが走る。

お前はしくじったんだ、賀来……

二人で一晩家を空けた事実、二人が何も語ろうとしないこと、賀来の異常。そっくり前と同じだ。そして火薬と煙の臭いのする二人の衣服、それぞれの顔についた傷。神父の中では辛い決断へ向けての秒読みが始まっていた。

二人には話していないが、自分は来月で教区を離れることになっている。次にここをお任せすることになる恩田神父に、結城はもう、渡せない。

自室のデスクに向かい、聖書を前に、神父は組んだ手に口ザリオをかけ、俯いたまま額をつけた。

初めて島で二人を見たときの映像が蘇る。餓鬼のように痩せて、賀来をかばうように背後に隠していた結城。二人を守ると誓った日々。

……あなたは結城美智雄を救いたいのか、賀来祐太郎を結城美智

雄から護りたいのか？

結城の問いは的を射ている。主の御前で告白するならば、もう自分は結城を救えるなどとは思っていない。正直、彼が恐ろしい。何か質問するだけでこちらを射てくるあの冷ややかな視線、賀来をはさんで自分に向けて来る殺気に近い何か。既に自分が太刀打ちできないレベルに達している結城を、主の御手にゆだねるのは卑怯であろうか。

主よ、結城の荒らぶる魂に導きを、そして、賀来の身に平安を。どうか私の弱さを許し、そして力をお与えください……

学園祭が近付くにつれて、秋葉の様子はみるみる悪い方に変化していた。顔色は悪くやせ細り、しばしば熱を出して学校を休む。映画の撮影と、完成に向けての情熱が今や彼を支えているといっても過言ではなかった。

延期していた撮影は、結城の足の回復を待つて、異様な緊張の中で再開された。シーンは撮れるものから順不同で撮られていく。原作にも既存の映画にもないオリジナルのシーンが毎日次々と追加される。

現場で脚本を読んだ賀来は、ある日、その日の撮影のシーンに絶句した。

「これ、本当にやるの」

「技術がないからCGとはいかないんだ」

「だって……」

「以前ならともかく、今の君たちならやれるだろ」

賀来は思わず秋葉を見た。今の僕たち？

見たことがないほど厳しい表情をしている秋葉に、言おうとした言葉を引っ込める。

「スリンがヨアンナの中の悪魔を追いつと鞭で打つシーン。ワシカッで撮るつもりなんで、場面をつなげない。軽いほうなんだけど一応本物の鞭を使う。これじゃないと一発で傷がつかない。悪

いな」

「痛い目に遭うのは慣れてる」

結城はあっさりと言った。賀来の中で苦みを伴った記憶が明滅する。

秋葉が革の鞭を取り出して賀来に渡す。

「本気でやらないとNGもんだぞ。いいか、思い切り三回打つんだ。傷がつかないと次のシーンにつなげない。結城のためにも一発OKで」

秋葉はもしかして、役を取られたことで僕を恨んでるのじゃないか。賀来は出会って初めて本気で秋葉を恨んだ。……これじゃ、まるで、自分はいつだ。思い出したくない写真が脳裏に浮かぶ。僕はいつになり変わるのか、これはなにかの罠か。

すでにヨアンナの衣装を着た結城は、脱ぎやすいように着脱テープで留められた部分をはがし、後ろを向いて上半身を晒した。白い背中に、うっすらと古い傷があるのを賀来は認めて、思わず目を伏せる。

「スタート」

結城の白い背中を前に、急に呼吸が上がり顔が紅潮するのを賀来は自覚した。僕は今誰だ？ スリンならば、その気持ちの中心は祈りでなくてはならない。

息を止めて鞭を振り上げ、ごめん、と謝りながら一瞬の力を込めて結城の背中に振りおろす。破裂音に似た音が鳴り、声を上げないまま結城の頭がかすかにのけぞった。もう一回。その上からさらに思い切りもう一回。微かな溜息ともとれる細い声を聞いた気がする。結城はベールに横顔を隠しながらゆっくりと俯いた。

鞭を置くと跪き、みるみる染まってゆく背中の中の桃色の傷に指を這わせる。静かに顔を近づけると、軽い眩暈を覚えながら、脚本通り賀来は結城の背中に接吻した。自分の唇より、染まってゆく結城の背中の中の傷のほうが熱い。切ない甘い香りが背中から汗ごと立ち上る。そっと伸ばした舌の先に、かすかな血の味がした。

ああ、僕は彼に恋している。この香りにも、その肌にも、この傷にも、その犠牲にも、神様、彼の全てに。

この傷は刻印だ、僕は自分の罪と秘密を君に刻んだのだ。無言で僕の苦しみを引き受け続ける、その背中の沈黙に僕はついてゆく。たとえ、行く先が地獄であろうとも……

唐突に激しい衝動が溢れだし、背中にすがりつきたくなる気持ちと涙を、賀来は懸命にこらえていた。

斜めに差し込む日がセピア色に染める聖堂の中で、完璧な横顔を見せながらうつむくヨアンナと、背中に頬を寄せるスリン。目の前の光景は、秋葉の中で結晶のように完璧な均衡を作りだし、閉じられた世界はその瞬間、真実の光に静かに満たされていた。

弱った心臓に押し出され自分の全身を流れる血の音を聞きながら、秋葉は宝をそっと箱に仕舞うように、一つひとつの瞬間をカメラに収めてゆく。結城が大人しくここまで付き合ってくれているのが奇跡のようだ。そして、驚くほど演技に集中している賀来も。

二人が互いの抱える問題を露出せず、静かに作品に向かってるのがありがたかった。彼らの姿勢に自分も報いねばならない。秋葉はひたすら祈り続けた。オレの体よ、もってくれ。あとわずか、ほんのちよつと。

学園祭当日、秋葉監督の「尼僧ヨアンナ」の上映会場は超満員だった。

どんな宣伝にも増して、話題の三人の巻き起こした事件と結城の女装が客の好奇心を煽った結果だった。結城と賀来の関係、秋葉への暴力沙汰の噂、そして結城の自殺未遂。教師までが早い時間から会場の良席に陣取っていた。

その中で一番目立っていたのが秋葉父だった。ラテン系の大男をそばに従え、葉巻をくわえようとして係員におずおずと注意され、鼻歌を歌いながら髭をいじっては貧乏ゆすりをする。

「来るなって言ったのに」

控室のカーテンを開けながら秋葉がつぶやく。

「結城は。また行方不明になりやがって」

「見たくないとか言ってさっき出ていったけど」賀来が答える。ぎりぎりまで撮りためたシーンを考えると、正直自分もここに居たくはなかった。

「ま、……無理もないか」

上映開始のベルが鳴る。秋葉は会場の灯りを落とした。秋葉の声で、ストーリーの概要と原典が簡単に紹介される。秋葉の弾く淡々としたピアノの単音の旋律が流れ、やがて真っ黒なスクリーンに、修道女の白い美しい横顔が浮き上がった。

ほう、と会場から声にならないため息が漏れる。

ヨアンナは心持ち上を向くと、細い声で語り始める。

「私の中には八人の悪魔がいるのです。私は何をしたというのでしょうか？ 私は神に仕え、神の名を呼び、神の意のままに生きるためにここにいます。私の中の悪魔に命じてください。ヨアンナから去れと。どうか私を元の私に戻してください」

ピアノの音が心持ち大きくなり、暗転したスクリーンに、M A T K A J O A N N A の白い文字が映し出される。

聞いたこともない結城の高い声。この世のものではないような無機質的な美貌の残像。会場は感嘆の声とともにざわついた。

校舎脇の人目につかないベンチに座り、結城は作業小屋を遠くに見やっていた。

校内外からの客でごった返している校内が、いつもと全然違った場所に思える。そんなに日にちがたったわけでもないのに、あの日が遠い昔のようだ。人の何倍ものスピードで、自分の周りだけ奔流のように時が流れているような思いがする。

ふと、職員棟から出てこちらへ向かう村越と校長が目に入る。滅多に学校に來ない村越が何の用で？ 顔を伏せた結城の耳に、かなかな会話が聞こえてきた。

……では、結城君だけ？

できれば、転校……

住まいの方は。寮のあるいい学校が。……地方都市ですが。

恩田神父の方にも頼んで……とにかく二人を離す……

会話の最後に、場合によっては警察に相談、という会話がかすかに混じる。

結城は表情を隠すように顔を覆っていた左手の中でぎゅっと目を閉じた。

真昼の光が瞼の裏で乱反射し、散り散りの星となってゆっくりと視界に溶けて行った。

映画は中盤に差し掛かっていた。修道女らは悪魔を払うスリン神父の祈りをあざ笑うかのようにスカートを広げて踊り狂い、ヨアンナは悪魔を身の内に宿して時に狂気のように暴れまわる。

「愛で自らが満たされるように、自分のどこにも悪の隠れ家がなく
なるようにしなさい。子供のように善良に、爛漫におなりなさい。

神はあなたを愛しておられる」スリンは動物のようにうずくまるヨアンナの前で十字を切る。

「あなたの前任者はわたくしにしたことが原因で地獄に落ちました。
それは私の罪でしょうか？」

動物のような無垢な瞳で、うずくまったまま小猾くヨアンナは尋ねる。

「それはあなたの良心に尋ねることです。彼が無実なら悲劇ではあるが……」

「無実ですって？ 無実ですって？」ヨアンナは神父に笑い返す。

「あの人が私にどんな恐ろしいことをしてきたか。あの忌まわしいことをすっかりお話しできたら、いいえ、信じられないことかもしれませんが、あなたは知らなければなりません。私はすっかりお話しするつもりです。そしてあなたは私を救わねばなりません、神が私を突き落とした、この孤独の深淵から」

「ヨアンナ、いつでも話を聞こう。身の内の悪魔の誘いに負けてはならぬ」

「一番恐ろしいのは」

ヨアンナはスリンを斜めに見ながら言う。

「私が悪魔に惹かれているということですよ。こういうめぐりあわせになったというのを、私は喜んでいるのです。悪魔たちがほかの誰でもなく私を選んで苦しめることが、私は誇らしいのです」

「……まさか、お前が悪魔を呼んでいるのか」

「私は自ら魂の扉を開けました。道を作らねば、彼らは入って来れません」

ヨアンナと神父は無言で対峙した。

「ヨアンナ、道を閉じなさい。あなたの魂はあなたが守るのだ！」

ヨアンナは鋭い視線で神父を眺め、突如裾をたくしあげて白い足を見せる。驚く神父の前で体を反転させてばんと壁に手をつく。横目で神父を睨みつけると、そのまま部屋から走り出る。壁には鳥の爪のような血の手形がついた。

神父は思いあぐねて、ユダヤ教のラビのところに相談に行く。

背の高い僧侶の後ろ姿に、「秋葉だ」というささやきがあちこちで起こった。

悪魔にとりつかれて身動きできない聖女の物語を語って聞かせる
と、

「悪魔がとりついたのかもしれない、または天使が彼女から飛び去り、彼女自身が残っただけかも知れぬ。それが彼女の本性でないという証拠があるだろうか」

スリンは激昂する。

「悪魔が不在の時の彼女をあなたは知らない。聖徳に至る道を守ってくれと私に泣きついた。彼女はいま森に迷う純粋で幼い魂なのだ。救わねばならない」

ラビは憐れむようにスリンを見つめ、そしていった。

「あなたは悪魔を知らない。それを身の内に入れてみなければ、彼

らのたくらみは分からない。これまで彼女の内に住んでいた悪魔が、あなたの中に入りたがっている。彼らは、あなたが忌まわしいと思っていた、ありとあらゆることをあなたにさせようとする。そして最も忌まわしいと思っていたそれらのことが、あなたを虜にし、あなたの心を言い知れぬ甘さでいっぱいにするだろう」

「……馬鹿な」

後部の座席で画面に見入りながら、賀来は顔が熱くなるのを感じていた。場面をつなげてこうして見ると、まるで自分の物語を大勢の客とともに見せられているようだ。その一方で、

……俺はヨアンナじゃない。

そう呟いて抵抗した結城の横顔が同時に浮かんた。

スリンは毎朝自らを鞭打つ。身の内に入ろうとする悪魔を追うにはこれしかない。そしてある日、あなたも身を清めよとヨアンナに命じる。

ヨアンナは後ろを向いて服を脱ぎ、白い背中を向ける。どうぞ私も打ってください。

胸をうたれたような顔でスリンは鞭を握りしめる。

……あなたのために。

そして振り上げたスリンの鞭が一閃、ヨアンナの背中に打ちおろされる。二度、三度。目を閉じてのけぞるヨアンナ。その背中 of 傷に、しかしスリンは陶醉する。これも悪魔の罠か。

「どうぞ、やめないで。私を聖女にしてください」

かすかな声でヨアンナはスリンを呼ぶ。スリンはぞくりと身を震わせる。

画面を見ながら秋葉の胸に一つの仮定が展開される。自分の知る結城に、自死を選ぶ要素はやはりなにひとつ、ない。でももし、彼の中にもまたヨアンナのように、ひととき無垢の時が訪れる瞬間があったなら。

彼は昔、ああじゃなかった。それ以外は言いたくない。

賀来の言葉から逆算して、戻ってきた昔の彼が、賀来に助けを求めたとしたら。

オレの妄想は美しすぎるだろうか。でも、二人に出会ったこと、この物語との共鳴、すべてが偶然とは思えない……

スリンは鞭を置き、ヨアンナの背中に浮かびあがる傷に接吻する。ヨアンナの口からかすかな溜息が洩れる。

会場は静まり返った。

スリンは自らが陥りかけている罠に苦しみ、ある日、木の格子越しにヨアンナの前に頭を下げる。

「私はどうしていいかわからない。これ以上あなたに近づけない。これは許されないことだ、ヨアンナ」

ヨアンナは、スリンの顔をじっと見つめる。その眼に涙が浮かぶ。格子の間から差し出される白い手。スリンはそっと手を取ると、その甲にくちづけた。ヨアンナは祈るように神父の頭を抱え、神父は頭をあげ、カメラは背後にまわり、二人の顔が重なったのを示唆する影が壁に映る。

瞬間、ヨアンナの中の悪魔がスリンに踊りこむ。スリンは頭を抱えて部屋の外に転がり出る。悪魔の声が響く。

『捕えたぞ、捕えたぞ。お前を俺のものにする』

「出て失せろ」スリンは叫んで頭を抱える。「この体から出ていけ」
『出て行くと、そしてあの女の体を棲家にしてやる。一生、永久に』

「待て、私の所にとどまればヨアンナを開放するのか」

スリンは壁をかきむしりながら問う。

『永遠に戻らない』

「約束するのだな、彼女を聖女にするのだな」

『聖女になる、なる……しかしそれには生贄が必要だ』悪魔の声が反響する。

「わたしはなにをすればいい」

『罪なき者の血と肉を』

「すべて約束する、いいか、私の体から出て行くな」
静寂が訪れる。壁を叩きながらスリンは呻く。

「支配するがいい、私は受け入れよう。世間はあざけるがいい、のしるがいい、私は落ちよう。悪魔に憑かれたスリンと、私を呼びならわすがいい」

その夜、修道院の馬小屋に、斧を持って向かうスリン。
眠る馬屋番の枕元で祈りをささげる。

打ちおろされる斧。悲鳴、顔に飛び散る血しぶき。

「神よ私を放逐してください。私は今サタンに身を捧げました！」
両手を広げてスリンは叫ぶ。

スリンは逮捕され、教会に引き立てられる。薄暗い聖堂で、ラビがスリンを見下ろす。

「なぜ罪なき者を殺した。何か言うことはあるか」

スリンはつぶやく。

「この罪を持って、私の中にあの方の悪魔を呼び込んだ。今あの方は清らかです」

「犠牲になった者への言葉は」

「言葉で償えるものではない。身の内の悪魔は私とともに火刑に処されるだろう。その業火の苦しみをもって私を許してほしい」

ラビは静かにスリンを見下ろす。

「あなたは何の名においてそれをしたか。神のためか、悪魔のためか」

スリンは呟いた。

「…神のためでなく、悪魔のためでなく、ただあのかたのために、私はこれを行いました」

ピアノの旋律が変わる。スリンが見上げると、いつの間にかそこにはヨアンナが立っている。

「……ヨアンナ」

スリンはその白い立ち姿に目を潤ませ、膝を折り、祈るように足

元に跪いた。ロザリオが床にこぼれる。

「どうかわかってください。ただ愛のために、それだけのために、私は罪を犯しました。その咎で命を神にささげるのに悔いはありません。愛のためにしたことだと、どうかそれだけわかってください」
彼女は手を延べ、スリンの頭に置く。スリンは法悦に震え、その手を取って額に当てる。

「すべてはあなたのためだった」

天使のようなヨアンナの顔が、長い睫毛と白い頬と澄んだ瞳が、そのすべてでしつとりとスリンに笑いかけ、やがて闇の中に幻のようになくなってゆく。

火刑の煙が空に立ち昇ってゆく。祈りの歌が響く。修道女たちは踊るのをやめ、鳥が渡る空を見上げている。森の迷い人を救う聖堂の鐘が、音もなく揺れ続ける。

画面にF i n . の文字が出て、しばらく席を立つ者はいなかった。

消えてゆく文字を見ながら賀来はただ、カメラの前で結城に告白し、鞭打ち、くちづけたときの、髪に手を置かれたときの、その瞬間ひとつひとつの悲しみとときめきを思い出していた。

かすかな記憶のなかにもそれはある。僕は、たぶん結城と同等の罪を犯した。その事実が消せない。

でも、彼という限り、耐えられる気がする。それを、彼のためにささげた犠牲と思うなら。一生思わせてくれるなら。

秋葉、……もしかしてそのために、君はこれを作ってくれたのか。胸の昂まりと震えは、いつまでも消えなかった。

丸めた脚本を手に、ぽんぽんと足を叩きながら結城を探していた秋葉の目に、自販機で飲み物を買う彼の細い姿が映った。

さっきまでスクリーンにいた姿との距離に改めて驚く。

「探したぜ。こんなさびれたトイレわきの自販機なんかじゃなくて、学祭なんだから売店の飲み物買えばいいのに」

歩み寄る秋葉をちらりと見ると結城は蓋を外し、上を向いてボトルの水を飲む。細い首をなかば苦しげに水が通過するのを、秋葉は黙って見ていた。

「映画成功したんだな」

口をぬぐいながら結城は言う。

「その通り。なんでわかる」

「表に座ってたなら、学外の女子校生とかよく知らないヤツとか、次々来ては握手だの写メとらせてだの、うるさくて居場所がない」

秋葉は愉快そうに笑った。

「そんな経験、お前なら慣れっこに見えるんだけどな」

「嫌われたり避けられたりすることはあっても、同級生に好かれたことなんてないよ」

秋葉は結城と並んで近くのベンチに腰をおろした。

「……改めて画面を見直して思ったんだ。お前には心から感謝してる。オレの人生最後の時間に、お前みたいなやつに出会えたのは奇跡だ。出てももらえるとは実は最後まで思ってた。本当に、ありがとう」

結城の右手を大きな手で握る。

結城は戸惑ったように少し黙っていたが、やがて口を開いた。

「いい作品になると思ったからどんなシーンでも応じたんだ。お前は才能の塊だ、月日を重ねればかなりの大物になれたと思う」

なれた。その表現に少し痛みを感じながら、秋葉はぼつりと言っ

た。

「へんなもんだな、おまえが人のいのちを惜しむとは」

「どうして」

秋葉は声のトーンをおとした。

「いっちゃなんだが、おまえが望んだものでなくとも、おまえにかわった人間は死にすぎだ。死神レベルだよな、まるで」

結城も考えないではなかった。倉庫の事故を含めればもう、一年で六人……

「お前を入れれば七人か」

「ひどいやつだな、まだ入れるなよ」

秋葉は笑った。そして、ぽんぽんと結城の肩を叩いた。

「オレの最後の友が美しい死神だ。おれは結構満足してるんだぜ、最高のプレゼントだ。オレが死んでも、映像は残る。世界はいつかオレを評価するだろう、そして夭折した天才監督と、結城美智雄という無名の美しい役者に震撼するのさ」

「……お前、幸せなやつだな」

結城は苦笑交じりに言う。

「ほんというとな、オレは賀来に嫉妬してるんだ。あの役は、やっぱりオレがやりたかった。みんなあいつにとられちゃった」

背後で車のクラクションが鳴る。

「最近いろいろ数値が悪くてな、いちいち送り迎え付きだ。じゃあ、オレが無事ならまた明日」

結城は背を向ける秋葉に手を振った。

六人……。あと何日、それは六のままでありつづけられるだろう。結城はペットボトルをひねると、近くのゴミ箱に放り込んだ。

さよなら、ヨアンナ。

夜更けの教会の食堂で、賀来は結城と向かい合う席に静かに座っ

ていた。

日南が寝る前に入れてくれたお茶が、手の中でもう冷めている。

「学園祭は明日もあるけど、なにかもう大きな仕事が済んだ気がする……」

賀来はぽつりといった。

「僕が神父で、君が尼僧で、そうやってもう一つの人格で生きていた時間。

なんだか、思い返しても夢みたいだ。すごく濃い時間だった。結城はどう」

黙って夜の窓を見る結城の横顔のラインは、確かにヨアンナのものであった。賀来の胸に何か甘い切ない思いが押し寄せる。もう彼女はどこにもいないのに。

「俺はもう忘れる、あの役をやったことも。明日がすんだらすべて忘れない」

結城の言葉に賀来は少し驚いた。

「そんなに嫌だったんだ……」

「嫌というのじゃなく、終わらせるためにやってたから」

終わらせるため……。演じている間の結城の気持がつかめなかった賀来は、その言葉になにか納得した。

「そうだね、君はやりたくてやってたんじゃない。最初から秋葉のためにあれを演じてた」

「奴のためじゃない」

「え、じゃあ」

結城の目がまっすぐこちらを見ている。賀来は言葉を失った。

自分は違うと言いながら、ヨアンナを演じたのは……

「お前は将来も、あの服を着て生きるんだなって。そう思って見たよ、ずっと。よく似合ってた。

お前は神学校へ行く、そして神父になる。俺は……」

何か言いたげにして、それきり結城は言葉を切った。

「そうだね、それまでのどんな時より、社会に出てから着る服がた

ぶん一番長い。今着ている制服も、あと一年ちよつとだし」

「そんなにない。ひと月以内には脱ぐことになるんじゃないか、俺は」

「え、どうして？」

「村越神父は俺に学校をやめさせたがってる。ここも出ていくことになるだろう」

賀来は驚愕した。

「そんな馬鹿な、何も聞いてない！　嘘だよ、そんなの」

思わず大声を出して椅子を引く。結城は湯のみの裏についた水滴をなぞり、指でテーブルに何かの模様を書くようにした。

「学園で校長と話し合っているのを聞いたんだ。明日にでも恩田神父に話しに行くといってた。俺たちに話があるのはすべて決まってるからだろう。今までさんざん考えて出した結論なんだろうな」

突然の話に賀来は言葉が見つからない。いつかもしかして、思っていたことが、まるで冷たい武器のように目の前に突き付けられている。

「やめさせて、それで、どこへ……」

「地方の学校とか言ってた。東京から遠くて、寮のあるところじゃないか」

賀来の頭は混乱した。勝手にそんなことが決められ、何もできないままに僕たちはばらばらになる……　そんな馬鹿なことが。

「どうしようもないこともあるんだよ。俺たちはまだ高校生だ。せめて卒業していれば」

結城はズボンから細い透明なタブレットを出し、掌に銀の粒をざらりとあけた。

賀来の前に掌を差し出す。

「食う？」

「いらない。なんでそんなもの……」

「いらいらしたとき、気分の悪いとき、すっきりするからって秋葉がくれた」

言葉もない賀来の前で口に幾つか放り込む。淡々と語る結城の気持ちは、いつものように賀来には捕えられない。

「俺に関して、もうあれこれ察してるんだろう。ことによって警察に相談、ともちらついていた」

賀来の背筋が凍りつく。警察？ あ的神父がそんなことまで言うなんて。

それより、今の結城の心中を考えると、別の可能性に怯えずにはいられない。

「とにかく、勝手に決められていい話じゃない。僕からちゃんと聞いてみる。僕たちの問題だ、教会と学校じゃなくて」

「うん」

賀来の震え声に簡単に返事をする、結城はそのまま立ちあがった。賀来は思わず結城の袖を引いていた。

「なに」

「君の気持がわからない。何か、わかるように言って」

「俺の気持ち？」

賀来 of 瞳が、不安定に揺れている。

「結城、いい？ 僕がちゃんと話すから、それまで勝手なことはしないで。誰にもなんにもだよ。わかった？」

結城は片手をテーブルにつくと、賀来 of 瞳をしばらく見つめ、そのまま顔をおろして、賀来 of 唇に蝶が止まるような小さなキスをした。

「もう、そうじゃなくて」 思わず赤面しながら抗議する。

それには答えず、左手で賀来 of 頭を抱え込むようにすると、今度は弾けるような青い香りとともに結城の唇が賀来 of 開きかけた唇を覆い、そのまま言葉を閉じ込めた。

「ゆ……」

いきなり結城の香りが、体臭と体温が、抱き締めるからだごとくちびるから賀来に流れ込んでくる。あの一晩から、結城に触れられるだけで、賀来 of 全身が一気に燃え上がるようになっていた。結城の

舌が口内をまさぐり、左手が、賀来の背中に沿って下になぞるように降りて来る。賀来は自分の呼吸が早まるのを意識しながら、切れ切れに言った。

「結城、駄目だ、ここでこんな」

そういいながら、背中に回した自分の手が結城の服にしがみついているのを自覚する。

結城はふと身を離すと瞳を見つめ、掌で賀来の紅潮した頬を軽く二度叩いた。タブレットを賀来の手に押しつけるとそのまま立ちあがる。

「わかった」

それだけ言うてくると背中を向ける結城を、賀来は茫然と見送った。

ペテロ祭二日目の朝は、雨だった。

どんよりとした空から冷たい小雨が降り注ぐ中、遠く風に乗って教会まで、祭りの案内をする放送が聞こえてくる。

村越神父は空を見上げ、灰色の傘を広げると、宿舎から出て庭を横切った。

ふと、聖堂の入口の軒下に立つ賀来の姿が目に残る。

「賀来君！ 朝食の席にいないので心配したよ。こんなところで何を」

頭を下げると傘もささず、神父のもとに歩いてくる。

「……ただ、見送りに。恩田さんのところにいらっしゃると聞いて」

「そのための見送りかね？ 傘もささずに」

神父は自分の傘を賀来の頭上にさしかけた。思いつめた表情の賀来とそのまま肩を並べて歩く。

教会に来た頃は自分の胸辺りに顔があったのに、いつの間にか目の位置が自分より上になっている。少しの感傷を伴った感慨があった。

「……何の話をしに行くんですか」

「恩田さんとか？ 昔からの友人だし、まあいろいろと相談をね」

「僕たちのことですか」

神父は賀来の顔を見た。

「誰かに何か聞いたのか」

「以前、恩田さんにお会いした時、僕のことを自慢していたとか、近く話をしたいとおっしゃっていたのを聞いたので」

「ただの世間話だよ。君には関係ない」

「……僕らは、僕と結城は、ずっと一緒にいられますよね」

神父は黙り込んだ。そしてつぶやくように言った。

「ひとりひとりになってみるのもいい。君には自分のことだけ考える時間も必要だ」

「いりません。時間なら自分で作ります。僕らのことは僕らに決めさせてください」

「恩田さんは次にこの教区を担当するんだよ。これ以降は大人の話になる」

「村越さん」

強い調子で、賀来は彼の名を呼んだ。神父は立ち止まる。

「僕にとって彼がどんな存在であったか、わからないことはないはずですよ。僕らがどうやって生きてきたかも。結城だけ見離したりはしませんよね。僕らはあなたに守られていると、信じていいんですよ」

張り詰めた声だった。神父は賀来の、濡れたように震える瞳を見た。漆黒の、いつでも正直で、いつでも何かに苦しんでいた瞳。

「……悪いようにはしない。そう思いつめるんじゃない。君のことはちゃんと守る。見送りはここでいいよ」

優しく言い、肩を叩くと、そのまま背を向ける。長い階段の上で、賀来は足を止めた。

僕のこと。僕だけ……

もう、結城は……

もうできることはないのか。神父の背中が坂を下ってゆく。もう

止められないのか。なにかできることは。何か……

……いらいらしたとき、気分の悪いとき、すっきりするから。

賀来は涙をためながら、震える手でタブレットの容器を取り出す。不意に、あの甘い香りが背後から流れて来る。

……結城。

眼の端に、風になびく髪と、高い鼻が映る。後ろから伸びた手が、力なく下げた賀来の右手を上からそっと握る。

親指の上に親指、人差し指の上に人差し指。冷え切った指に、結城の体温が流れ込んでくる。

タブレットの出口を下に向けると、結城は賀来の指を押しだし、ゆっくり蓋を開いた。

ポン。

流れるように零れおちる銀の玉が次々と雨にぬれた階段に跳ね返り、きらめきながら跳ね落ちてゆくのが見える。傘を差した神父の足もとに迫り、追い越し、流れ落ち、神父の革靴が流れを踏んだと見えた途端、体のバランスが崩れ……

あおむけに倒れた神父が階段で後頭部をしたたかに打ち、傘を手放し、体を傾けながら滑り落ちて行くのを、まるで映画の一シーンのように、スローモーション映像のように賀来は眺めていた。

右に左に体の向きをかえながら転落し、その体が階段の下で止まっても、遠い銀の流れは煌めきながら、水の流れに沿って坂の下までなだれ落ちてゆく……

耳元に唇を寄せて、結城が歌うように優しく囁く。

……賀来、一緒に生きよう。

強ばった手から容器を取り上げ、結城はそのまますいと雨の中に消えた。

賀来は自分の口がつぶやくように村越の名を呼び、やがてそれが悲鳴に代わるのを、遠い世界のここのように聞いていた。

その叫びの余韻の跡を、胸の中のおさない声が追いかける。

……うん、一緒に生きよう、結城。

「結城の教会の神父がやばいらしい」

映画製作に影で協力してくれていた竹之内が、小声で秋葉に告げた。

「やばいってなんだ。賀来も休みだし」苛々とビデオをセットしながら秋葉は答える。

「さっき教会前の階段から落ちて救急車で運ばれたって。なんでも頭の骨折って意識不明だって」

「なんだって？」

秋葉は準備の手を止める。

「結城は」

「今朝は早くから登校してるよ、校庭で見かけた」

「じゃあはやく知らせたほうが」

外に目をやると、とりどりの傘の下、周りに集まる学生たちと珍しく談笑している背の高い結城が目に入る。

「おい、結……」

呼びかけた声を呑みこんで、秋葉はこちらを向いた結城の瞳を見た。

……いや、まさか。

茶色く透き通る瞳がかすかに笑っているように見える。

七、という数字が、頭の中でぐるぐるまわった。

学園祭翌日の夕方、各賞の発表があり、秋葉の作った映画は生徒投票で大賞を獲得した。保護者を含む来賓の前で上映された映画にしては公序良俗に反するシーンがとか教師たちの間で最後までめ

ていたが、結局生徒人気に押し切られる形となった。

監督の秋葉は重いトロフィーをよろよると、何か心ここにあらずという風に受け取っていたが、主演二人はともに神父の事故の関係で授賞式を欠席した。

神父は意識不明の状態が続き、教会には旧友の恩田神父が来ることになった。

ペテロ祭の後始末も終わり、また日常が戻ろうとするところになっても、賀来の姿が消えたまま、学園は冬休みを迎えた。

「またいい匂いさせてるね」

教会の台所を覗いた恩田が、エプロン姿の日南に声をかける。

「今日はパイを焼いてみたんです。賀来さんに食べてもらえればと思っ」

「彼は相変わらずかな」

「前よりは少し食べてくださるようになったんですけど、やっぱり食欲がないみたいで」

「村越さんは彼をすごく自慢になさってた。転落するところを目の前で見た上に意識不明がこれだけ続いているんだ、心配なのはわかるが、彼の場合あまりに……」

恩田は窓から、宿舎の二階の部屋を見上げた。

寝返りを打ち、短い目覚めから覚めると、いつも今が何時なのか、ここがどこかわからない。隣に結城がいることもあり、いないこともある。姿が見えないと、置き去りにされた子どものように不安になり、暗がりの中で必死に視線を巡らせる。そんな癖がいつの間にかついで、賀来は自分が過去に退行していくように感じていた。

ドアが静かに開き、そして閉まる。身を起こすと、薄暗がりの中で結城が瓶を手立っているのがわかる。

「起きてたのか」

賀来と目が合うと、結城は部屋の灯りをつけ、賀来のデスクチェアに座った。

「ほら」

賀来の目の前に、パタパタと音のする瓶を近づける。

「あ」

瓶の中で、あの金の角の蝶は羽化していた。オレンジに黒の斑点のある小さな蝶が、せわしなく羽ばたきながらガラスに体をぶつけている。

「羽化したんだ。……また、こんな季節に」

ガラスに大きな瞳を近づけて、賀来は小さく微笑んだ。

「一月だからな。外に出したらとても助からない。……前と同じだ」

「前と同じだね」

重ねて賀来が歌うように言う。

「どうしようか、これ」

「また温室を見つければいいんだろう。前みたいに」

「うん、前みたいに」

幼い子どもに読んで聞かせる絵本のように、賀来は言葉を繰り返す。

まるで童話の世界に入り込んだようだ、結城は思う。

あの銀の流れの中に村越神父が消えてから、教会の闇の中に結城と賀来は二人きりになった。恩田が来るまでの十日間、賀来は繰り返し悪夢を見ては結城にすがりついた。

東京に出てきたあの時のように、まるで知らない世界に取り残された子どものように。

思えば村越は、賀来に最後に残された良心の寄り処だったのだ。その港を、自分が奪った。……いや、奪わせた。

賀来はその記憶について一切語ることなく、幼子のように怯えては、まるで唯一の棲家のように結城を探す。

俺はここだ、ここにいます。

抱き締めてもまだ足りず、暗闇に目を見開いて結城の体温を求め、

唇を求め、指を、声を、快樂と苦痛を、繰り返し自分に刻印することを……

> i 8 1 7 6 — 1 0 9 4 <

「あさって、秋葉が国に帰る。空港への見送りにいった帰りにN熱帯植物園に放そう」

結城が優しい声で言う。

「暴れて羽を傷つけないかな。綿に砂糖水をしみこませたら吸ってくれるかな」

「そういうことは日南ちゃんと相談したら」

「そうだね」

賀来のおだやかな笑顔を、何か痛々しいものを見るように結城は眺めていた。痛みも苦しみも、賀来は深いふかい容器にしまう術を見つけたのだろう。決して二度と開かない容器に。そして光のある方向を向く代わりに、自分の姿ばかりを探すようになった。

……俺が、そうした。

成田空港の有料待合室で、ロペス氏は愛用の葉巻をくゆらせていた。

秋葉はもう一人では歩けず、傍らの車椅子にぐったりと座っている。

「息子に最高の作品を撮らせてくれた。あれほど感動したことはない。君たちには心から感謝しているよ」

向かい合わせに座る結城と賀来に、幾分うるんだ感謝の目を向けながら言う。多分言葉にできない心労を重ねてきたのだろう、眼下にはうつすらと影ができていた。

「お前からも何か言うことはないか、エルネスト」

傍らの息子を振り返る。

「……それは、そっちじゃないかな」

「どういう意味だ？」

秋葉はやつれた顔をあげて二人を見た。

「オレを見ろ、もうどうせあとひと月も持たない。おやじも君たち二人の秘密は誇りにかけて守るだろう。」

結城、賀来。

まだ言えずに苦しんでいることはないか。最後にオレに預けたい荷物はないのか」

賀来がわずかに反応するのが気配でわかる。目を見開き、膝の手を握りしめる。

結城は賀来のほうをちらりと見ると、ロペス氏に向き直り、呼吸を整えた。

「最後だから、今まで話していないことを手短に言います。」

僕たちが生まれた島はある組織によって全滅させられた。六百人の人間が死にました。僕たちはたった二人の生き残りです。生きているのがばれたら、多分殺される。殺される前に、僕は報復する。そのために生きて、罪を犯しています」

「それは、名のある組織か」

「世界中が知っている。そして信頼を置かれている」

「どんな武器を使って六百人も。国は何もしないのか」

「今まで調べたところでは、多分アメリカの作った毒ガス」

「ということは、組織はアメリカの友人か」

「かつての敵で、核をおとされてからは親友です」

賀来が急に口を開いた。

「結城の発作はガスの後遺症です。そのせいで……」

「僕は変化している、脳神経系統ごと。情緒も、おそらく知能も。他人に対する攻撃衝動が高まり、傷害や殺人は悪いことだというモラルの意味がわからなくなり、涙が出なくなり、学園で測った知能指数は小学校時代よりかなり上がった。自分で金を出してかかったもぐりの医者は、この変化が続けば三十歳前後までだといった」

結城は早口で後を継いだ。秋葉は驚きを隠せない表情で結城の顔

を見つめている。

ロペス氏はしばらく黙り込み、そして口を開いた。

「私たちのコロンビアは、農業以外に収入のない貧しい国だ。だが北米から流入する安い野菜のおかげで、農作物の値などないも同然。コカに勝る収入減はない、これが現状であり現実だ。政府とアメリカの勧める代替え作物を作っても、輸送手段も道路もなくわずかな支援金しかないのでは生活できない」

葉巻の灰を灰皿に叩きつける。

「クリントン政権が掲げた麻薬撲滅政策は、コロンビア計画と呼ばれた。その主な仕事は、コカ畑に除草剤を空中散布するというやり方だ。標的になったのは農民だった、成功するわけがない。食用バナナにトウモロコシにイモ、魚、みんなやられ、住民には奇形や病気が相次いだ。世界がこれをどれだけ知っているか？ 息子の病気も、彼らがブチまいた薬と無関係ではないのだ。君自身と家族と同朋がアメリカの被害者だというなら、君たちは私たちの仲間だ」

秋葉は下を向いて膝かけを握りしめた。

「私たちの助けが必要になったら言いなさい。私たちは国に帰るが、友人は日本に残っている。ナンバーをひとつだけ教えておこう、誰も通さず直接私につながるものだ」

「言ってください、覚えますから」

一切メモを残さない結城のシステムの一つにロペス氏の連絡先が書き加えられるのを、賀来は眺めていた。

「何も語らなければ、君たち二人が消されても誰にも気づいてもらえない。だが今、私が知った。エルも知った。息子は長くないが、私は残る。秘密は決して漏らさないが、君たちが望み、さらに語るなら、私はいつでも聞こう。これは君のプライベートな戦いだだろうが、助けが必要になったら、呼んでくれ」

賀来の唇がわなないた。結城はそっと賀来の背に手を当てながら、右手を差し出した。

「感謝します。忘れません」

「永遠に私もだ、ミチオ」

右手をつかむとロペス氏は結城の、そして賀来の両ほほにくちづけした。

車椅子の秋葉が弱々しい視線を上げて言った。

「……これでお別れだな」

賀来は黙って秋葉に抱きついた。言葉もなく、肩を細かく震わせる。

背中をとんと叩きながら、秋葉は言った。

「お前を一生恨むぞ、賀来。オレの役を奪った分、苦勞しろ。結城と生きる限り安息はないぞ。君に次に勧める本は、ランボーの“地獄の季節”だ。だが君の地獄はたぶん、花畑の中にある」

賀来はどこか夢見るような目でふわりと笑った。

賀来が身を離すと、秋葉は二人を見て言った。

「オレは結構満足してるんだぜ、自分の人生に。そして君たちには同情してる。人生はかくも不条理でいたずらに長く、しかも残酷だ。だがときどき、ほんとうにときどき、歩き続けると、美しい花々に出会うこともある」

「……覚えておくよ」

結城の笑顔を覗きこむようにして、秋葉は語りかけた。

「おい。オレの人工呼吸で助かったことに対する感想は」

「ヤニ臭かった。ちゃんと歯を磨け」

「……この野郎」

最後に結城と秋葉は固く抱きあった。

秋葉は傍らの紙袋から、それぞれの名前が書かれた小さな包みをふたつ取り出す。

「あの映画が入ってる。大事にしてくれ。そして忘れないでくれ、高校二年の秋と冬、君たちとともに過ごした秋葉・エルネスト・メロ・ロペスと言う天賦の才にあふれた老けた高校生のことを」

秋葉は痩せた顔で最後に柔らかく笑った。

手をあげて出発ゲートに彼らが消えてから、賀来は困惑したような声をあげた。

「蝶を見せるのを忘れた」

取り出した瓶の中には、賀来と日南の入れた白い薔薇が窮屈そうに詰まっている。オレンジの蝶は、白い花卉に囲まれて羽を震わせていた。

「あっちにはもっと鮮やかででかい蝶が山ほどいるってさ」賀来の肩を抱いて結城は慰めるように言った。

二人は展望デッキに移動した。

頭上に星、地平に夕焼けが燃え残る冬空の下、風に吹かれながら移動する飛行機のとりのりのテールランプがきらめいている。

結城は手にしたディスクの包みを、賀来に押し付けた。

「観賞用と保存用に二つ持ってる」

「どうして。結城は」

「俺はいいんだ」

「ひとつでいいよ、せっかく秋葉がくれたのに……」

結城は秋葉の乗った飛行機を目で追いながら言う。

「……お前にとっても将来、見るだけで悲しくなるときが来る」

結城は目を細めて言葉を切った。

「だいぶ前、夢を見たんだ、未来の。お前は神父で……」

「結城は？」

結城はぎゅっと長い睫毛を閉じ、痛みに耐えるように二、三度瞬きを繰り返して、呟くように言った。

「眼鏡をかけてた。あとは、……忘れた」

秋葉の乗る飛行機が滑走を始めた。

賀来は結城の胸に顔を押しつけるようにした。

「……まだ、いるかな」

「なにが？」

「ここに」

結城の胸に手を添える。

「ここにいらっしゃる。恩田さんがいった、魂の場所。生きているなら、たまにでも、また会えるよね。生きているなら、秋葉にも、君にも君の中の君にも。生きていなくても、僕が覚えているなら……」

ふと言葉を切ると、賀来は瓶の蓋を回し始めた。

「ここで？」驚いて結城が聞く。

「蝶は空のものだ」

蓋を外すと、結城に渡す。

「結城がやって、あの日みたいに。君のほうが空に近い」

結城は瓶を持って、空に向かって高く掲げた。

強い風にあおられて、白い薔薇の花弁が乱舞するように次々と口から飛び出し、螺旋を描くように舞いあがってゆく。最後に飛び出した蝶は、花弁を追うようにオレンジ色の姿をひらめかせ、一瞬で見えなくなった。

残像の消えた星空の下を、轟音とともに、飛行機が夜空に飛び立つ。

賀来は結城の胸の中で、ささやくように言った。

「結城」

「うん」

「……どこへも行かないで」

結城は賀来を抱く手に力を込め、漆黒の髪に黙って唇を押しつけた。

それから半月後、秋葉・エルネスト・メロ・ロペスがコロンビアの自宅で十九年の短い生涯を閉じたと短い知らせがあった。

独りきりの夜、結城は封印していたDVDを取り出し、再生ボタンを押した。

浮かび上がった最初の画像。漆黒の画面に、短い言葉が浮かぶ。

『俺の生涯最後の恋人、愛するヨアンナに捧ぐ』

結城はふと、もう沸くことも溢れることもないと思っていたある
ものが、自分の底でかすかに青く揺らめくのを見た。

春の終わり、村越神父は静かに息を引き取った。

(Joanna／Blue 了)

Joanna 14 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

といっても、地味で暗い話ですので、通してここまでついてきて下さった方がどれだけいるかわかりませんが、それだけに、その顔の见えない少数のかたには感謝でいっぱいです。

少しでも楽しんでいただけたでしょうか。

読んで下さった方に何がどう届いたかとどかなかったか、こちらとしては推し量るしかないのですが、最後に、感想でも評価でも分かる形で示してくださいましたら心からありがたいです。書くというのは一方通行の孤独な作業ですので。

さらに図々しいですが、もし一部読んで興味を持ってくださったかたがいらっしゃったら、この機会に通して読んでいただけるとすっごくうれしいです。

>i8150—1094<

PINKMINT

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3619/>

Blue

2010年11月12日12時55分発行